2023

研究紀要

第38号

SENDAI IKUEI GAKUEN

秀光中学校
仙台育英学園高等学校

巻　頭　言

秀光中学校
仙台育英学園高等学校
校長　加藤雄彦

新型コロナウイルスについては、感染拡大から４年目に入り長期的な対応が求められる段階に入りました。本学園おいても、生徒の教育を受ける権利を持続的に保障していくため、感染予防及び拡大のリスクを注意深く低減していきながら、コロナ禍以前の教育活動に近づくべき可能な限り努力してまいりました。一方、新型コロナウイルスに対する医学的知見の蓄積やワクチン接種、飲み薬の開発も進み、昨年度と比較すると行事や部活動等の諸活動も平常状態を取り戻しつつあります。何より嬉しいのは、今年度は感染対策を十分にとりながら対面授業が日常化したことです。また、各コースの宿泊を伴う行事や文化祭、スポーツチャレンジ等の生徒が躍動する本学園らしい行事も再開できました。

部活動においては、東北の人たちの待ち望んでいた深紅の大優勝旗が『白河の関越え』を果たし、多くの人たちに歓喜の夢を届けた「夏の甲子園全国制覇」に始まり、ライフル射撃部女子の団体優勝、陸上競技部女子の全国高校駅伝大会での活躍、そして書道部の書の甲子園二連覇など、多くの部活動が素晴らしいパフォーマンスを披露してくれました。学習や諸活動、そして研究の遅れなどにも多くの不安はありましたが、逆にそれを「逆転の仙台育英」としてのモチベーションに変え、多くの困難を一つずつ乗り越えてきた１年でした。

さて、本校職員による研究・研修内容をまとめた「研究紀要」は、今回で第38号を数えます。概要については、これまで研究紀要に掲載した研究・研修の巻末の総目録によって紹介しております。内容は、分野ごとの授業研究に始まり、国際化教育の提案、海外研修や語学研修など多岐にわたっており、仙台育英学園の教育を真摯に支えてきた先人の先生方の教育に対する熱意が十分に伝わるものです。

研究集録第38号に寄稿された先生方の報告内容のトピックとしては、今年度開校した東和蛍雪校舎の在校生研修施設としての位置づけやインドネシア留学生の介護士養成所としての役割の紹介、香川大学で行われた「日本地理学会」において伊藤恵先生が地理総合高校教諭の代表として研究発表を行った「ドローンを活用した高等学校「地理総合」における素晴らしい授業実践の発表に始まり、研究報告ではIB国際バカロレア・ディプロマプログラムの実践英語力や批判的思考力、社会での役割をグローバルな視点で考えるスキルを養うことを目的とするStanford e-Sendai Ikuei 報告、各教科によるブラッシュアップにおける研究報告、ビジネス用のメッセージングアプリであるSlackを使った英作文の指導の実践、ILC青森から寄せられた「通信制課程におけるメタバース（仮想）空間を用いた課題作成を通して得られた成果と課題について」など多岐にわたっており、本学園生徒の明日、さらに将来につながる学びの進化である「生きる力」を育む内容となっています。

また、各コースから待ちに待った研修旅行の報告も寄せられ、外国語コースのハワイ研修や情報科学コースの沖縄研修旅行での沖縄校への視察も紹介されています。

今後も本学園の教育活動が、新しい時代の教育に一石を投じる存在になるよう一層研究・研修を重ね、仙台育英学園の信頼をさらに高めるべく発進していきたいと思います。

研究紀要38号

巻　頭　言 …… 加藤　雄彦

トピック

（1）令和４年度「東和蛍雪校舎研修」のまとめ
…… 東和蛍雪校舎担当　佐々木邦治 …… 1

（2）高等学校「地理総合」におけるドローンを活用した授業実践
…… 特別進学コース　伊藤　恵 …… 10

Ⅰ　研究報告

（1）秀光中学校・秀光コース
国際バカロレア ディプロマプログラム「言語A：文学」授業実践報告
…… 秀光コース　横山　佳絵 …… 18

（2）情報科学コース
対面授業でのClass活用の可能性 …… 情報科学コース　佐々木りせ …… 22

（3）令和４年度 外国語コース Stanford e-Sendai Ikuei 報告
…… 外国語コース　今川　里菜 …… 26

（4）観点別評価の実践 …… 英進進学コース　竹ヶ原孝則 …… 35

（5）エナジードの導入 …… フレックス・技能開発コース　針生　清人 …… 38

（6）情報BUについて …… 教科センター情報担当　日野　彰 …… 40

（7）ICTを積極的に活用し双方向性を重視した授業
…… 社会科コンダクター　小松　敦 …… 42

（8）スラックで英作文を指導してみた！ …… 英語科コンダクター　御代　力夫 …… 45

（9）教育×メタバースの試行から見えた成果と課題
…… 広域通信課程　ILC青森　村上　淳 …… 51

Ⅱ　令和４年度　研修報告

外国語コース
第２年次　ハワイ研修 …… 武田由紀子、テリー …… 57

情報科学コース
第３年次　沖縄研修旅行 …… 武田　若葉 …… 67

英進進学コース
第３年次　沖縄研修旅行 …… 松井　有生 …… 70

フレックス・技能開発コース
第２年次　沖縄研修旅行 …… 河原愛利沙 …… 76

Ⅲ　その他

総目録（第１～37号）

編　集　後　記

トピック

令和４年度「東和蛍雪校舎研修」のまとめ

東和蛍雪校舎担当　　佐々木邦治

Ⅰ　はじめに

仙台育英学園高等学校が2000年の宮城国体の際に、現在の登米学習センターを開設した縁にはじまり、2010年に文部科学省が立ち上げた「みんなの廃校プロジェクト」を活用した取り組みで、登米市より仙台育英学園と加藤利吉先生との親和性がある登米市東和町内にある旧鱒渕小学校の譲渡を受け、2022年７月22日に開校式記念式典が挙行され、**「１．建学精神を学び、生徒が自らの志を立てるための教育研修所」「２．インドネシアからの留学生の授業や実習に励む介護士育成所」「３．本学園の卒業生が残した輝かしい功績のトロフィーや盾や資料の展示場所」**の三つの活用の柱を立て研修を行いました。この柱を中心に成果と課題をまとめます。

【東和蛍雪校舎外観】

【開校式では獅子太鼓部が獅子舞披露】

Ⅱ　研修の成果と課題について

１．建学精神を学び、生徒が自らの志を立てるための教育研修所

今年度は、５月29日のIB（秀光コース）を皮切りに、コースごとの新１年生研修が30回と、ILC宮城の生徒、秀光中学校の移動美術教室が行われました。（別紙資料１）

創設者加藤利吉先生の少年期の苦学していた「蛍雪時代」等を展示紹介し、「北の国（ふるさと）へ」をはじめとした様々な教材を活用しながら ① 親和性、設置の意義、校歌の意味、② 魅力満載コンテンツの紹介 ③ 登米市の郷土料理の「はっと」の粉をねる等の研修を行い、④ 研修後には家族にあてたはっとメールを作成し、好評でした。（別紙資料２）

①【東和蛍雪校舎設置の意義】

及川甚三郎翁（1854 ～ 1929）

親和性

炭百俵の苦労

世界を俯瞰した功績

縁

加藤利吉先生（1862 ～ 1962）

▼ 炭で業を成す

鱒渕は明治の時代のカナダ移民のパイオニア生誕の地であり、及川甚三郎翁は多くのカナダ移民を輩出しました。明治39年（1906年）水害、凶作に苦しむ村民を救おうと及川甚三郎をリーダーとして、村民83人がカナダに新天地を求め、太平洋の荒波を乗り切って渡航し信念を達成しました。及川甚三郎翁は、炭で業を成しカナダに渡った偉人です。その開拓者魂は今も生きています。加藤利吉先生も尋常小学校高等科を卒業し16歳の時に東京で勉強したいという志を抱き、会津若松の良質な炭百俵を貨車に積んで上京し、炭を売って学資に充て一心に勉強しました。このようにお二人には炭を原資に学び続け、将来に夢を馳せた親和性や、ご縁があります。

▼ 鱒渕（登米市）を代表する偉人及川 甚三郎翁と学園創立者加藤利吉先生の共通点

- 後輩や部下を大切にしてみんなが豊かな生活が送れるように心がけた至誠の人
- 英語や外国の事情を分からなくても良いものは吸収しようと努力を重ねた質実剛健の人
- 新しいものに強い関心を持ち抜群の行動力に満ちた自治進取の人
- 貧困家庭で幼少期を過ごし長男でなかったため後継ぎにならなかった人

②【魅力満載コンテンツを紹介】

▼ エントラスト空間

＜利吉先生の絵画がしゃべりだす！＞

（例）・わしが利吉だ　・今日は仙台育英学園を知ってくれ
・廊下を走るなよ　・何か気づいたことがあったら教えてくれ
・ここはみんなのふるさとだ
・わしと及川甚三郎さんはどこかにいるんだな

＊ 来訪者に驚きによるインパクトを与え、これから過ごす時間への期待値を醸成します。

▼ 様々な映像や展示による学び

「**談話室**」に掛けられている液晶画面に、校歌の世界観を象徴する映像と、その映像に込められた解説がプラスされた映像が流れます。利吉先生の想いがたくさん込められた格調高く勇壮な校歌を、生徒により深く理解してもらえる場となっています。また、利吉先生の波乱に満ちた生涯と教育一筋の生き方を学ばせる「北の国へ」ダイジェスト版も観られます。

その他、「**栄光の間**」では、先輩達の汗と涙の結晶である成果物や展示品を観ることにより、本学園の誇り高き伝統を継承する意欲を醸成します。

「**蛍雪の間**」は及川甚三郎翁と加藤利吉先生が貧しい中、勉学に励んできた蛍雪の時代の様子を体感できます。

▼ 鱒渕農園

「鱒渕農園」は東和蛍雪校舎の目の前にあり、木製の大きな看板が訪れた人の目を引きます。

植えた作物は自然に恵まれた肥沃な土地で元気に育ちました。秋には秀光中学校の１年生がジャガイモ（メークイン・男爵イモ）、サツマイモ（ベニアズマ）、エダマメ（黒五葉）などの収穫体験に訪れます。

③【登米市の郷土料理はっと汁】

【調理ボランティアさんに教えてもらいます。】

▼はっとの生地「小麦粉」を練る体験

登米の伝統的な郷土料理「はっと汁」は、約400年前から作られています。米所として知られた登米では、作った米のほとんどを、現代で言う税金のように伊達藩への献上品として納めていました。 そのため農民は、米の代用品として小麦粉を練ってゆでたものを食べていました。 この食べ物が農民の間で好んで食べられるようになると、 登米の領主は、米づくりが疎かになることを心配し、食べることを「法度」としました。（＊注釈１）

それ以来、この料理が「はっと」と呼ばれるようになったと言われています。「はっと汁」は、農民の知恵と工夫が詰まったふるさとの味です。

（＊注釈１）「はっと」の由来は、「はっとを食べた大名が、『こんなにおいしい料理を農民に食べさせるのは、ご法度だ！』と言った」という説もあるなど、諸説あります。

「はっと汁」は、地域や家庭、季節によって具材や味付けが異なります。東和蛍雪校舎では、ゴボウ、ニンジン、シメジ、長ネギ、豚肉、油麩などを使います。

鍋にお湯を沸かし、切った具材を入れて、味付けをします。そして、はっとの生地を薄く延ばしながら鍋に入れ、 はっとが浮き上がってきたら、醤油、めんつゆ、酒、出汁などで味を整え、 最後に油麩とネギを加えて煮込めば「はっと汁」の完成です。

農民の生き抜く力と知恵が生んだ「はっと汁」は、「逆転の仙台育英学園」の精神にも通じます。伝統ある食文化を、東和蛍雪校舎で体験してもらいます。

【木製食器に盛り付けされたはっと汁】

④【家族へ感謝と決意を伝えるはっとメール】

研修の最後にグループのカメラ係が、グループの集合写真を撮り、写真シールへ印刷し、グループ内に配布します。

そして、各自がその写真を「はっとメール」の裏面に貼り、家族への感謝とこれからの学園生活の決意を「はっとメール」」にしたためました。

＜成果＞

○　生徒のアンケート結果（別紙資料３）を見ると、どの項目もおおむね好評で、４と３の評価がほとんどでした。生徒にとって満足のいく研修であったことが伺えます。

○　熱心に研修報告書に取組、心を込めはっとメールを書き、日頃なかなか言えない感謝の思いなどを記し、ポストに投函したりする姿は微笑ましく、はがきが着いた時の家庭での嬉しそうな会話が目に浮かびます。研修報告に記した今後の生活への決意や、家族に向けたはがきなど、そのときだけの研修ではなく、その後の生活において、生徒一人一人が笑顔になり、仙台育英学園の生徒であるという誇りを抱き、建学の精神を理解し、生徒自らが志を立てる一助となるような研修になったと思います。

＜課題＞

○　東和蛍雪校舎は自然豊かな東和町鱒渕に存在するすてきな木造校舎です。生徒から「コテージみたい。」「旅館に来たみたい。」との声が上がり、そこにいるだけで癒しの空間を与えています。この環境を活かし、創意工夫を凝らした指導法を試み、今後も生徒の研修報告で９割を超える生徒が、東和蛍雪校舎に研修に来て良かったと思える施設にしていく必要があると考えます。

2．インドネシアからの留学生の授業や実習に励む介護士育成所

＊ 今年度は、実施できなかったので、次年度に向けて、施設や学習用具、学習内容を整備していきます。

3．本学園の卒業生が残した輝かしい功績のトロフィーや盾や資料の展示場所

＜成果＞

○部活の種類ごとに見やすく展示することができ、生徒は興味をもって見学し、先輩の偉業を尊敬し、憧れをもち、自分もがんばろうという意欲を高めています。

○展示場所に余裕があり、ゆったりと見学することができています。

○12月の優勝旗企画展でも、見ていただくことができ、仙台育英学園高等学校の活躍の様子を広めることができました。

＜課題＞

○針金を張るなど、地震対応をもっと強化しなければいけません。

○運動部だけでなく、文化部の活躍も展示できるようにしたいと思います。

4．その他

＜成果＞

○コロナ禍の下、養護教諭の的確な指示と環境整備で、感染対策が確実にできました。

○オンラインで、引率の先生方と事前に打ち合わせを行い、事前にアレルギーや健康調査結果等を送っていただいたりしたことは、安全に研修を行うのに大変有意義でした。

○昼食や休憩には、理事長加藤雄彦校長先生がデザインしたかわいいマグカップで、おいしい仙台育英学園オリジナルの紅茶を味わうことができ、生徒は大変喜んでいました。帰りには記念のマグカップと東和蛍雪校舎の思い出をもち帰ってもらうことができました。

＜課題＞

○登米市産の食材を取り入れ、さらに郷土の味を良いものにしたいと思います。

○スズメバチの大量発生や蛇の出現などもある自然豊かな校舎なので、今後も安全面に配慮した環境整備に細心の注意を払って臨みます。

○次年度は「サステナブル農業教育プログラム」等、東和蛍雪校舎ならではの施設整備を、理事長加藤雄彦校長先生の御指導の下、鋭意取り組んでいきます。

Ⅲ　終わりに

東和町鱒渕で仙台育英学園の伝統を継承し、地域の方々と共に、このかけがえのない美しい風土を活かしていきたいと思います。更に、本施設が仙台育英学園高等学校の“新しい学びの場”となるとともに、地域に開かれ信頼される教育施設になるように、誠心誠意努めてまいります。

＜**別紙資料１**＞　東和蛍雪校舎研修参加生徒数 所属コース・一覧（実施後集計）

No	月・日	参加・所属コース	参加生徒数	備 考
1	5月２９日(日)	ＩＢ　（秀光コース）	３２人	
2	7月　5日(火)	１Ｊ１（情報科学コース）	３２人	
3	7月　6日(水)	１Ｊ２（情報科学コース）	３４人	
4	7月　7日(木)	１Ｊ３（情報科学コース）	２８人	
5	7月１５日(金)	１Ｊ４（情報科学コース）	３２人	
6	7月２０日(水)	秀光中学校１年	５０人	移動美術教室
7	8月３０日(火)	１Ａ１（英進進学コース）	３１人	
8	8月３１日(水)	１Ａ２（英進進学コース）	３４人	
9	9月　1日(木)	１Ａ３（英進進学コース）	３０人	
１０	9月　6日(火)	１Ａ４（英進進学コース）	３７人	
１１	9月　7日(水)	１Ａ５（英進進学コース）	３５人	
１２	9月　8日(木)	１Ａ６（英進進学コース）	３１人	
１３	9月１５日(木)	１Ｇ１（外国語コース）	２１人	
１４	9月１６日(金)	秀光中学校１年	なし	収穫祭中止
１５	１０月　4日(火)	１Ｇ２（外国語コース）	２７人	
１６	１０月　5日(水)	１Ｔ１（特別進学コース）	３５人	
１７	１０月　6日(木)	１Ｔ２（特別進学コース）	３７人	
１８	１０月１８日(火)	１Ｔ３（特別進学コース）	３６人	
１９	１０月１９日(水)	１Ｔ４（特別進学コース）	３５人	
２０	１０月２０日(木)	１Ｔ５（特別進学コース）	３８人	
２１	１０月２１日(金)	１Ｔ６（特別進学コース）	３７人	
２２	１０月２５日(火)	１Ｔ７（特別進学コース）	３６人	
２３	１０月２６日(水)	１Ｆ１（フレックス）	２５人	
２４	１０月２７日(木)	１Ｆ２（フレックス）	２８人	
２５	１１月　1日(火)	１Ｆ３（フレックス）	２６人	
２６	１１月　2日(水)	１Ｆ４（フレックス）	３５人	
２７	１１月　8日(火)	１Ｆ５（フレックス）	１２人	
２８	１１月　9日(水)	１Ｋ１（技能開発）	２５人	
２９	１１月１０日(木)	１Ｋ２（技能開発）	３４人	
３０	１１月１１日(金)	ＩＬＣ宮城	１７人	
３１	１１月１５日(火)	１Ｋ３（技能開発）	２８人	
３２	１１月１６日(水)	１Ｋ４（技能開発）	３０人	
３３	１１月１７日(木)	１Ｋ５（技能開発）	３１人	
３４	１１月１８日(金)	１Ｍ１（秀光コース）	１４人	
計			１，０１３人	

＜**別紙資料２**＞　仙台育英学園高等学校「東和蛍雪校舎研修」新入生オリエンテーション指導計画案

対象	新入生
方法	クラス毎参加
日程・時間	［日程］ • ８：30～　宮城野校舎　多賀城校舎　出発 • 10：15～10：30　東和蛍雪校舎着（エントランス空間）　休憩 • 10：30～10：45　日程説明　東和蛍雪校舎設置の意味について（集会場） • 10：45～12：25　グループ研修 ◎グループ研修は事前に８グループに編成しておく。（男女混合4～５人編成で、 • リーダー・はっと汁係・おにぎり係・デジカメ係・片付け係を決めてくる。） １班～４班：集会場（はっと汁調理実習、小麦粉をねり、つむ体験）　40分 ５班～８班：談話室（校歌、蛍雪の間見学、栄光の間見学）　40分 ※ 集会場、談話室を（移動時間10分を含め）50分でローテーションさせる。 • 12：25～13：25　昼食（集会場）「北の国へ」全編視聴 • 13：25～13：35　片付け、葉書作成の準備 • 13：35～14：30　紅茶を楽しみながら、葉書作成（集会場） ※ 館内での写真撮影を自由に許可する。 • 14：35～14：40　クラス記念写真撮影（エントランス空間） • 14：45　東和蛍雪校舎出発 • 16：30　宮城野校舎　多賀城校舎　到着　解散
ねらい	◆　新入生一人一人に仙台育英学園高等学校の生徒であるという誇りを抱かせ、建学精神を学び、生徒が自らの志を立てる一助とする。
事前準備等	筆記用具、上靴、飲み物、健康保険証、マスク、

オリエンテーションの基本的な流れ

時間	段階	形態	ファシリテーター	留意点	評価	備考
15分	導入	一斉 エントランス空間	■ 利吉先生の画像：記念写真モード ◇ 笑顔で挨拶する。 ◇ 昇降口から集会場への移動を指示する。下のセリフをリモコン操作 • わしが利吉だ • 何か気づいたことがあったら教えてくれ • 今日は仙台育英学園を知ってくれ • 廊下を走るなよ Point：来訪者に驚きによるインパクトを与え、これから過ごす時間への期待値を醸成する。	• T1、T2玄関前で対応 • 明るい雰囲気を作り、笑顔で対応する。 • T1、T2状況に応じてセリフを切り替える。その後、通常モードへ切替	学びに向かう力・人間性（観察、アンケート）	• 機器操作 • アンケート用紙
15分	展開	一斉 集会場	■ 本日の日程と、「何故ここに東和蛍蛍雪校舎を設置したか」意味を説明 Point：鱒淵に東和蛍雪校舎が存在する意義を理解させる。	• T1、簡潔に説明する。		• スクリーン • 機器操作 • アンケート用紙

110分 (50分)		グループ 集会場	■ アンケートについて説明を行う。 ■ 1班～4班 集会場ではっとの調理実習（はっとの由来、作り方、小麦粉をねる、つむ映像を放映する。） ◇ 調理ボランティアより小麦粉をねる、つむ指導 Point：郷土料理「はっと汁」つくりを体験させ、日本の食文化について考えさせる。	• T1映像を説明 • T3、T4和やかな体験会となるように、ボランティアをサポートする。	知識及び技能（アンケート、観察）	
(50分)		談話室 「蛍雪の間」 「栄光の間」	■ 5～8班 談話室コンテンツで校歌を視聴させる。その後、蛍雪の間、栄光の間を見学させる。 Point：① 仙台育英学園校歌を理解させる。 ② 「蛍雪の功」を感じ取らせる。 ③ 先輩達の汗と涙の結晶である成果物、展示品を観ることにより、伝統を継承する意欲を醸成する。 ※ 集会場と談話室、蛍雪の間、栄光の間40分でローテーションさせる。	• T2、必要に応じて解説を加える。		
(10分)	昼食準備		■ 各係活動 ◇ 調理ボランティアの指示に従い、声掛けをする。 おにぎり係：握ったおにぎりに海苔をつけて木製食器に盛り付ける。 はっと汁係：はっとをつみ、鍋にいれる。出来上がり次第木製食器に盛り付けをする。 デジタルカメラ係：各班員の写真を、はがきにプリントする。 後片付け係：片付けの段取りの指示を聞く。	• T1～T4各班のそれぞれの係がしっかり仕事ができるように声掛けする。		
60分	昼食	一斉 集会場	Point：① 利吉先生の波乱に満ちた生涯と教育一筋の生き方を学ばせる。 ② 世界に誇る建学の精神を学ばせる。			
10分	片付け		■ 片付けと葉書作成の準備に取り組ませる。	• T1より説明		• 機器操作 • アンケート用紙
55分	葉書作成	一斉 集会場	■ 紅茶を楽しみながら感謝の葉書を書かせる。投函は東和蛍雪校舎職員が行う。 Point：家族への感謝と決意の葉書（はっとメール）になるように促す。	• T2～T4取り組みが遅い生徒への対応	学びに向かう力・人間性（観察、アンケート）	
10分	終結 記念撮影	一斉 エントランス空間	■ 利吉先生とクラス写真を撮った後、バスに乗るように指示する。 ◇ 下のセリフをリモコン操作 • 東和蛍雪校舎、ここは君たちの故郷だ • 負けるのは嫌だな。負けっちゃくね • 及川甚三郎さんとわしはどこか似てるんだな • 東和蛍雪校舎は及川甚三郎さんとわたしの青年時代の思い出の場所だ	• T1、T2玄関前で対応 • 一期一会の気持ちを込めてあいさつする。 • T1、T2状況に応じてセリフを切り替える。	◆ ファシリテーター役割分担 T1： 佐々木邦治 T2： 小野寺由子、及川長五郎、佐々 哲良、鈴木 勉 T3： 引率担任 T4： 引率副担	

＜**別紙資料３**＞　生徒へのアンケート結果より（生徒回答数 1,013名）

アンケート結果（評価全体の集計）

４：　とても良いと思う よく理解できた 活かせる	３：　少し良いと思う 少し理解できた 少し活かせる	２：　あまり思わない あまり理解できない あまり活かせない	１：　全く良いと思わない 全く理解できない 全く活かせない
８６％	１１％	3%	０％

アンケート結果（項目ごとの主な感想）

① 東和蛍雪校舎の印象はどうですか。

- 木造建築の造りで、仙台育英学園高等学校の教育の伝統を感じられてとても良い。
- 自然いっぱいの環境を活かした清潔感のある校舎で非常に良い。
- 木が多く心が癒やされる。

②「エントランスコンテンツ（利吉先生の絵画が喋りだす）」はどうでしたか。

- インパクトがあり、建物への期待が高まった。
- すてきな演出にみんな興味津々でした。
- 利吉先生に実際にお会いしたことのない私たちにとって、このような技術を搭載していただいたことで利吉先生の教育理念を回想できる良い機会になりました。

③「談話室コンテンツ」校歌について理解できましたか。

- 今まで校歌の意味について考えたことはあってもここまで詳しくは理解していなかった。学校の理念や想いを深く知ることができて有意義だった。
- 本校の歴史について細やかに簡易的に知ることができた。
- よく分かっていなかった歌詞の意味がよく分かって良かった。
- 歌詞の意味が字幕で出てきて分かりやすかった。
- 当時の写真に交えて歌詞に関する詳しい説明もあり、校歌を理解するのに最適なコンテンツだと思った。使用されている写真はどれもクオリティが高く、楽しみながら校歌を知ることができた。
- 校歌を大事にしたい。

④ はっと作り体験や制作動画はどうでしたか。

- 動画は「はっと」の歴史や作り方がとても分かりやすく見やすかったです。
- 動画がわかりやすく、作るときやりやすかったです。
- 優しく教えていただき楽しく作ることができました。
- ボランティアさんたちの説明はわかりやすく、ボランティアさんとの交流も楽しく、登米市のこともよく分かって有意義でした。
- 登米の食文化の伝統が感じられた。これからも大切に受け継がれてほしい。

⑤ はっと汁やおにぎりはどうでしたか。

- 郷土料理のはっと汁を食べることができてうれしかったです。とてもおいしかった。
- 食材のおいしさが引き立つ料理でとても良かったです。
- お肉がおいしかったです。
- 木製食器がすてきでした。
- おにぎりは、手作り感があってとてもおいしかったです。

⑥ はっとメールはどうでしたか

- 日頃恥ずかしくてなかなか言えない感謝の思いを伝えることができてよかった。
- グループで写真を撮ってすぐに印刷して貼って出せて、家族も喜ぶと思う。

⑦ 東和蛍雪校舎を設置した意味は理解できましたか。

- 「東和町鱒渕で仙台育英学園の伝統を継承し、地域の方々と共に、このかけがえのない美しい風土を生かす」という思いがよく分かった。
- 利吉先生の思いがたくさん込められていることが分かった。
- 宮城は教育に適した場で、東和蛍雪校舎は新しい学びができる恵の地だと思った。

⑧「北の国へ」はどうでしたか。

- 私は加藤利吉先生を尊敬しています。この「北の国へ」をみて、幼い頃から学問への思いを募らせ、その情熱を仙台育英創立として成し遂げた姿はとても感動的なものでした。
- 私も利吉先生のように、芯の通った熱意の高い人一倍頑張れる人になりたいです。
- 仙台育英学園の建学精神に基づいて利吉先生の姿を真似していきたいです。

訪れる生徒に希望を与える書道部の作品

利吉先生と一緒に記念写真

高等学校「地理総合」におけるドローンを活用した授業実践
Class practice of "Geography" with drone in high school.

伊藤　恵（仙台育英学園高等学校）
Megumi　ITO（Sendai Ikuei Gakuen High School）

〔**キーワード**：ドローン，地理総合，地理院地図，世界遺産，世界の地形，震災復興〕
〔**Keywords**：Drone, Geography, GIS Maps, World Heritage Sites, World Topography, Earthquake reconstruction〕

Ⅰ　はじめに

平成30年告示の高等学校学習指導要領において、「イ 地理的な見方や考え方及び地図の読図や作図、衛星画像や空中写真、景観写真の読み取りなど地理的技能を身に付けることができるよう系統性に留意して計画的に指導すること」とあるように、高等学校の地理の授業において、衛星画像や空中写真、景観写真の読み取りの地理的技能をとおして、地理的な見方・考え方を身につけることの重要性が示されている。また、井田（2000，p.54）は,「地理は空間を対象としているがその原点は景観であり、地理学習においては景観から様々な事象を読み取ることが必要不可欠である」と指摘している。

このように、景観写真を活用した地理の授業実践は、新鮮な驚きや好奇心を奮い立たせ、グローバルな視点、あるいはローカルな視点双方において、地理的考察への関心を高める手段となる。

筆者はかねてより、景観写真を用いたフォトランゲージの授業実践を行っていたが、動画の方がよりリアルに学習者にとってはイメージしやすいと感じ、国土交通省認定ドローン技能操縦士の資格を取得するとともに日本のみならず海外にも足を運び、現地で空撮したドローンの映像を素材に授業を展開している。

Ⅱ　研究目的

上述のように、ドローンは地理の授業において有用なツールであると考える。そこで本研究は、ドローンを活用した授業実践をとおし、その有効性と活用方法を考察することを目的とする。

まず、ドローンの最大の特徴は、写真だけでなく動画撮影も同時に行える点である。これは、言うまでもなく、セスナ機などの航空写真撮影とは異なる点である。航空写真は、それほど頻繁に更新されるわけではないため、目まぐるしく移り変わる景観の空撮には、リアルタイムで撮影できるためドローンが適しているといえる。また、自分で角度を変えて見たいアングルから撮影することができ、撮影した動画から写真を切り取ったり加工したりするなど編集が容易な点も魅力である。さらに、機体も小型であるため、人が潜入できないような場所での撮影や、被写体に接近して撮影することが可能である。最近では、撮影した画像をその場で確認できるので、YouTubeでライブ配信することも可能になった。航空法により高度150ｍまでしか飛行できないが、それが逆にGoogle Earthとは違った地形の凹凸や臨場感を直に感じることができる。

１．フォトランゲージからドローンランゲージへ

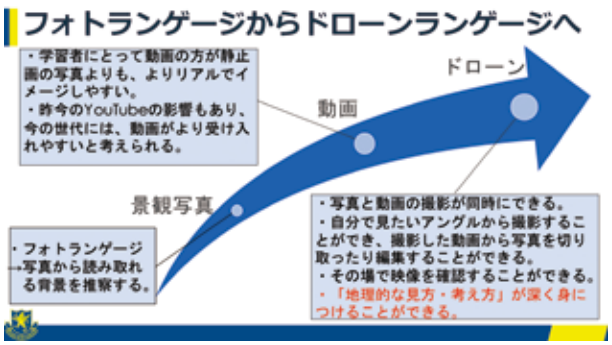
筆者の授業スタイルは､「フォトランゲージ」から「ドローンランゲージ」へと転換した。

今までの授業は、フォトランゲージを授業に取り入れ、写真から読み取れる背景を推察するというものが主体だった。当初授業で写真を使う場合著作権の縛りが強かったので、それなら欲しい画像を自ら撮影しに行こうと思い、日本全国津々浦々気付けば世界44カ国も歩いて撮影してきた。その数およそ10万枚にものぼる。

一方で、今年から始まった地理総合では、帝国書院がWebサポートの中で、授業スライド例としてパワーポ

イントの中に動画を取り入れている。特に、地形の成り立ちの動画は図やイラストよりも非常に分かりやすい。

今まで筆者は、いくつかの写真を繋ぎ合わせて授業スライドを作っていたのだが、学習者にとっては静止画の写真よりも動画の方がよりリアルでイメージしやすいのだろうと思う。また、昨今のYouTubeの影響もあり、今の世代には動画の方がより受け入れやすいと考えられる。



そこで筆者は、写真と動画の撮影が同時にできるドローンを使い授業に取り入れることにした。前述の通り、ドローンは自分で見たいアングルから撮影することが可能で、撮影した動画から写真を切り取ったり編集したりすることが容易にできる。またその場で、撮った映像を確認することができる。

以上のことから、空間的配置がわかりにくいものでも、ドローンによる視点を加えることによって、理解を促進する効果が期待できる。

２．ドローン空撮の注意点と航空法改正について

ドローンは、「航空法」により定められた以下の「飛行禁止区域」に該当するエリアの場合、無許可でドローンを飛ばすことができない。

- 地上または水面から150m以上の高さの空域
- 空区等の周辺（侵入表面等）の上空の空域
- DID（人口集中地区）の上空

また、航空法以外にも、重量に関わらず全てのドローンが適用される法律が「小型無人機等飛行禁止法」である。この法律では、国会議事堂や内閣総理大臣官邸といった国の重要施設や、原子力事業所の上空などが飛行禁止とされている。

このように、ドローンの飛行を行う際は、飛行禁止エリアを避けながら飛行を行う必要がある。

そこで筆者はドローン空撮の際に、ドローンフライトナビ（飛行制限確認地図）のアプリで、DID（いわゆる人口集中地域）以外の場所を事前に調べ、航空法に則って許可申請や撮影を行っている。

筆者が所有している国土交通省認定ドローン技能操縦士の免許は、有効期限が２年間なので、次の更新時に国家資格の免許に切り替えようと考えている。実は、仙台市宮城野区公式YouTubeにドローン操縦士「伊藤恵」として、筆者が空撮したドローン映像が２件あがっている。今後は、ドローンカメラマンとしての活動の幅も広げていきたい。

一方で、2022年６月20日から航空法改正による「無人航空機の登録制度」が始まり、100ｇ以上の無人航空機の登録が義務つけられている。筆者も例外なく相棒２機の登録をした。

所有する２機ともDJI社のドローンを使用している。DJI社は世界のドローン販売の実に70％以上のシェアを誇る巨大メーカーで、本社は経済特区でお馴染みの中国のシェンチェンにある。日本国内でドローンを飛ばす際には、日本の法律「電波法」を遵守する必要がある。電波法とは、無線など電波を利用する際に守らなければならない法律である。その電波法では、技適マークのない機器の使用を禁じているが、DJI社は信頼できる正規のメーカーである。

筆者が最初に使用したPhantom3 Professional（以下、ファントム３）というドローンは、ボタン一つで帰還することが可能だ。さらに、内蔵のGPSが離陸地点を記録、そして飛行中はそれを記憶している。そのため指示通りに、あるいは通信信号が失われた際は、即座に自動で帰還する。

ドローンは電波で操作しているため、あまりに離れてしまうと電波が届かなくなり、大抵のドローンは墜落する。しかし、ファントム３には飛行制限の設定が搭載されており、危険なところに行きそうになると自動的に戻ってくる。

何よりも教材作成に向いているのは、4Kで1200万画素の画像を１秒間に30枚撮影することが可能なことだ。プロポにUSBでスマートフォンやタブレットを接続し、専用アプリでリアルタイムにカメラの詳細な情報が表示されるので、YouTubeでライブ配信も可能である。

もう一機のドローンであるMavic Air（以下、マビック）は、ファントム３よりも干渉に強く、羽を折り畳むことが可能である。海外に持っていくときに、ファントム３だと機内持ち込みの際、航空会社を選ばなければい

けないが、マビックは「ペットボトル」よりも小さく最も携行性が高いので、気軽に持ち運ぶことができる。

小さいと耐風性に欠けると思いきや、意外にも強風の際のフライトでもよく耐えるという報告が数多く上がっている。430ｇというコンパクトさを保ちつつも、4Kかつブレの無い滑らかな映像制作で使用可能なレベルの動画撮影が可能なので、最近は専らマビックを使用している。特に、巡検などのフィールドワークでは長い距離を歩くため、持ち運びが便利なマビックの方が携帯するには適している。

Ⅲ　本研究の基本的枠組み

基本的枠組みは、上記の通りである。

第一に目的は、ドローンを活用した実践を通して、その有効性と活用方法を考察すること。

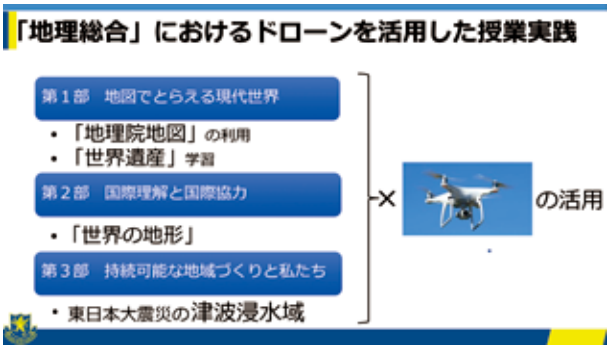
第二に仮説は、ドローンによる視点を加えることによって、理解を促進する効果が期待できると考えること。

第三に方法は、「地理総合」の授業の中で、ドローンの映像を活用できる分野を精選し、実践した内容の検証を行うこと。

しかしながら、今回は検証と言ってもまだ地理総合の授業が始まって半年も経っていないので、ここでは実践した内容を紹介するにとどめ、次年度以降検証した結果をもとに、授業の改良を行っていきたいと考えている。

具体的な方法としては、現在高校１年生に行っているポートフォリオやアンケートを通して回答を集計し、得られた結果を検証していきたい。

Ⅳ　「地理総合」におけるドローンを活用した授業実践



主な実践については、上記のとおりである。内容は、現在本校で採用している帝国書院の「新地理総合」の教科書のページに合わせて作成した。具体的な用途は、主に「地理院地図」の補完的な役割がメインとなっている。

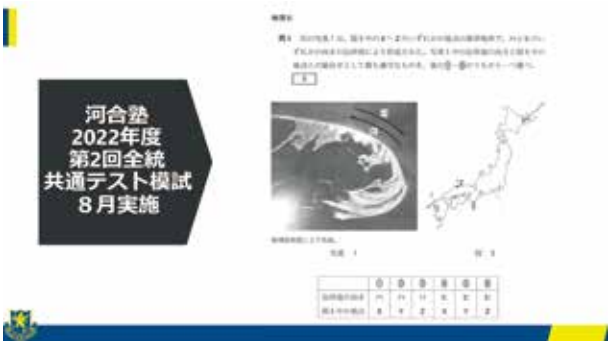
１．大学入試共通テスト地理Ｂ

実践の際に、意識せざるを得ないのは、大学入試共通テストである。実際に共通テストの地理Ｂでは、写真やイラストを見せて、その内容をつかませる問題が目立つ。写真やイラストなどのデータから、地理的な事象を読み取ることができるかどうかが試される問題が多い。実際に、大学入試の中で、写真やイラストを扱う問題が他科目と比べて圧倒的に多い。2022年８月に行われた模擬試験が、その典型的な問題である。

＜河合塾2022年度第２回全統共通テスト模試＞

この問題は、砂嘴である野付半島の場所と砂嘴を形成した沿岸流の向きを答える写真問題だが、地図上で場所を選べたとしても沿岸流の実際の流れは形成過程を理解していないと正答できない問題である。

しかし、以前この場所のドローンの映像を見せたことがある生徒は全員、この問題を正答することができた。特に沿岸流の流れは、図などのイラストで理解するより、ドローンの映像で見た方が、よりリアルで印象に残りやすかったという。



＜第16回科学地理オリンピック日本選手権兼 第18回国際地理オリンピック選抜大会　第一次選抜試験　マルチメディアテスト＞

昨年から地理オリンピックの問題に、初めて動画の問題が出題された。実はこの問題は、筆者が作成したものである。偶然にも今回の模擬試験と同じ野付半島を素材にしたものだが、こちらはドローンの映像を見てその地形を答える問題である。

この映像からＡの部分に注視すると、沿岸流によって砂嘴がどのように発達していったかが分かる。また、途中の映像の中で国後島も見えてくる。実際は、野付半島から16㎞しか離れていないので、近距離にあることが体感できる。

２.「地理総合」における授業実践

第１部　地図でとらえる現代世界

●「地理院地図」の利用とドローンの活用

上のスライドは、先ほどの野付半島を地理院地図の１㎞スケールで見た航空写真である。この写真からだと、言うまでもなく沿岸流の流れが確認できない。

こちらのスライドは、同じく地理院地図をもっと拡大した500ｍスケールの野付半島の航空写真である。今度は、写真の接ぎ目が目立ち、逆に砂嘴の状態が見えにくい。

このような不具合について、国土地理院東北地方測量部に問い合わせたところ、地理院地図の写真は、地上から真上の写真にピンを合わせて撮られているため、どうしても写真の継ぎ接ぎ部分で粗が出てしまうのだという。

地理総合では、地理院地図を活用する機会が増える。しかしながら、地理院地図の航空写真は不完全な部分も否めない。その点ドローンは、高度や角度を変えて撮影することができるので、より見せたいアングルから撮影

することできる。このことから、地理院地図の利用時には、特に航空写真の補完的な形でドローンの映像を導入することが望ましいと考える。

●「世界遺産」学習におけるドローンの活用

クロアチアの首都ザグレブとアドリア海沿岸の間に位置するプリトヴィツェ湖群国立公園。200キロ平方メートルの中に、大小16の湖と92の滝があるこの公園は、石灰岩質の岩盤に長い年月をかけて作り出された、エメラルドグリーンに煌めくいくつもの美しい湖や、いくつもの滝が織り成す景観を楽しむことができる。過去のクロアチア紛争により危機遺産に登録されたが、政府が主体となり地雷除去を進めたことで1997年に危機遺産リストから除外され、現在ではクロアチア最大の観光名所として多くの人々が訪れている。

プリトヴィツェ湖群は、一般にディナル・アルプス山脈と呼ばれる山地に点在するカルスト地形の1つで、石灰岩などの水に溶解しやすい岩石で構成された大地が雨水などによって侵食されてできた地形である。ガイドブックはよくこの角度からの写真が多いが、ドローンによって、石灰棚だけではなく周りのCs気候特有の植生も含めた全体像を見ることができる。

生徒には、「これと同じような地形で世界遺産であるものは他にどんな場所がある？」と問いかけ、中国の九寨溝やトルコのパムッカレ、アメリカのイエローストーン国立公園などを紹介し、広義的には大量の石灰分を溶解した地下水や温・熱水から石灰華が大規模に再沈殿して作り出される地形も、カルスト地形に含まれると説明している。

このように、世界遺産が学習の際は、ドローンによって全体像を捉えることができるよう工夫している。

第２部　国際理解と国際協力

●「世界の地形」とドローンの活用

上のスライドは、男鹿半島にある火山地形のマール（爆裂火口）である。図の「一ノ目潟」、「二ノ目潟」、「三ノ目潟」は、マグマが地下水に触れた時に起きる水蒸気爆発によって形成された。

３－１のスライドからも分かるように、「三ノ目潟」は、実際に人の足でたどり着けない場所にある。以前、この場所を訪れた高松宮宣仁親王が、八方の雄大な眺望を楽しむことが出来ることから八望台と名付けた場所から2つのマールを見ることができるが、残念ながら「三ノ目潟」を目視することはできない。しかしドローンでは、３－２のスライドからも分かるようにしっかりその姿を捉えることができる（Aの部分）。噴火した時期が最も古い、Bの「戸賀湾」は単成火山で円形の火口に海水が侵入したものである。噴火時期は約40万年前の新生代第四紀中期更新世、いわゆるチバニアンに相当する。

次のスライドCの「二ノ目潟」は、撮影場所のD「八望台」付近の火口壁が最も高く、西側で流出口のある付近が最も低くなっている。Eの「一の目潟」も火口壁の高さはやはり撮影場所のAの「八望台」付近が最も高く、正反対の流出口付近が最も低くなっている。このことから、ドローンの映像により水蒸気爆発時のおおよその方向が判る。

次のスライドの「一ノ目潟」には、流入河川はないが、東の壁を破っての流出河川が一つだけある。画面のほぼ中央右Fが、その流出口である。

このように、ドローンによって角度を変えた映像により、肉眼では目視できなかった「三の目潟」を見ることができた。さらに、火口壁の高さや水蒸気爆発時の方向、流出河川の場所を発見することができたのである。

上の映像は、フィヨルドクルーズの発着地フロムで撮影した。フロムはノルウェー南西部のベルゲンからほど近いフィヨルドにある美しい村だ。深いU字型の峡谷や断崖絶壁の滝も魅力的だが、この霧がかかった幻想的な風景も西岸海洋性気候ならではの風物詩といえる。

次の映像は、世界一長いソグネフィヨルドの最奥部にある小さな村ラルダールだ。両岸を急峻な谷壁に挟まれ、細長く延びている。5月のGWに撮影したのだが、白夜の影響で夜の９時過ぎでもこんなにも明るい。

このようにドローンの映像から、気候や白夜まで、まるでその場にいるかのように肌で感じることができる。

●「東日本大震災」の津波浸水地域とドローンの活用

2011年（平成23年）３月11日、ここ宮城県は東日本大震災に見舞われた。仙台市の沿岸部にある若林区荒浜には、震災当時、約740世帯2000人以上が暮らしていた。砂浜が続く海岸だったので、同じ沿岸部でもリアス海岸がみられる三陸沖よりも被害が少なかったとはいえ、最高９ｍの津波が襲い、当日周辺にいた人を含む186人が亡くなった。

この地理院地図の航空写真は、震災前の2008年と震災後の2019年の新旧比較をしたものである。この写真から緑が消え、津波によって植生が失われたことが一目瞭然だ。震災から数ヶ月、仙台市は荒浜地区を含む沿岸部1213haを、住宅の新築・増築ができない「災害危険区域」に指定した。つまり「もう元の場所には住めない」と、元住民に“宣告”したのだ。元住民が移って無人となった荒浜の跡地が、今では土が高く盛られ「避難の丘」として、将来の津波来襲時の避難場所となった。そのほかは依然、荒涼とした風景が広がるままの場所が多く、再開発の発展途上である。

しかしながら、航空写真はそれほど頻繁に更新されるわけではないため、目まぐるしく移り変わる景観の空撮には、リアルタイムで撮影できるためドローンが適しているといえる。ここ１年で大分景観が変化した。ドローンで確認すると、次のようなことが分かる。

まっすぐ伸びるこの運河Ａは、日本で一番長い貞山運河である。少しずつだが、Ｂの範囲に植林が増えてきたことが見てとれる。

Ｃは、近年完成した東部復興道路だ。この道路から内陸は、被害が少なかったことが読み取れる。一部Ｄの浜堤状に、納屋集落の形態がみられる。

また震災当日、多くの人が屋上に避難したＥの荒浜小学校は、震災遺構として保存されることになった。Ｆは昨年オープンした「JRフルーツパーク仙台あらはま」という人気の体験型観光農園である。今後、この地域がどのように生まれ変わるのか、ドローンで記録していくのが楽しみだ。

Ⅴ　今後の展望

● まちづくりMAPとドローンの活用

これは以前、筆者がオブザーバーとして携わった、仙台市宮城野区社会教育事業の一つ「田子今昔物語Ⅱ」というまちづくりMAPである。

実際に、古くから住んでいる住民たちに聞き取り調査を行いながら、街の歴史や伝統的な文化を掘り下げて、地域の魅力を発見していこうという企画である。最後にドローンで街全体を俯瞰することで、上空から空間的な位置を把握することができ、海からの距離や河川の物流による渡津の成り立ち、自然堤防上の集落を確認することができた。また、ドローンの映像をQRコードにすることにより、誰でも気軽に映像を確認できる工夫をした。

今後は、まちづくりMAPの制作を授業の中に取り込んで、学校内でも広めていきたいと思う。

● フィールドワークとドローンの活用

今はまだコロナ禍の影響で、フィールドワークができない状況下にあるが、近い将来、学校の授業の中でドローンを活用した巡検を実現したいと思っている。

実際に巡検により、学習者が自分の目でとらえた視点に加え、上空からの巨視的な視点を付加して観察することで、より臨場感をもってとらえることができると考えられる。

実験的に、2019年11月に宮城県高等学校社会科教育研究会地理部会例会の巡検において、広瀬川の河岸段丘の３つの段丘面（上町段丘・中町段丘・下町段丘）を空撮する実践を多くの先生方の前で披露した。参加された先生方から「ドローンを活用することで、教師がその場で空撮した動画を見せたいアングルからリアルタイムで学習者に提供することができるのは大きな利点である」との感想を頂いた。

Ⅵ　まとめ

知識・技能のない生徒たちにとって、地形図を読み取らせることは大変困難な作業である。地理総合が始まり「地理院地図」を多く活用するものの、等高線の起伏をはじめ平面的な地形図を立体視することができない生徒が多いのが現状だ。それは頭の中でイメージができないからである。地形図を立体的に見るためには鳥の目が必要だが、このドローンの導入によって鳥の目の役割、すなわち鳥瞰図的な視野が広がると期待できる。

実際に生徒たちにヒアリングしたところ、ドローンの映像によって、特に「地形」分野において想像する力がついたと答える生徒が多くいた。

以上のことから、空間的配置がわかりにくいものでも、ドローンによる視点を加えることによって、理解を促進する効果がうまれると考える。

また、ドローンの活用は「地理的な見方・考え方」をより深く身につけるための、有効的な学習方法になり得ると確信できた。

今回は主に「地理院地図」の補完的な機能の役割が主体だったが、今後は「気候」や「植生」、「土壌」の分野にもドローンの活用の幅を広げていきたい。

＜参考文献＞

・井田仁康（2000）：『世界を巡って地理教育』、井田仁康編、二宮書店
・伊藤　恵（2013）：『地理・地図資料』、「先人の営みからなる七北田川の氾濫原～自然堤防上を歩いて～」、帝国書院
・伊藤　恵（2022）：『新地理』、「ドローンを活用した高等学校「地理総合」における授業実践」、日本地理教育学会

Ⅰ　研究報告

国際バカロレア ディプロマプログラム「言語A：文学」授業実践報告

秀光コース　　横山　佳絵

1．はじめに

学習指導要領の改訂に伴い、国語科においても「国語科で育成を目指す資質・能力を国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力」（文部科学省，2018）と規定された。目標も「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力 等」「学びに向かう力、人間性等」に改訂され、それに伴い、評価の観点も「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の３観点に改訂された。このことから筆者は日本が今後目指す教育は、知識と技能を使い思考力と判断力をもって表現し、生涯を通して主体的に学び社会に貢献する人材の育成にあると理解している。しかし、国際バカロレア（以下IB）のカリキュラムにおいては、これらはすでに実践されているものである。

本稿ではIBディプロマプログラムの「言語A：文学」の目的とその評価、そして学習指導要領に定める評価の３観点「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」とどのように対応させているのか、また生徒たちはどのような力を身につけているのか、「人間性」の育成にはどのように取り組んでいるのかについて授業の実践を以下の通り報告する。

2．IBの使命と「言語A：文学」との関連

IBの使命は「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、よりよい平和的な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成」「人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかける」（国際バカロレア機構，2015）ことにある。

その大きなIBの使命のもと「言語A：文学」では「文学の中の言語やテクスト性の美的機能、および文学と世界の関係性について探究する」（国際バカロレア機構，2021）という目的がある。そのために文学作品を深く理解し、分析することで「自己、そして周りとの繋がりに対する意識と理解を深め」「言語と文学が世界を表現する方法を理解し、それがどのように多様なアイデンティティの構築に寄与しているか」「文化によって世界の表現の仕方が異なることに気づき、その理由を考察し、人々が世界を経験し表現する方法」について理解を深めていく。（国際バカロレア機構，2021）

つまり、文学作品を通して自己について考えると同時に、多様な文化を理解、尊重する精神をもち、人がもつ違いを理解し受容する態度を養っていくのである。そして生涯にわたって文学作品から学ぶ態度を育成することを目標にしているのである。

3．IBの使命をふまえた「言語A：文学」の授業実践

上記のような目的と手段を実際の授業ではどのように実践しているのかを以下に述べる。まず生徒は予習として１冊の文庫本、もしくは新書を精読し、その内容を正確に読み取る。そして授業では言語や表現技法に着目し、物語の展開においてどう使用されており、それによって何がどのように効果的に表現されているのか分析する方法を学習する。また、自身が解釈、分析したことについてディスカッションを通して考えを深めていく。最後にプレゼンテーション、コメンタリー（文学論評）、エッセイ（小論文）などの方法で、記述もしくは口述に取り組む。また、授業はディスカッションを中心に展開していくため、自身の思考の過程を文章として記録しておくことが大切である。そのため、復習がより重要であり、筆者はPadletなどのオンラインツールを活用することで生徒の取り組みを見ることができるようにしている。

さらに、各Unitで設定する探究の問いをもとに、文学作品に描かれていることと自分自身や社会とを関連させ、大きな枠組みで文学作品を捉えることで概念理解に繋げる。また、扱う作品の選定に関しては日本文学作品だけでなく、翻訳作品も扱うべきだと定められており、生徒は年代、ジャンル、国、それぞれ違う文学作品を学習することによって、グローバルな問題に関心を持つことができる。

4．「言語A：文学」の評価とその重要性

「言語A：文学」の最終評価にはPaper 1（文学分析）、Paper2（比較小論文）、HL essay（小論文）、内部評価（口述コメンタリー）の４種類の試験があるが、そのいずれも「基準A：知識、理解、解釈」「基準B：分析と評価」「基準C：焦点と構成」「基準D：言語」が評価基準となっている。授業ではそれぞれの試験を想定した総

括的評価課題を課し、それによってそれぞれの学期の評価を決める。

次に、IB「言語A：文学」の評価基準と学習指導要領に定める評価の３観点をどのように対応させているかを示す。（表１）「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」については各Unitの総括的評価課題によって評価する。「主体的に学習に向かう態度」についてはATL（Approach to Learning）スキルがどの程度身についているかによって評価する。これらの評価基準については評価課題を生徒に提示すると同時に各基準のルーブリックも生徒に提示する必要がある。

「言語A：文学」において、この評価の過程は非常に重要だと考える。生徒から提出される課題は全てプレゼンテーションや小論文といった論述課題であるため、評価基準の作成と提示が必須であり、ルーブリックに基づいて適切に評価することで、ディプロマ取得に向けた指導になると同時に取得の目安となるからである。評価スキル向上のために教員も研鑽を積むことが求められる。

（表１）IB「言語A：文学」の評価と学習指導要領３観点評価の対応

IBの評価		学習指導要領に基づく３観点評価
基準A：知識、理解、解釈		知識・技能
基準B：分析と評価		思考・判断・表現
基準C：焦点と構成		思考・判断・表現
基準D：言語		知識・技能
ATLスキル	思考スキル	主体的に学習に向かう態度
	社会性スキル	
	コミュニケーションスキル	
	セルフマネージメントスキル	
	リサーチスキル	

５.「言語A：文学」授業実践例

（１）国語科Brush Up研究授業（2022.7.4）
指 導 者：横山　佳絵
実施学級：秀光コース２学年　２年Ｍ１組（文系）

（２）単 元 名：Unit Ⅱ探究の問い「コミュニティはアイデンティティにどのような影響を与えるか」

（３）使用教材
Ｐａｒｔ１：梯久美子『原民喜～死と愛と孤独の肖像』（岩波新書）
Ｐａｒｔ２：中島敦『山月記』（東京書籍『精選　現代文B』所収）
Ｐａｒｔ３：フランツ・カフカ『変身』（新潮文庫）

（４）単元設定の理由

本単元では「アイデンティティ」「表現」の概念を扱い、探究の問いとして「コミュニティはアイデンティティにどのような影響を与えるか」を設定する。コミュニティとは共通の社会的観念、伝統をもつ共同体で、家族などの集団もコミュニティと言える。また、アイデンティティとは「自己同一性」という意味で受け取られるが、「自分が自分である意識」というのは「他」との関わりによって形成されるものである。そのことをふまえて、コミュニティは個人のアイデンティティにどのような影響を与えるのか、それらは文学テクストにどのように表現されているのかを探究する。さらにグループアイデンティティについても考えを深めたい。

また探究の領域として「テクスト間相互関連性」「読者、作者、テクスト」を扱う。異なるテクストが同じ概念を扱う場合、表現や構成の類似点や相違点について考えることができる。特に『山月記』と『変身』は同じ変身譚であり、文学作品の比較の方法について学ぶことができる。

（５）評価課題と評価基準
≪形成的評価課題≫【主体的に学習に向かう態度】
・ディスカッションマッピングの作成
・ポートフォリオの作成
≪総括的評価課題≫【知識・技能】【思考・判断・表現】
・比較essay（評価基準A～D　30点）

規準A：知識、理解、解釈（10点）【知識・技能】
- 作品についての知識と理解をどの程度示しているか。
- 作品についての知識と理解をどの程度利用して類似点と相違点についての結論を出しているか。

規準B：分析と評価（10点）【思考・判断・表現】
- 言語、技法、スタイルの選択や、作者の選択がどのように意味を形成するかについて、どの程度分析し評価しているか。
- 分析と評価のスキルをどの程度効果的に使用して、両方の作品を比較・対比しているか。

規準C：焦点と構成（5点）【思考・判断・表現】
- 考えを示すにあたってどの程度うまく構成し、バランスがとれているか。焦点を絞っているか。

規準D：言語（5点）【知識・技能】
- 言葉遣いはどの程度明確で、多様で、正確か。
- 言語の使用とスタイルの選択はどの程度適切か。

（6）単元の計画：Part 1『原民喜～死と愛と孤独の肖像』

①内容理解
- 原民喜と周囲の人物との関係について理解する
- 原民喜の原爆体験について理解する

②原民喜のアイデンティティの形成についてどのように表現されているか分析する
- 筆者が引用した原の詩を使用して詩の分析手法について学ぶ
- 父、姉との関りから形成されるアイデンティティ
- 妻との関りから形成されるアイデンティティ（本時）
- 大学の友人、文学誌同人との関りから形成されるアイデンティティ
- 原爆体験から形成されるアイデンティティ
- 原民喜のアイデンティティは筆者のどのような選択によって効果的に表現されているか分析する

③探究テーマについての考察
- 周囲の人物との関りは個人のアイデンティティの形成、変化にどのように影響を及ぼすか考察する

（7）本時の計画

目　標：妻の死後に書かれた詩4編を読み、妻との関わりは原にとってどのような変化をもたらしたか理解する

	○学習内容　・学習活動	指導上の留意点	評価
導入	○前時に学習した詩「楓」についての復習 ・「楓」から中学2年生時点の原のアイデンティティとはどのようなものだったと言えるか説明する。 ・そのような原のアイデンティティは「楓」のどのような点で効果的に表現されているか説明する。	「楓」に使われている修辞や文法の使い方に着目し分析できているか確認する。	
展開	○「かけかへのないもの」「庭」「菊」「ながあめ」についての解釈/分析（グループディスカッション） ・詩の表現や修辞法に着目しながら詩を解釈する。 ・詩を含めたテクスト全体から妻との関りが原に与えた影響について考察する。	机間巡視をして論点が的確か、議論に深まりがあるか聞きながら、必要であればアドバイスをする。	・ディスカッションにおいてどのような役割を担っているか。 ・積極的に意見を話しているか。
まとめ	○妻との関わりが原に与えた影響について、ディスカッションで出た意見の共有 ・詩を含めたテクストから原にとって妻の存在はどのようなものか、妻との関りは原にとってどのような影響を与えたのか発表する。 ○ポートフォリオの記入（宿題） Padlet使用	「楓」と比較し、中学2年生時点から比べると原にどのような変化があったか着目させる。	・前回学習した内容と比較することができているか。 ・ポートフォリオに自身の思考の過程を記録できているか。

６．授業実践の成果

「言語Ａ：文学」の授業は分析や考えを深めることが主眼にあるため、ディスカッションを中心に授業を展開している。そのため、生徒は作品を事前に読み、教員から配布される予習精読プリントに従って精読し、授業では各自の読み取ったことや考えたこと、分析したことを述べて意見交換をしていく。その過程で文章の読解力、解釈・分析する力、批判的思考力を身につけていく。そして最後に課題に取り組むことで論理的に記述または口述する力を身につける。

実際に、生徒たちは授業中積極的に質問や意見を述べ、批判的思考力を身につけている。また、授業のディスカッションや発表といった活動を通して論拠を示すことの重要性を理解し、説得力をもって意見を述べることができるようになった。そして、ディスカッションを通して理解が深まったことなど自身の思考の過程を文章化することで、思考を整理するスキルを身につけている。加えて、文学作品が自己や文化、歴史などと関連していることに気づき、文学を学ぶことの意義を知ることができた様子が見られた。

７．おわりに

IBプログラムは自ら課題を見つけ、調査、議論していく探究型の学習である。「言語Ａ：文学」の授業においても作品の内容を理解するだけでなく、何がどう効果的に表現されているのか分析し、その作品と自分自身を関連させてどのような課題があり、どう議論することができるのかが求められる。そのような授業形態のなかで生徒たちの批判的思考力、論理的表現力、主体的に計画性をもって学習に向かう態度の成長は著しい。同時に教員の評価スキルが非常に重要になる。教員も学習者として研鑽を積むことが必要である。

また、ATLスキルは「学びに向かう力、人間性等」の育成の指針となるが、今後、生徒のATLスキルを伸ばすためにMYPからDPを見据えた指導体制を強化し、さらにICTを活用した学習や評価の効率化を進めていくことが必要だと考える。

＜参考文献＞

文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）　解説　国語編』
国際バカロレア機構（2015）『DP：原則から実践へ』
国際バカロレア機構（2021）『言語Ａ：文学　指導の手引き』

対面授業でのClass活用の可能性

情報科学コース　　佐々木りせ

はじめに

仙台育英学園では新型コロナウイルス感染拡大以前よりICTを活用した授業を研究してきた。パンデミックが起きた令和２年からは教育活動を途切れさせないことと密にならないことの両立のために、オンライン授業実施のための取り組みにさらに励んできたわけだが、感染拡大防止のための対応も徐々に変化してきて、年間のオンライン授業時数は減少している。現在求められることはオンライン授業で利用してきたアプリの長短を洗い出し、どのような状況下でも授業の質を保てるよう準備しておくことではないだろうか。

第一章　Classi、Slack、Zoomによるテキストコミュニケーションのメリットとデメリット

情報科学コースで授業に利用されるメインのツールは、Classi、Slack、Zoomの三つである。互いに比較した上、教員間で挙がりやすいメリットとデメリットをまとめる。

（１）Classi

最大のメリットは「生徒カルテ」である。課題を配信し生徒が答えるだけで、各生徒の課題提出状況などを集約してくれるのは、フィードバックの際にとても有効である。しかし難点は生徒からのリアクションのリアルタイム通知がないことである。期限を設けた課題では短所にならないが、解答のほかに質問が書かれていた場合などには返答までに時間が空いてしまう可能性が高い。特に筆者の授業においては、教室内での授業中の発言を渋る生徒のためにメッセージでの発言を採用しているため、Classiを使ったコミュニケーションでは不十分であると感じている。

（２）Slack

（１）のClassiの短所を完全にカバーしていると言える。チャンネルの更新やそれに対する返信も、もちろんダイレクトメッセージもすべてリアルタイムに通知が来る。加えて、例えば「自分にメンションされたもののみ通知する」など通知の設定を細かく変更することができる。

また教員自身のスマートフォンと同期させられることも大きなメリットである。ダイレクトメッセージ機能を使った授業中の発言で役に立つ。パソコンのSlack通知をオフにし、スマートフォンで通知を見ることで、Zoomでの画面共有時に生徒のダイレクトメッセージの内容も一緒に見えてしまうことを防げるからである。

さらに、例えば写真をアップロードする際、Slackでは写真を選択し共有からSlackを開いて送信するだけであり、操作数を数えるとClassiよりも圧倒的に少ないことが分かる。写真に限らずパソコン上のファイルアップロードにおいても同じことが言える。

（３）Zoom

感染拡大防止のためにオンライン授業実施が現実のものとなると、ICTの中でも授業をより立体的にするためにはZoomの利用が欠かせなかった。この章ではコミュニケーションツール、特にテキストでのやり取りのみを切り取って比較していることから、Zoomのチャット機能のみに視点を絞る。

Zoomのチャット履歴は、授業の日時をファイル名として、パソコン内のファイルに自動的に保存されるものであり、生徒ごとの振り返りをして評価する際には不向きである。また、Classi、Slack、Zoomの中で生徒はZoomでの送り間違いが圧倒的に多い。チャットの送り先の選択欄が小さいことから、授業者個人宛に送るべき内容をミーティング出席者全員宛に送ってしまうことにつながるようだ。

第二章　複数のアプリを併用することの懸念とClass利用による解決

第一部　複数のアプリを併用することの懸念

それぞれのアプリにメリットとデメリットがあることは当然であり、特にZoomにおいてはビデオ通話・画面共有の機能がメインであるのだから、１章で分かることは複数のアプリを使う必要があるということである。しかし、たくさんのアプリを使うと困ることは授業でのパソコンの不具合である。つまりパソコンが固まってしまい授業が中断してしまうことが最も大きな懸念である。実際に授業中に「パソコンが動かなくなり

ました」と訴える生徒に対し「Wi-Fiの切り替え」「充電」「アップデート」そして「他のアプリをすべて閉じること」で解決することが多い。

一つのアプリで授業が完結すればこの問題も解決されるのではないだろうか。

第二部　Class利用による解決

今年度より本校によって日本国内で初めて導入されたClass（導入当時はClass for Zoom）はZoomが教育機関に向けて開発したものである。

Classが持つ機能はまずZoomのすべての機能といって問題はなく、加えてClassiの「生徒カルテ」の要素を持つ「ダッシュボード」と「成績表」がある。特にこの「ダッシュボード」はここまでに挙げたどのアプリにもない、生徒の発話時間を集計してくれるものである。凪の状態に陥りやすいオンライン授業で新観点の一つ「主体的に学習に取り組む態度」の評価の一部として用いることが可能だ。

チャット機能では「すべてのチャット」と「パブリックチャット」に分けられていて、Classでの授業で送り先を間違う生徒は格段に減った印象がある。ブレイクアウトルームを開始すると自動でグループチャットルームが開設されるところも、発言に高いハードルを感じる生徒へのサポートに繋がるだろう。ファイルの送受信についても、各課題に対し「ファイル提出」か「テキスト提出」か授業者側で定められる上に、課題の提出状況と評価は先述の「成績表」に生徒ごとに集約される。この評価の集約はClassiの生徒カルテにもない機能であることを書き加える。

授業時間外のリアルタイムの通知に関しては現時点で不可能ではあるが、授業者の設定により課題提出期限をミーティング終了後に設定することも可能である。授業時間外の質問等にSlackの利用はまだ欠かせないが、少なくとも授業中に複数のアプリを使うことによるフリーズには、Class一つのアプリを使うことで対処できる。

第三章　Class利用の問題点

オンライン授業が段々と減っている中で、「Classを新しく入れると混乱するのではないか」「Zoomの機能で十分ではないか」という声も上がることだろう。実際オンライン授業でのClass利用にはデメリットも大きい。言い換えると、Classのデメリットが前面に出てしまうのである。この最大の要因は実際の教育現場では突然オンライン授業へ切り替えになる場面が多いからであると考察した。

Classでの授業を実施した先生方の中で多く聞かれたのがClassで授業を始めようとすると「終了済み」となってしまうことである。Zoomの場合は「新しいミーティング」で、どのクラスに対しても授業者が変わらなければ（同じアカウントであれば）同じミーティングを開始できたが、Classは特性上その都度授業開始の時間設定が必要になる。Classは出欠管理や課題配信のためのクラウド機能など、各クラスの詳細な設定があるためである。

さらにこのクラウド機能だが、これを急遽準備するのは厳しいものがある。対面授業を想定してClassiで課題を配信していたものをClassに置き直して、Slackで配信しようとしていたプリントやURLをClassにアップロードし直さなければいけない。ICTをフル活用しようと授業準備していた先生にとっては授業準備を一からやり直すほどの手間かと思う。もちろんClassで授業をするからといって、ClassiもSlackも使えなくなるわけではないので、授業準備はそのままにして、Class・Slack・Classiを使ってもいいのだが、それならZoom・Slack・Classiを使った授業と変わらない。また第二章で示したパソコンの不具合が生じるリスクが高まる。

第四章　Classを対面授業で使うことの提案

ここで課題解決のために、オンライン授業のみでClassを使うのではなく、対面授業でもオンライン授業でもClassを使うことを提案したい。常にClassを使う前提で準備していれば当然第三章で提示した問題はすべて解決される。さらにZoom・Slack・Classiの併用時に懸念があったパソコンの不具合による授業中断のリスクが軽減される。実施してみた結果、この他にも多くのメリットがあることを以下に述べる。

（1）Class独自の機能である出欠管理は授業者にとって大変魅力的であるが、オンライン時のみの出欠をとってもほとんど意味を為さなかった。対面授業でも開始と同時に入室させることで欠時のカウントの業務が減ることが期待できる。

（2）視力の低い生徒への対応である。字の大きさやフォントに気を配っても、視力の低い人にとってホワイトボード上に映し出されたパソコンの画面はやはり見づらい。実際この実践以前より、対面授業でZoomに入りホワイトボードを見る代わりに自身のパソコンを見ながら授業を受けていた生徒もいた。

（3）対面授業からオンライン授業に切り替わっても生徒の動きはほとんど変化がないことから、オンラインへの切り替えに対する生徒のストレスが軽減されると同時に、使い慣れていないことに起因する操作ミスのためのタイムロスも少なくなる。これは授業者においても同様である。本稿末尾の「Classi・Slack・Zoom利用時とClass利用時の操作に掛かった時間の比較」をご参照願いたい。これは授業者がSlack・Classi・Zoom利用時とClass利用時の操作に掛かった時間の平均を比較したものである。この結果から、Zoom・

Slack・Classiなど複数のアプリを併用して授業をしている場合、使い慣れているアプリであってもアプリの切り替え等操作に多くの時間を割いていることが判明した。この表には記載していないが、Classを対面授業で利用する場合、出欠管理をClassが自動的に行ってくれるので、さらに多くの時間を節約することができるようになる。

終わりに

パンデミックが多くのことが制限する中で、教育にかかわるすべての方々が教育活動を止めないよう様々なものを取り入れて、新型コロナウイルスへ時に対抗し時に添いながら力を尽くしたことで、柔軟な形態で授業を行うことができるようになったことは、コロナ禍の教育現場における最大の産物であったように思う。開発されたClassを使ったオンライン授業の経験は対面授業における改善すべき点をも教えてくれた。これからはICTを使ってオンライン授業を対面授業にいかに近づけるかではなく、オンライン授業だからこそできることを探り、オンライン授業と対面授業の比較の中で相互に改善させていくことを目指したい。

謝辞

加藤雄彦 理事長・校長先生、常務理事 加藤聖一先生にはコロナ禍においても変わらず教育活動を続けられるよう、恵まれた教育環境を賜り、心より感謝申し上げます。また、阿部文男 教頭先生はじめ諸先生方には常日頃たくさんのご支援をいただき、ありがとうございました。

授業者がClassi・Slack・Zoom利用時とClass利用時の操作に掛かった時間の比較

授業内容	Classi・Slack・Zoom 利用時の操作	操作に掛かった時間 （秒）	Class利用時 操作に掛かった時間	操作に掛かった時間 （秒）
背景知識	Zoom画面共有	16	Web参照	19
単語発音	PowerPointスライドショー	21	ファイル共有	2
	Zoom画面共有	4		
単語テスト	Classi配信	0(予約配信のため)	課題開始	5
答え合わせ	Slack配信	15	ファイル共有	2
教科書要約	Classi配信	53	課題開始	8
文法解説	PowerPointスライドショー	13	ファイル共有	4
	Zoom画面共有	24		
文法演習	Slack配信（SharePoint）	11	URL配信	11
	Zoomブレイクアウト	43	ブレイクアウト	45
文法課題	Classi配信	71	課題開始	8
Writing	Classi配信	64	課題開始	7
要約見直し	Classi配信	47	課題開始	10
解説	PowerPointスライドショー	20	画面共有	19
	Zoom画面共有	18		

操作に掛かった時間の合計

Classi・Slack・Zoom利用時	7分
Class利用時	2分20秒

計測の環境・条件等

(1)オンライン受講生徒ありの対面授業

(2) 4 クラス 2 レッスンの平均を小数点以下四捨五入で記載

(3)実施順などは下表の通り

実施順	利用したツール	実施クラス	レッスン
1	Classi・Slack・Zoom	A	Lesson 2
2	Class	B	Lesson 2
3	Classi・Slack・Zoom	C	Lesson 2
4	Class	D	Lesson 2
5	Class	A	Lesson 8
6	Classi・Slack・Zoom	B	Lesson 8
7	Class	C	Lesson 8
8	Classi・Slack・Zoom	D	Lesson 8

令和4年度 外国語コース Stanford e-Sendai Ikuei 報告

外国語コース　　今川　里菜

1．プログラム概要、スケジュール、受講者内訳

1－1．プログラム概要

Stanford e-Sendai Ikueiはスタンフォード大学SPICEと共同開発したプログラムとして今年度より発足した。全10回の講義及び受講者の最終プレゼンテーションを通して英語力や批判的思考力、社会での役割をグローバルな視点で考えるスキルを養うことを目的とする。受講生の希望も踏まえて全10回の講義には、スタンフォード大学の教授やシリコンバレーの起業家、米国のオピニオンリーダーを招き、多様性やグローバルシティズンシップ、起業家精神などのトピックを取り上げた。

1－2．スケジュール

期間：2022年5月14日（土）～2022年9月10日（土）
時間：13：00～14：30（90分）
回数：全12回（講義：10回、プレゼンテーション：２回）
ファシリテーター：Alison Keiko Harsch（Stanford University, SPICE）

	内　容	ゲストスピーカー・コメンテーター
第１回	Introduction	Alison Keiko Harsch
第２回	Japanese History in the US	Gary Mukai
第３回	Re-Imagining Black Maternal Health ~ Diversity in the US ~	Esther Priscilla Ebuehi
第４回	Diverse project from Arts ~ focusing on Visual arts and Music ~	Makiko Hirata
第５回	Introduction to Global Citizenship	Rebecca Jennison, Jennifer Teeter
第６回	Refugees and Imigration	Smantha Vasquez
第７回	Review and explanation of Final Presentation	Alison Keiko Harsch
第８回	Entrepreneurship and Silicon Valley	Masa Kabayama
第９回	Mental Health	Kenji Harsch
第10回	Design Thinking	Sam, John Luke, Sophia, McKenna, Noah, Ariane, Katie
第11/12回	Final Presentation①/②	Alison Keiko Harsch, Gary Mukai

１－３．受講者内訳

外国語コース30名（２年生：12名、３年生：18名）

※ そのうちIB生（3GIB）５名、留学生３名（韓国：２名、中国：１名）

２．プログラム受講の生徒の様子

全10回の講義は「多様性」「グローバルシティズンシップ」「起業家精神」という３つのトピックに分けて実施された。

「多様性」をテーマにした講義では、アメリカの移民の歴史や人種問題から我々が持つ固定概念やバイアスについて話し合った。生徒たちは話し合いを通して、多様性のある世界を作るために、インクルージョンや公正がいかにして重要であるのか、多様性の中にいながらアイデンティティを保つことの難しさについても議論を行い、多角的な視点を身につけた。

次に実施した「グローバルシティズンシップ」では、これまでのテーマであった多様性の振り返りを行いながら、グローバルシティズンシップについて理解を深めた。生徒たちは難民支援を行っている方の講義を通して、世界で起きている問題や課題を取り上げ、これらをどのように解決できるかについて話し合い、共有した。生徒たちは普段各教科の授業で取り上げられるSDGsで提唱されている17の目標などをうまく活用しながら議論する様子が見られた。

最後のトピックである「起業家精神」では、シリコンバレーの日本人起業家などから起業に至るまでの経緯や苦労などを聞き、何事も現状に満足せず挑戦する心を持つ重要性やあらゆることに興味関心を向け、クリエイティビティを養う必要性について学んだ。

＜写真＞ 講義を受ける様子

＜写真＞ ディスカッションの様子

以上の講義およびディスカッションを通して、生徒たちは３つのトピックの中から最も興味を持ったものを選択し、探究テーマを設定して英語で最終プレゼンテーションを行った。生徒たちが取り上げたテーマは下記のとおりである（表１）。

表１．最終プレゼンテーションタイトル

	タイトル		タイトル
1	What Lies Behind Comfortable?	15	Why is There No Progress in Gender Equality for Women in Japan
2	Healthcare System in the US and Japan	16	The Global Waster Management Issues and Its Impact
3	How to Make Gender Equality Possible in Japan	17	The Skills Needed to Build Our Future
4	SDGs 6 Nanotechnology	18	Comparing Racism in the US and Japan
5	Poverty Problems in Developing Countries	19	The Relationship Between Gender Qruality and Diversity
6	The Influence of Music on People	20	How to Think Like a Global Citizen
7	Gender Issues in Japan: What We Know and Should Do	21	“Peace, Justice, and Strong Institutions”
8	Differences in the Approach to SDGs between Japan and European Countries	22	Reasons for the Lack of Gender Eqality in Japan
9	The Diversity of Women’s Status Through Disney Princesses	23	For a Safety World Stop Trafficking in Albino
10	Tattoos in Japan	24	LGBTQ＋ Movement
11	Education Gap	25	How Do We Eliminate Gender Discrimination
12	Diverse Waters of the World	26	How America and Japan is Working on Reducing Garbage of Plastic Bags
13	What Can We Do To Stop Discrimination	27	Comparing Trash and Recelycing in the U.S. and Japan
14	Mental Healthcare Around the World	28	Discrimination Hidden in Diversity

表１から分かる通り、生徒たちは自分自身の関心に基づいて最終プレゼンテーションのテーマを決め、ファシリテーターであるアリソン先生からフィードバックをもらいながらプレゼンテーションを完成させた。男女平等やジェンダー、SDGsのトピック、アルビノの人々の問題やディズニープリンセスの描かれ方から見る女性の地位についてなど多様なトピックや観点から緻密に調査し、英語でまとめることができた。

＜写真＞ 最終プレゼンテーションの様子

10月28日には、ファシリテーターのアリソン先生がアメリカから来日し、修了式を執り行った。１人１人に修了証を授与し、生徒たちは英語でプログラムを通して成長した点を簡単に述べ、プログラムを振り返った。

＜写真＞ 修了式に来日したアリソン先生

＜写真＞ 修了証を１人１人アリソン先生から授与

＜写真＞ 修了証を受け取った生徒たち

３．プログラム修了後の振り返り（アンケート調査に基づいて）

本プログラム修了後、受講者の振り返り及び来年度に向けて、受講者30名にアンケート調査を実施した。アンケート調査はslackにて配信し、受講生30名全員から回答を得た。

アンケート調査実施時期と質問内容を下記に記す。

《実施時期》11月２日（水）～11月９日（水）
《回答フォーム》Google Form
《質問内容》

- Stanford e－Sendai Ikuei受講理由について
- プログラム全体の内容について
- プログラムの中で最も興味関心を抱いたトピックについて
- プログラムを通して身についたスキルについて
- プログラム修了後、身についたスキルがどのように役立つかについて
- プログラムで苦労したことについて
- その苦労の克服方法について
- プログラムを大学受験でどのように活用したかについて（３年生のみ回答）
- 講師（ゲストスピーカー・ファシリテーター）のスキルと対応について
- プログラムの良かった点について
- プログラムの改善点について

4. アンケート調査結果について

下記にアンケート調査から得られた結果を記す。各質問から今年度の受講者の特徴や身についたスキルの分析を行うことと来年度に活用することを目的とする。

4－1．プログラム受講理由について

プログラム受講理由の結果は下記の通りである（図１）。

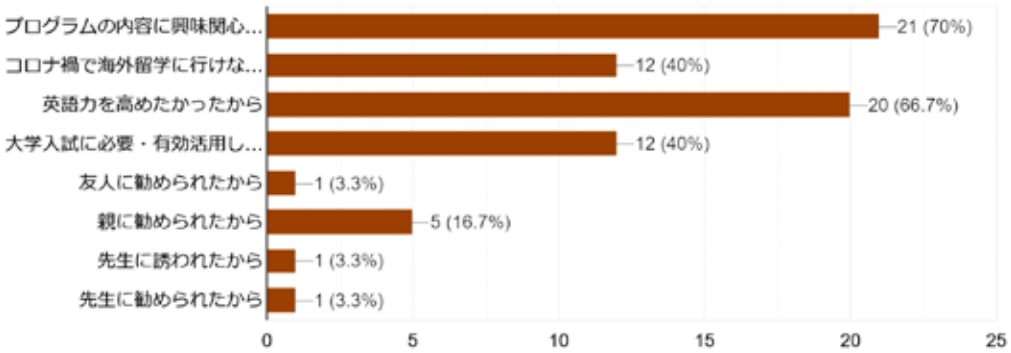


図１　プログラム受講理由（複数回答可）

受講者の大半は､｢プログラムの内容に興味関心があったから｣｢英語力を高めたかったから｣と回答しており、主体的な姿勢で参加していることが分かる。次に受講理由として多かった「コロナ禍で海外留学に行けなかったから」は回答した12名のうち11名は３年生であることから、彼らにとっては貴重な機会であったことが伺える。一方２年生の多くは、本プログラムを履修しながらカナダ留学やハワイ研修にも参加できている学年であるため､｢コロナ禍で海外留学に行けなかったから｣という受講理由はあまり見られない。今年はコロナ禍で留学に行けない代わりのプログラムとして大々的に周知したが、現２年生のように来年度の募集対象者の多くも実際に留学ができる状況にあると考えた場合、周知の方法は工夫が必要だと考える。

また「親に勧められた」という回答も５名ほど見られることから、保護者に向けた周知も参加生徒を募る上では重要であると考える。今年度はチラシのみでの周知であったため、来年度以降は学年懇談会で実際にプログラム概要の説明や今年度の受講者の感想などを紹介し、具体的な説明ができると良いのではないだろうか。保護者だけでなく、教員に勧められて参加を決めた生徒も２名（３年生）ほどいる。これは教員が本人たちの進路や英語力を考慮し、積極的に声がけをした生徒たちである。このことから、生徒たちの進学希望先や将来の目標を正確に把握し、勧めることも生徒たちにとってはプログラム参加を決める重要なきっかけとなっていると考えられる。

4－2．プログラム全体の内容および興味関心の高いトピックについて

受講者には、本プログラムの内容や興味深かったトピックについてアンケートを行った。結果は下記の通りである（図２）。

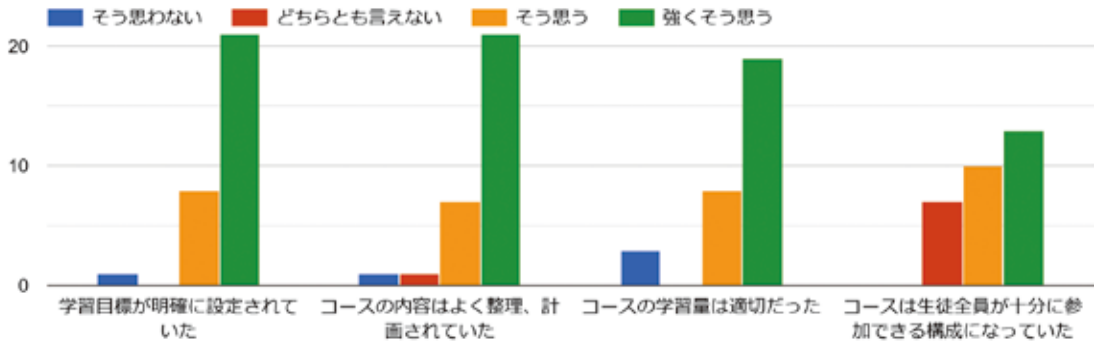


図２　プログラム全体について

学習目標や計画、学習量については2/3以上の生徒が満足しているとの結果が得られた。コースの学習量が適切でないと回答した生徒たちはいずれも苦労したこととして「課題の量の多さ」を上げている。毎回講義前にトピックに関する記事やビデオを視聴し、ディスカッションボードに感想および考えを記入する課題や授業後には毎回振り返りや講義を受けた感想等の書き込みが必要であることから、レギュラークラスに在籍し、英語力がそこまで高くない生徒にとっては課題量が多いと感じたようである。

大半の生徒から肯定的な評価が得られた３つの項目に反して、意見が分かれたのが「コースは生徒全員が十分に参加できる構成になっていた」という項目である。大半は「強くそう思う」「そう思う」と回答しているが、「どちらとも言えない」との回答も一定数見られる。数名の生徒からはプログラムの改善点や苦労したこととして、「IB生の高い英語力についていくこと」や「来年はIB生だけでなくみんなが発言しやすい場を作れると良いと思う」という回答が見られた。IB生とレギュラークラスの英語でのコミュニケーションスキルの差が全員十分に参加できる環境になりづらかった面もあると考えられるため、この課題は来年度ファシリテーターと検討し、全員が発言しやすい状況や環境づくりを目指す必要がある。

興味関心が高かったトピックは、日系アメリカ人の歴史やアメリカにおける多様性、グローバルシティズンシップに関してなど、異文化理解・多様性に関連するトピックに人気が集中した。また、音楽を用いて自分自身を表現する講義などメンタルヘルスに関連するトピックも人気が高かった。特に３年生は入試やIB最終試験が迫っており、ストレスも多いことから自分自身を見つめ直し、振り返り、精神面を健康に保つ時間は本人たちにとって貴重であったと考えられる。次年度もこのデータを参考に、スタンフォード大学SPICEとカリキュラムを組む必要がある。

４－３．受講生が身についたスキルと活用について

次に受講生が身についたと感じたスキルについてまとめる。下記が生徒たちが身についたと感じているスキルの一覧である（図３）。

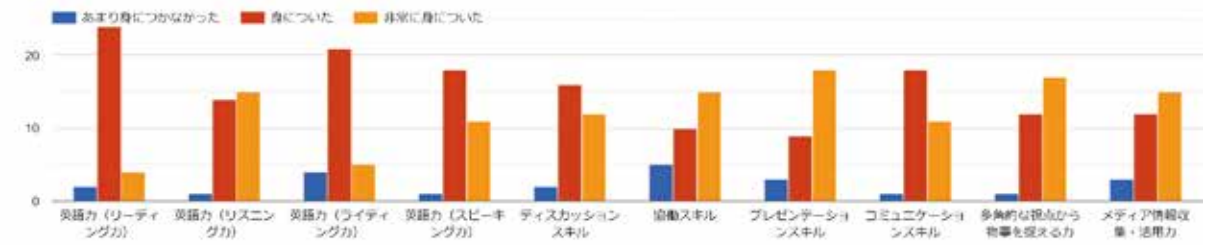


図３　受講生が身についたと感じるスキル

英語力に関しては、４技能全てにおいて「非常に身についた」「身についた」と考える生徒が大半であることが分かる。生徒たちはプログラムを通して苦労したこととして英語での聞き取りやディスカッション、課題を挙げたが、これらを学年やクラスの垣根を超えて積極的に聞き、教え合うことでリスニング力やスピーキング力、コミュニケーションスキルおよびディスカッションスキルを伸ばしたと考えられる。リーディング力は事前課題で与えられる記事を読むことで身についたと感じる生徒が多い。また、ライティング力に関しては毎回ディスカッションボードに英語で講義を受けた感想や考えを記入し、別の生徒がその投稿に対して返答することで活発に議論し、身につけたと推測できる。

英語力だけでなく、プレゼンテーションスキルや多角的な視点から物事を捉える力も身についたと感じている結果が得られた。自ら探究課題を設定し、最終プレゼンテーションを実施したことが大きな要因である。また、多様な観点から異文化理解やグローバルシティズンシップなどのテーマに取り組んだことから多角的な視点から物事を捉える力が身についたと感じる生徒が多い。学年やクラスを超えたディスカッションにおいても、生徒同士の多様な価値観や考え方を共有する姿が見られたため、これも多角的な視点から物事を捉える力を伸ばすきっかけになっていると考えられる。

これらのスキルは、大学入試に大いに活用された。３年生を対象にアンケートを取った結果が下記のとおりである（図４）。

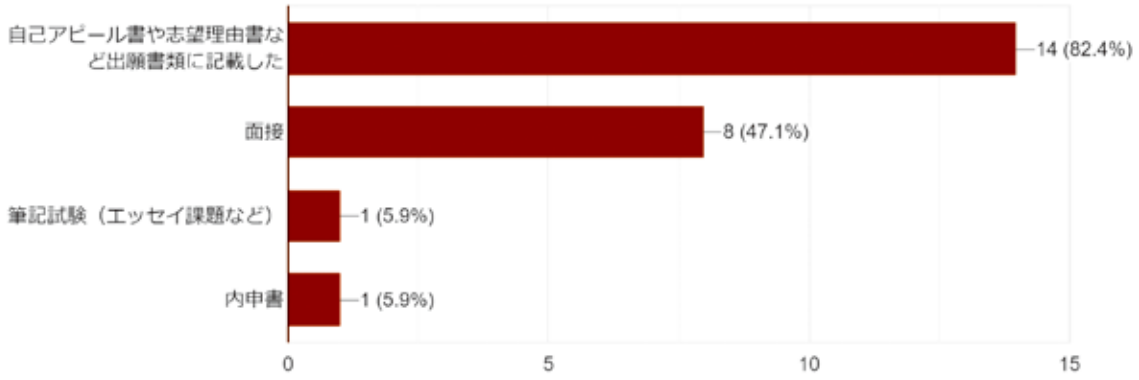


図４　大学入試におけるスキルの活用（３年生）

図４から分かるように、自己アピール書や志望理由書などの出願書類に記入し、主体的に活動したことや英語力をアピールした生徒が多く見られた。面接においても自ら本プログラムで学んだことを述べ、活用した事例も見られる。外国語コースは英語力が求められる学部進学を望む生徒が多いため、本プログラムで身についた英語力を十分に生かし、アピールする姿が見られる。実際に今年度の総合型選抜では、英語運用入試を利用して中央大学法学部法律学科に合格した生徒もいる。今後指定校推薦入試や公募制入試でも本プログラムを活用する生徒は多くいると推測する。

更に受講生たちは本プログラムで身についたスキルは、学習外で他者とコミュニケーションを取る際や、将来進路を検討する時、入試、入学後の講義やゼミ、卒業後のキャリア形成に役立つと捉えていることがアンケートから明らかになった（図５）。

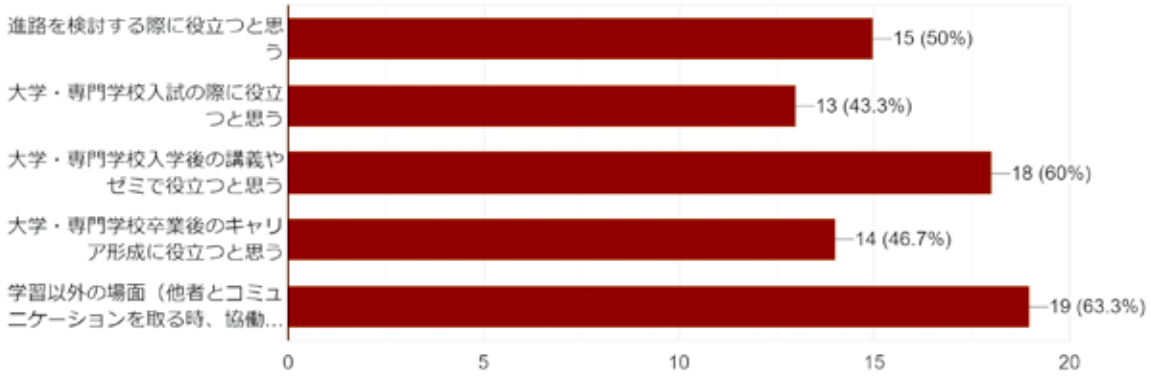


図５　身についたスキルが役立つ場面について

図５のように、生徒たちは長期的な視点で見ても、本プログラムで身についたスキルが役立つと捉えていることが分かる。本プログラムは在学中のみならず本学卒業後も長期的に必要とされるスキルを身につけることができるプログラムであると言える。

４－４．プログラムの良かった点について

これまで分析したように、受講生たちは本プログラムの内容に大変満足しており、多様なスキルを向上させ、在学中からこれらのスキルを十分に生かしていることが分かる。生徒たちは、本プログラムの特に良かった点を多く挙げたが、主に４つ（① 学びの内容　② 学びの形態　③ 学年やクラスの垣根を超えた交友関係および異文化理解力の向上　④ 英語力）に分類できると考える。

① 学びの内容

まず１つ目は学びの内容である。普段の授業ではなかなか扱われない国際問題やSDGsの課題に触れ、グローバルな問題について学ぶことができたプログラムは生徒たちにとって貴重だったと考えられる。下記生徒たちのアンケート回答の抜粋である。

「普段の授業では扱われない内容を学ぶことができたこと」

「世界の事情について詳しく知れたこと。日本で教えられる事はほんの一部に過ぎません。しかし、このプログラムで今起こっている事実を詳しく調べている海外の先生方からお話を聞き、深刻さなどに触れられたと思います。」

「普段絶対に聞けないそれぞれの現場で携わる方々から貴重な話を聞けたこと。」

「考えたこともない話題に触れることができる」

「国際問題について考えを深められた点」

「SDGsなどを含む世界の様々な問題について理解することでグローバルな視点を持つことができた」

世界の問題を多角的な視点から学ぶことで、生徒自身もグローバルな視点を養うことができたと考えていることが分かり、本プログラムの目的が生徒たちに還元されていることが分かる。

② 学びの形態

２つ目は学びの形態である。毎回異なるゲストスピーカーを招いて講義を受けたため、授業スタイルや内容が毎回変化したことが、受講者にとっては新鮮であり、充実したプログラムとなったようだ。下記生徒たちのアンケート回答の抜粋である。

「色々な講師の方々の授業を聞けたこと」「色々なゲストスピーカーの話を聞けたこと」

「多様なバックグラウンドを持つゲストスピーカーからの話を聞くという授業スタイル」

「ゲストスピーカーやテーマが毎回変わるため、新しい考え方や価値観を学ぶことができる」

「スタンフォードの教授から講義を受けることができる点」

「多様なバックグラウンドを持つ、色々な職業の人にお話を聞けたところ」

「多くのゲストスピーカーのお話が聞けたこと」

③ 学年やクラスの垣根を超えた交友関係および異文化理解力の向上

３つ目は学内での交友関係と異文化理解力の向上についてだ。毎回異なるグループを形成し、ディスカッションを行ったため、学年やクラスの垣根を超えて、学びを深めることができた。「ディスカッションを通して他の学年の子やIB生徒英語を使ってコミュニケーションを取れたこと」とある生徒が回答しているように、レギュラークラスの生徒たちは、IB生の高い英語力に触発され、コミュニケーションを積極的に取っている。またIB生は、レギュラークラスの生徒たちの英語力を理解し、円滑にかつ分かりやすくディスカッションを進めるためにはどのようにすべきかを試行錯誤しながら学んでいたことから、受講者同士で効果的な交流が生まれたと考えられる。

また、本プログラムに参加した留学生は「日本人みんなとよく話し、友達もいっぱいできました。」と回答している。日本人生徒が積極的に留学生と交流したことで、異文化理解力を向上させられることも本プログラムの大きな特徴であると考える。

④ 英語力

最後に、英語力を伸ばすことができる点だ。「すべてのことを英語で取り組める点が一番良かったです」「基礎的な英語ではなくハイレベルな英語で学べる」と生徒が回答しているように、全て英語でコミュニケーションを取り、論述し、読解するプログラムは受講者たちの大きな刺激になったようだ。また、「学校の授業の先生のよ

うな手助けがない分、自分で調べたり考えたりしないといけない」ととある生徒が回答していることから、主体的に課題やディスカッションに取り組む力が向上できる点も本プログラムの良い点であると捉えられている。

以上のことから、本プログラムは国際的な問題に学年やクラスを超えて主体的に取り組むことで英語力や異文化理解力が向上するという点が受講者たちに良い点として捉えられていることが明らかになった。これは次年度の生徒向け周知の際にも大いに活用できるポイントであると考える。

４－５．次年度にむけて

次年度に向けて受講者から改善点も何点か挙げられた。

１点目は、生徒たちの英語力のばらつきに関してである。中でもレギュラークラスの生徒たちは講義で使用される単語が難しく、理解が追いつかなかったことがあったとの回答が複数見られた。難民問題や日系アメリカ人の差別問題などは専門的な単語も多く出てくるため、事前に専門用語を共有してもらい、事前知識を持っておくように促す等、次年度に向けてファシリテーターと検討が必要である。

２点目は、開講時期についてである。今年度は３年生が大学受験に活用できるように短い期間で開講したが、この関係で定期テスト１週間前に講義を入れざるを得ないなど、スケジュールに少々課題があると考える。受講者たちも「定期テスト１週間前に講義は入れてほしくない」といった回答が見られたため、次年度以降反映させたい。また、部活に力を入れている生徒たちは夏の大会や甲子園の応援のために参加できない講義もあったため、次年度から部活の顧問と綿密に連携を取り、スケジュール調整ができるように工夫したい。

学習指導要領の改訂に伴う観点別評価の実践

英進進学コース　　竹ケ原孝則

１．はじめに

本年度の第１年次から学習指導要領の改訂に伴って、新たな観点別評価を実施することになった。この観点別評価では、評定を定期考査の素点や平常点のみで算出せず、複数の評価材料をもとに「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の３観点から評価・算出される。第１年次の各科目を担当していた先生方は従来の評価と異なる点が多い中、様々な評価材料を収集し、２学期末と学年末段階に評定を出していた。本稿では、私が担当・実践した化学基礎と生物基礎における観点別評価について報告する。

２．評価課題と３観点との対応

英進進学コースでは「評価入力システムB」を使用し、学期指導計画表を作成した。その際、半年につき各観点の評価課題を２つ以上実施するという条件があったため、それを満たすよう留意した。「知識・技能」は小テストと定期考査の実施により条件を満たせるが、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」を評価するための課題を設定する必要があった。そこで表1に示したように、実験やレポート・プレゼンテーション、振り返りシートを評価材料とした。

評価課題	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
小テスト	○		
定期考査	○	○	
実　　験	○	○	○
レポート・プレゼンテーション		○	○
振り返りシート			○

表１　評価課題と３観点との対応

作成した学期指導計画表は各学期開始時にMetaMoji ClassRoomを介して生徒に配布。評価課題を実施する際は実施前に評価課題別の評価観点・観点項目・評価基準を説明してきた。

３．評価課題のルーブリックと提出された作品の比較

表２に2022年４月の化学基礎の授業で実施した元素記号ノートの評価基準を示す。入学して初めての評価課題ということで、iPadに慣れることと書き写しただけの作品にしないことの２点で評価することを伝えた。多くの生徒は各観点でA評価となる作品を提出し、クラスごとに特色のある元素記号ノートが出来上がった。図１には、提出された作品の中からA評価の作品とB評価の作品を示した。前者は、元素の基本データだけではなく社会との関連性まで調べ、まとめられている。後者は、教科書の記載内容以上の内容とはなっているが、あく

まで元素の基本データを載せただけになっている。次年度、同じような評価課題を出す際に見本として生徒に提示することを検討している。

評価基準	A	B	C	評価なし
知・技				
思・判・表	インターネット等で調査した元素の情報を読み手に分かりやすいように整理してある。	インターネット等で調査した元素の情報が書かれている。	教科書に掲載されている範囲内の内容が書かれている。	取り組んでいない。
主	元素に関心をもち、教科書の内容のみならずインターネットや書籍等で調査し、ノートに自分の言葉でまとめた。	元素に関心をもち、教科書の内容のみならずインターネットや書籍等で調査し、ノートに書き写した。	教科書を調べ、その内容のみを書き写した。	取り組んでいない。

表２　元素記号ノートのルーブリック

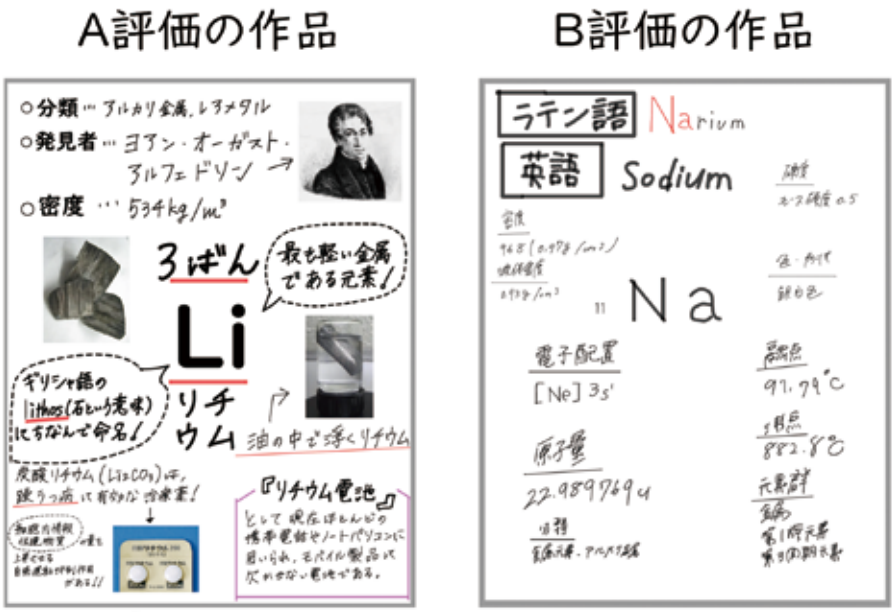


図１　元素記号ノートの評価の比較

４．半年ごとの評価

２学期末と４学期末（学年末）に評価材料をもとに評定が出される。図２では、従来の評定の算出方法との違いを示した。特に学年末に評価を入力していた際、従来との違いに困惑する先生が多いように感じた。次年度、新課程の授業を担当される先生方は注意するべき点の１つだと考える。また、従来と異なり、定期考査を１度も受験できなかった場合でも、単位認定を受けることができるようになっている。本年度、それに該当する生徒はいなかったが、定期考査を十分に受験できた生徒との評価に差がつくかどうかについて事前に説明することも必要であろう。なお、前期で評定を出した際、科目によっては教務から「評定平均値が高い」「先生間で評定平均値の差が開いている」といった指摘を受けた。これらの指摘を踏まえ、学年末では各クラスの評定平均値が4.2程度になるように教科担任間で打ち合わせを行った。絶対評価だけでは評定平均値を調整することが難しい。そこで予め、調整する必要が出ることを想定し、絶対評価の他に相対評価を出せるようにしておくと良いと感じた。

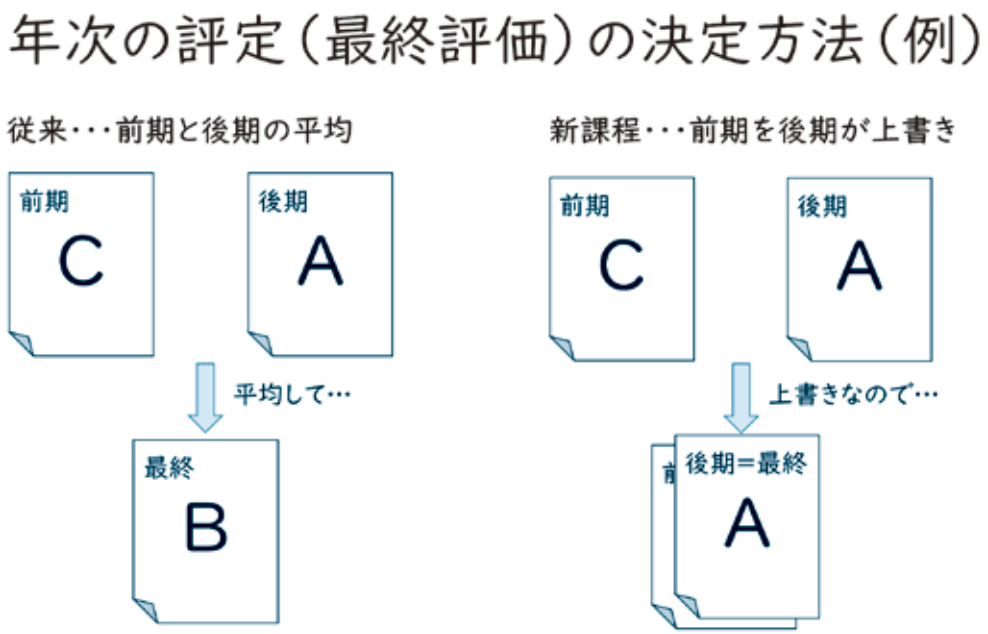


図２　学年末の評定の出し方（例）

５．さいごに

新課程に変わり、評価方法も変わった。この評価方法は学年進行で実施されるため、次年度、新しい評価方法に関わる先生がより多くなるはずだ。シラバスや計画表、ルーブリックなど生徒に提示する内容が多くなったため、幾分か手間が増えたように感じた。しかし、本年度担当された先生方が試行錯誤をしながら作成した資料を参考にすることで、手間が軽減するだろう。今後は、それらの資料を集約し、評価に関する傾向と対策をつかむ必要があると考える。この実践報告が新しい評価方法に関わる先生方の一助となれば幸いである。

６．参考資料

・西岡加名恵，高等学校　教科と探究の新しい学習評価，学事出版，2020
・小松敦，令和４年度実施の「新学習指導要領」に向けての取り組み，本校研究紀要，2021
・庄司邦彰，英進進学コース　新課程の評価・評定（令和４年度第１年次）について，2022

エナジードの導入

フレックス・技能開発コース　　針生　清人

１．はじめに

本年度の１年次から新たに実施することになった。エナジードの実施状況や実施した際の様子などを報告する。

２．概要

エナジードは生徒一人一人が自分の可能性を理解し、生き方に誇りを持つ大人になるためにこれからの時代を生きる力を身に着けることを目的としている。

授業の実施については接続の混雑を避けるために月曜と水曜の５校時目を利用して、それぞれ月曜には奇数クラス、水曜には偶数クラスと実施日を分けて行っている。また、授業の進行については、クラスごとに指導書にしたがって進めている。

３．実施状況と実施時の様子

・実施状況について

本年度の１学年は後学期からエナジードが始まった。はじめはＦ１～Ｆ５、Ｋ１～Ｋ５の10クラスで同時に進めていく予定だったが、同時接続のよる混雑で初回ログインや登録がスムーズに進めることができなかった。そのため、奇数クラスと偶数クラスに分けて行った。クラスごとに進行状況は異なるものの、初回ログイン、オリエンテーションを含めて約７時間実施することができた。

・実施時の様子について

実施時の様子については私が担当していた１Ｋ２の様子を中心に各担任の先生方から伺った様子について報告する。

エナジードは、目標の提示→ ワーク１→ ワーク２→ 振り返り の順に授業が展開される。ワーク１，２では正解のない問いに対して考え、グループワークを通して他者へ意見を述べる。生徒の中では普段の学習活動で積極的になれない人もエナジードでのグループワークでは、積極的に意見を出す様子がうかがえた。何人かの生徒にエナジードについて聞いてみた際、「授業で行うグループワークとは異なっていて新鮮だった。」など生徒への新しい刺激になっていると考える。

４．さいごに

本年度から導入したエナジードだが、普段の学習活動とは違った授業展開でエナジード自体に興味・関心をもち、積極的に参加する人が多数いた。

ワーク１，２では自分の意見をクラス全体に発信して、他の人の意見を見たり、その意見に「いいね！」をしたりすることができ、容易に情報共有ができる。

今後は本年度の改善点を見直し、よりよく活用していきたいと考える。この実践報告が来年度エナジードを実施する先生方の一助となれば幸いである。

５．参考資料

エナジードラウンジ：ENAGEED for T

情報ＢＵについて

情報科学コース　　日野　　彰

始めに情報ＢＵは、情報社会のエキスパートとして相応しい専門的情報処理のグローバルライセンス（ＭＯＳ試験）取得のための教員の指導力向上を図り実施されている。今年度は、ＭＯＳ Ｅｘｃｅｌ ３６５＆２０１９ Ｅｘｐｅｒｔについて研究授業として実施し、以下の通り報告します。

１　公開研究授業

（１）研修の主な内容

１．公開研究授業

①時　間　６校時（13：40～14：25）
②会　場　ＷＩＮ１室（南冥４階）
③授業者　布施晃伸、 実習アシスタント　片山貴子
④対　象　２Ｊ２（30名）
⑤内　容　Excel上において高度な日付と時刻の関数を使用し、数式およびマクロの作成を習得する。
⑥評　価　内容の習得に意欲的に取り組み、機能の必要性や有用性を理解しているか。
⑦考　察　ＭＯＳ Ｅｘｃｅｌ ３６５＆２０１９ Ｅｘｐｅｒｔを今年度４月より指導している。難易度の高い内容ではあるが、生徒のパソコンスキル理解習熟度は高く、授業中も集中して説明を聞き、よく理解して実習に取り組んでいた。授業の進み具合、生徒への働きかけも良く、授業に集中できる教室環境を育んでいた。生徒の実習操作の補うべき点、重要な関連事項も丁寧に解説していた。実習アシスタント教員も個別にきめ細かく丁寧に指導していた。

２．モデル授業

①時　間　７校時（14：40～15：20）
②会　場　ＷＩＮ１室（南冥４階）
③授業者　畳指ウェンデイ 講師、 実習アシスタント　清水玉妃
④対　象　２Ｊ１（31名）
⑤内　容　ＭＯＳ Ｅｘｃｅｌ ３６５＆２０１９ Ｅｘｐｅｒｔ上においてピボットテーブルを作成する。
⑥考　察　授業の始めに取り組む目的、ＭＯＳ試験について説明され、生徒の意欲関心を高めて授業に入られていた。２年はＭＯＳ Ｅｘｃｅｌ ３６５＆２０１９Ｅｘｐｅｒｔを今年度４月より指導している。難易度の高い内容ではあるが、生徒のパソコンスキル理解習熟度は高く、授業中も集中して説明を聞き、よく理解して実習に取り組んでいた。授業の進み具合を生徒に確認しながら、授業に集中できるよう取り組んでいた。生徒の実習操作の補うべき点、重要な関連事項は生徒の目線で理解できるよう丁寧にわかりやすく説明しており、教員にとっても今後授業をしていく上で大変勉強になった。

３．研修記録

① 公開研究授業

② モデル授業

（２）アンケートの結果から

研修会で扱った内容、説明、テキストの分かりやすさ、今後の業務に役立つものか、時期・時間の項目に十分に満足と答えた内容が96.0%、ほぼ満足と答えた内容が18.0%とほとんどの先生が満足されていた。

（３）感想や意見など

・資格試験の目的や授業の関連性、授業の中での目標到達点を明確に設定しているのが良かった。
・授業全体の流れを大事にして、導入、展開、まとめのメリハリや説明時のユーモアや机間巡視も良かった。
・授業全体の流れを大事にし、生徒全員の問題実習完了を見極めてから次に進むことが大事だと思った。
・授業の最初にやる本日の授業内容を説明し、見通しを立て行っていることが良かった。
・実例見せながらの解説はわかりやすく、生徒に目が行き届いた説明であった。
・内容の説明時、声が大きく、授業の重要ポイントを細かく丁寧にわかりやすく説明していた。
・モデル授業では、自分自身の授業を振り返り、参考になった点等を今後の授業で活かしていきたいと思う。

（４）畳指先生からの講評

・授業の最初にやるべきところを説明し、１時間の見通しを立てて行っていることが良かった。
・授業は声も大きく、強調したい箇所は注目させて解説し、生徒も集中しやすい雰囲気であった。
・教員がパソコン操作の実演を行い、生徒に実習操作をさせる展開は良かった。
・多くの生徒がＭＯＳ試験を受験し、多くの合格者を出すことが目標であり、そのため生徒にわかりやすい授業の展開を工夫することが大切である。

以上、今年度のＭＯＳ Ｅｘｃｅｌ ３６５＆２０１９ Ｅｘｐｅｒｔについての報告であり、今後もＪＣ－２１、教科センター、情報科学コース情報科の連携をより一層緊密にして研修の精度を上げ授業に活かし、生徒のＭＯＳ試験資格取得に向け励んでいきたいと思う。

「ICTを積極的に活用し双方向性を重視した授業」

社会科コンダクター　　小松　　敦

◇ はじめに

社会科のBrush Up研修会は４年前から実施されている。「社会科Brush Up」は、高校の「地理・歴史科」と「公民科」、中学の「社会科」の研修会である。高校は各科目の専門性が高く、その内容は多岐に渡ることから、「地理分野」・「歴史分野」・「公民分野」に分け、その中でも「歴史分野」においては「日本史」と「世界史」に分けて計画を立てている。毎年、公開授業を実施するコースや実施科目のバランスに配慮して研修会を実施しているが、今年度は以下の３回の研修会を実施した。

◎第１回～第３回研修会の概要

第１回　日時：令和４年５月25日（水）　１３：００～１７：００
　授業研究　　授　業　者：田上　史也　教諭（特別進学コース）
　　対象クラス：特別進学コース　１Ｔ４（生徒数40名）
　　教　科　書：山川出版社『詳述　歴史総合』（教科書P38～39）
　　単　　元：ACTIVE　アジアの繁栄とヨーロッパ
　授業検討会　助　言　者：吉田　剛　教授　（宮城教育大学大学院教育学研究科専門職学位課程
　　高度教職実践専攻教授）
　講　　話　　講　話　者：吉田　剛　教授
　　講　話　題：「社会系教科の評価方法」

第２回　日時：令和４年７月15日（金）　１３：００～１７：００
　授業研究　　授　業　者：白井　翔太　教諭（フレックス・コース）
　　対象クラス：フレックス学コース　１Ｆ５（生徒数34名）
　　教　科　書：東京書籍『公共』（教科書　P96～97）
　　単　　元：テーマ２　市民生活と私法　②多様な契約
　授業検討会　助　言　者：吉田　剛　教授　（宮城教育大学大学院教育学研究科専門職学位課程
　　高度教職実践専攻教授）
　講　　話　講　話　者：吉田　剛　教授
　　講　話　題：「「地理総合」・「歴史総合」・「公共」の新しい教科書の使い方」

第３回　日時：令和４年９月７日（水）　１３：００～１７：００
　授業研究　　授　業　者：伊藤　梨乃　教諭（情報科学コース）
　　対象クラス：秀光コース　１Ｍ１（生徒数15名）
　　教　科　書：二宮書店『わたしたちの地理総合』（教科書P58～59）
　　単　　元：第２章生活文化の多様性と国際理解
　　１節　自然環境と生活文化　暑い気候に対応した生活
　授業検討会　助　言　者：吉田　剛　教授　（宮城教育大学大学院教育学研究科専門職学位課程
　　高度教職実践専攻教授）
　講話　　講　話　者：吉田　剛　教授
　　講　話　題：「共通テストから考える社会系教科の見方・考え方」

◇「ICTを積極的に活用し双方向性を重視した授業」について

ここでは、第２回研修会で授業公開された、「ICTを積極的に活用し双方向性を重視した授業」を紹介する。

◎授業者：白井　翔太　教諭（フレックス・コース）

（１）概要

公開された授業は、単元がテーマ２「市民生活と私法　②多様な契約」という分野で、新課程で扱っている特徴的な分野である。

授業内容は、「契約」という普段、生徒たちはあまり意識していない、あるいは、まだ経験していない日常

生活に関わる分野である。複雑多岐に渡る「契約」をいかに分かりやすく、かつ身近に感じさせるかが大きな目標になる。

白井教諭の授業は、その目標を実現するために、ICTを有効に活用し、図表や写真などの諸資料を多用し、また、「Google　JamBoard」（＊注）を用いて、生徒が積極的に授業に参加できるように工夫をして、生徒の興味・関心を引くと同時に、思考力・判断力を高めるものであった。また、グループ学習を取り入れ、生徒どうしの協同による学びも目指したものであった。

さらに、生徒に多くの発言する機会を与え、教師の一方通行の講義にならないように配慮した授業であった。生徒たちは白井教諭の作成したスライドや「Google JamBoard」に興味を示し、積極的に授業に取り組んでいた。とても刺激的な授業で、参加した多くの先生方の参考になるものであったと思われる。

（２）授業展開

① 導入

・最初にOwn　PCのセットアップとして、当該授業で利用する「Zoom」への接続と、「Google JamBoard」（以降、「JamBoard 」と省略）への生徒の入室を確認し、以後の授業展開へのPC環境の設定を行った。

・次に前時の復習と本時内容を「Power　Point」（以降、「PP」と省略）を用いて、「契約」についての前提を理解させた。この時、PPのスライドに映し出された写真は、楽天グループ株式会社の代表取締役会長兼社長の三木谷浩史氏とＦＣバルセロナのスペイン代表としても活躍したアンドレス・イニエスタ選手の二人が並んでものである。これは、アンドレス・イニエスタ選手がヴィッセル神戸への移籍契約が成立したことを発表している写真である。この写真から「契約」について、生徒に興味・関心をもたせ、学習意欲を喚起させた。

② 展開

・最初に「契約自由の原則」をPPのスライドの図式で説明し、「契約」の意味や法的責任について説明した。さらに資料を提示して、PPのスライドの視覚とプリントへの記述作業の両面から「契約」を種類別に区別させ、授業への集中度を高めた。

・次に、PPのスライドの図式を用いて実生活で行われている「契約」について理解し、「契約」する場合の注意点についても学習させた。

・生徒自身が行っている契約や今後、想定される契約について、「JamBoard」を用いて、列挙した「契約」がどの「契約」形態に該当するかを分類した。「契約」の種類は、「売買契約」、「賃貸借契約」、「雇用契約（労働契約）」、「消費貸借契約」の４つを設定し、４人を一グループとして、生徒同士が話し合いながら分類を行った。「JamBoard」の利用により、教員と生徒が教材を共有することができ、その場で様々な双方向の操作が可能になる。今回は、４種類の「契約」に対して、日常生活で行われている「契約」を生徒がグループごとに操作して分類作業を行った。この間、白井教諭の適切な助言がなされ、生徒の発表も多く行われた。

・その後に、生徒たちの分類について、クラス全体で「JamBoard」で情報を共有し、白井教諭がまとめの学習を行った。

・最後にPPのスライドの図式を用いて、消費者の権利や各人の権利保障（民法特例法）やクレジットカードの仕組みを理解させた。

③ まとめ

・「マイノート」のワークシートを活用し、本時の学習内容を記述させた。また、その内容を複数人に発表させて、クラス全体で学習の成果を共有させた。

（3）本公開授業の特筆する点

① ICTの積極活用

授業でPPを利用して授業を展開している教員は多数いると思うが、場合によっては一方的な講義内容になっている場合も少なくないと思われる。今回、白井教諭は、リアルタイムで共同作業ができるデジタルホワイトボードである「JamBoard」を活用した。これにより、教員と生徒、あるいは生徒同士が、その場で画面の変更や挿入、筆記や描画などの様々な操作により、教員と全生徒の双方向の参加型授業の展開がなされた。

②「マイノート」の活用

「マイノート」は、フレックス・技能開発コースの生徒が共通して使用している教科「公共」の記述式のノートで、同一科目を複数の教員で担当する場合、指導内容に大きな相違が生じないようにするための一つの規準になっている。このような指導内容に共通性を待たせるための「マイノート」の活用により、授業担当者間における学習評価の「ばらつき」を抑制できていると思われる。今年度からの新学習指導要領の実施に伴い、徹底した「観点別評価」が年次進行で導入されたが、より公正・平等な学習評価を行うためには、コース内や教科・科目担当者間で、こうした工夫が必要になると思われる。

（4）研究授業検討会

白井教諭の実践授業をもとに、宮城教育大学の吉田剛教授の指導の下、授業研究を行った。吉田教諭への指導内容は以下のとおりである。

・授業で教科書や学習ノートをどのように扱うか、工夫が必要である。
・教員が一手間かけて、自分で資料を準備して、根拠を明確にして考えさせる問いを発することが重要である。
・授業では先生も生徒も十分に頑張っていたと評価できる。グループワークでも生徒は前向きに取り組んでいた。
・これからはデジタルの教材をいかに活用するかが重要になる。授業以外でクラウドを利用して、授業の一部を展開することも今後、必要になると思われる。
・オンライン授業には欠点もあるので、十分な注意が必要である。
・評価については、継続的に観察して評価し、説明責任を果たせるようにする必要がある。

以上、本年度の社会科Brush Up研修会の中で実施された、「ICTを積極的に活用し双方向性を重視した授業」を紹介した。

＊注

「Google　JamBoard」については、以下のGoogle HPの説明をご参照ください。

https://edu.google.com/intl/ALL_jp/jamboard/

Slackでライティングの指導をしてみた！

特別進学コース　英語科　　御代　力夫

― 言語活動が多すぎる ―

この試みのきっかけは新課程の１年所属になったことで、『論理と表現Ⅰ』という英語何々という名称でもない新しい科目に出会ったからだ。教科書（CROWN Logic and Expression Ⅰ）を開いてみると、１つの課に平均８ページ分割かれており、この科目に関する他社の教科書も同じようにコミュニケーション重視の言語活動が多く含まれている。中身をみると、Lesson 1 のタイトルの後は次のような構成になっている。

【READY】導入部分である。［Think & Talk ロボットについて、話し合ってみましょう。］とテーマが掲載されている。早速、グループワーク（以下GW）の時間である。

⇩

【Going Deeper】リスニングのコーナー。対話文を聞いてコミュニケーション表現を学ぶ。

⇩

【TASK】短めのダイアローグを読んで、再びGW。

⇩

【Data】表やグラフから情報を読み取り、図表に関する空欄補充問題を行う。

⇩

【TASK】短いダイアローグを読んで、三度目のGW。

⇩

【Think for Yourself】テーマに沿ってライティング活動。

⇩

【Share Your ideas】言語材料作成後、ペアワーク（以下PW）。

⇩

【Grammar Focus】既習の英文法の整理。

⇩

【TRY】文法事項を含んだ短いダイアローグを読んで、会話練習や発表練習をPWで実施。

⇩

【Listen & Take Notes】リスニング練習。要点と構成をとらえてから、４度目のGW。

⇩

【Generating Ideas】/【Organizing】言語活動の構成を考え、話す内容を整理する。まとめとして、音声の注意点【Sound Tips】と役立つ表現【Useful Expressions】が掲載されている。

以上がLessonひとつの流れである。１課の中に４度のGWと２度のPWが含まれ、それらがスピーキング練習の機会となる。また対話文が５つ入っているので、これでリーディングとリスニングの言語活動を行うことになる。しかし、これだけの言語活動に取り組むには相当の時間を要する。それで、生徒自身が自分の時間を使って行えるライティング活動は、家庭学習という形で課題を提出してもらうことにした。そこで、Slackの出番である。

Slackは人々が必要とする情報につなげる為のビジネス用のメッセージングアプリである。メッセージのやりとりはダイレクトメッセージ（以下DM）を使用する。DMとは、Slackにおいて、チャンネル外で行われる小規模のやり取りのことである。必要な人との情報はチャンネルと呼ばれる専用のスペースに集まり、場所・時間帯・職務に関わらず、自分の都合の良い時間に必要な情報にアクセスし、質問したり、進捗状況を確認したり、最新情報を共有したりすることがスケジュールを調整することなく可能になるチャットサービスである。このオンラインチャットツールを活用して、生徒各自から英作文課題を提出してもらい、添削して返す。DMを使ってそのやりとりを何度も繰り返しできることがSlack選択の理由である。実施するにあたっては、学年のＩＣＴ係に科目ごとのチャンネルを設定してもらい、安全安心な交信をする為に、教科担当に加えクラス担任とＩＣＴ担当教員も管理者として登録してある。

― 実際に行ったライティングの指導内容 ―

実はこのライティングの指導をSlackでやろうとした理由は上記のことだけではない。この『論理と表現Ⅰ』の科目を担当するのは当該年度1クラスだけだったこと、そしてその学級が選抜クラスだったことが大きな要因となっている。1クラス（38名）だけなら、なんとか一人ずつ添削が可能ではないか、さらに選抜クラスなら高い頻度の提出状況が見込めるのではないかと考えていた。（実際はそれほど甘くはなかったのだが‥）

教科書のCONTENTSをみると、Lessonは１～10まである。１年間の課題としては適当な量だと判断した。それぞれの課題のタイトルは下記のとおりである。教科書の内容に準じて設定し、授業で指導した事柄がライティングに役立つように配慮したつもりである。「アンケート調査 設問１ 課題の内容について」の集計結果においても、“教科書から（89.2％）”が最も多く、次点が“入試問題から（10.8％）”という結果だった。

Lesson １の課題について指示を出したのが４月下旬の授業である。提出期限は約２週間以内を基準とした。早い生徒は４月中に、遅れた生徒は５月15日前後になっていた。この期間についても、「アンケート調査　設問２　提出までの期限」は“十分”と“適切”を合わせて94.6％が肯定的な回答だった。“不足”と回答したのはわずか２名だった。

Lesson １　「どんなロボットを作りたいですか？」
I would like to make a robot that ….
Lesson ２　「あなたの理想の食事メニューについて」
I am going to talk about my ideal breakfast menu. It is …
Lesson ３　「日本の紹介したいもの」
I would like to tell you about …
Lesson ４　「環境問題のためにできること」
I think ~ is a serious environmental problem.
Lesson ５　「あなたがやってみたいボランティア活動は何ですか」
What kind of volunteer activity would you like to do?
Lesson ６　「あなたの好きな小説を教えて下さい」
Tell me about your favorite novel.
Lesson ７　「高校時代の抱負」
What would you like to do in your high school days ？
Lesson ８　「宮城県内のお薦めの名所は？」
Where is the sightseeing place you recommend to foreigners?
Lesson ９　「田舎と都会ではどちらがいいか」
Which do you like an urban life or a rural one?
Lesson 10　「自分の目指す職業とAIとの関係について」
The relationship between the job you want to do and AI.

上記の設定した各課題１つに対して添削の回数は１人当たり平均2.8回程度である。題材によって１度で済む時もあるし、５回再提出を求めた場合もある。DMは履歴が残るので、直前の出した自分の英文のどこが指摘されたのかすぐにわかる。しかし、そこしか訂正しない場合が圧倒的に多い。英文全体を読み直さないので、他にも細かい訂正箇所があるにもかかわらず、セルフチェックが効かずに再度提出を求められる。添削回数が２度、３度と増えていく。

次は量について述べてみる。生徒からの課題英文は初めの頃２～４行で、英文の数は４～６文程度だった。自分が興味・関心がある場合は６～８行に増え、英文は５～７文に減っていく。つまり、１文が長くなるのである。接続詞や関係詞の使い方、例の出し方などを覚えることで長い文が書けるようになる。また、その指導過程において生徒自身が - **高校の学習レベルに見合った語句を使おうと努力し、英語の表現や単語、文法の使い方に気を配るようになり、書いた後はより高いレベルを目指して確認する習慣が身に付いた** - ことは大きな成長の証である。

生徒たちがどのような英文を書いてきたのかSlack上でのDMによる「添削の交信状況」を紹介しながら、指導の例を示してみる。アイコンは常識の範囲で編集を認めた。

＜例１＞　　2022年５月14日

よろしくお願い致します。I would like to make a robot that I can study more hard for long time. I have two reasons. First, I want to be smart like Izawa Takushi. Second, I want to finish my homework more early. If I could do them, I can make my dream come true. So, I would like to make this robot.

御代力夫
気持ちはわかりますが、具体的にロボットに何をしてもらうかな？　眠ってしまったときに起こしてもらうとか…。a robot that .. の that は同格の接続詞ではなく関係代名詞なので、that 以下は不完全文になります。あとは、more hard ➡　harder に、more early は more easily の方がいいですし、最後の部分は smart の箇所と同じように、make a robot like that.
By the way, what is your dream?

I would like to make a robot that can focus me. I'm not good at focus for long time. So, I want a robot to support me. For example, the robot bring me a something to drink and tell me mistake and so on. I can focus on study and I can be smart. My dream is being a teacher.
先生からのアドバイスを踏まえて、もう一度考え直しました。お手数お掛けしますがどうぞよろしくお願い致します。

2022年５月16日

御代力夫
もし focus を集中するような意味で使っているなら、concentrate on ~ の方が適切です。 For example, の後は the robot brings me something to drink and tells me about mistakes [faults] and so on. I can concentrate on studying. となります。細かい部分にも気をつけましょう。

＜例２＞　　2022年８月17日

I'd like to join local cleanup activities. I often see trash on the roadside in my area. I think people feel uncomfortable when there is trash on the ground. That's why I want to participate in local cleaning activities and make the area beautiful.
遅れてしまいすみません💦　添削お願いします🙇‍♀️

2022年８月20日

御代力夫　10：22
身近な所に目を配り、問題点を探る姿勢がいいですね。言いたい内容も概ね伝わる英文になっています。細かい点ですが、別な表現で考えてほしい箇所が２つ。..in my area. と 最後の beautiful をよく考えて、一番的確な語句を探してみて下さい。

2022年８月24日

アドバイスありがとうございます✨　悩んでしまい返信遅れました💦　申し訳ないです🙇‍♂️　in my area. は in my city. で、beautiful は clean にしたらどうでしょうか？

御代力夫
とても的確な選択ですが…。できれば、make「使役」の意味より keep the area clean の方がもっとよかったかな…？

2022年８月25日

なるほど！ keep the area clean の使い方覚えておきます🙇‍♀️ありがとうございます。

下記に示したのは指導後に行った「アンケート調査　設問５の回答［(　) 内は類似の数］」の集計結果である。自由記述形式で、類似回答の多い順に掲載した。全体の回収率は97.4％。

➡ **『指導を受けてみて、自分の成長を感じた点はどんな所ですか』**
- **英語の表現力**が増え、それをどう使うかで伝わり方が変わることを知ることができた。（10）
- 英文を書いた後にケアレスミスなどに対して**確認をする習慣**がついた。（７）
- **英文法**に関する知識が増え、それを意識するようになり、使えるようになった。（６）
- **英単語**の使い方に気を配り、区別して使い分けることができるようになった。（３）
- 回りくどい言いまわしをできるだけ**簡単で的確な語句で書ける**ようになった。（３）
- 英作文を書く際の組み立て方や流れを理解できるようになった。
- 一文が長くなった。
- 自分の思ったことを言葉にしようと努力するようになった。
- **論理の展開**を意識して英文を作るようになった。
- 先生に質問する機会が増えた。
- 英検の対策にもなり、能力が底上げされた。
- 文章による説得力のもたせ方を学んだ。
- **英文を書くという作業に慣れる**ことができた。

１年間の指導を経験して、生徒は何らかの成長を感じてくれたようだ。考察としては、英語そのものに対する学習の成果を挙げるものが多く、自分で調べた熟語や単語を使ってみたら、少し言いたいことと違っていたという経験から「語法」というものに関する意識が身に付いたことがその１つ。また、英文を書いてみた際の可算名詞と不可算名詞の違いに気づかないことや和英辞典依存の動詞の選び方など、英文法の知識がかなり不充分だと実感したことが２つ目。その他の例として、三単現ｓの忘れ、単複の確認不足（普通名詞と物質名詞）、動詞（自動詞と他動詞）の使い分けができていない、コロケーションの視点がない、日本語訳のような英語の並び、できるだけ能動態を使うことや物を主語にする表現が少ないことなどが見受けられた。3つ目は英文を書いた後に少なくとも１度は見直して、ミスがないかを確認するようになったこと。伝わりやすい表現を求めて推敲するようになれば、さらに良いのだが‥。この指導を通して最も得てほしかった成長は、マークを付けた下線部の２つの回答である。すなわち、英語は論理的な言語であることを意識して「**論理的な思考を鍛えること**」、また何度も書く訓練をすることで「**英文を書く作業に慣れる**」ことである。この２つの回答に同意する者が半分以上になることが理想だった。

― 短所を抑え、長所を伸ばすには ―

最後に、今回実行してみた「Slackを使ったライティング指導」について、生徒がアンケートに記載した「長所・短所」について考察してみる。以下に示したのは前述と同じ、指導後に行った「アンケート調査　設問３の回答［(　) 内は類似の数］」の集計結果である。自由記述の形式で、類似回答の多い順に掲載。複数回答あり。回収率97.4％（37/38名１名欠席）。

➡ 『Slackによる指導の長所・短所について、活用してみての感想を述べて下さい』

＜長所に関する回答＞　※印は筆者のコメント

・スマホで時や場所を問わず、課題提出が可能。好きなタイミングで提出できる。（16）

・英作文の書き直しがしやすい。何度も書き直せる。PCだと早く仕上げられる（８）

・やりとりが簡単で複数回できる。リアルタイムでの指導も受けられる。（６）

・過去の取り組みの履歴が残っているので参考にしやすく、復習するのに便利。（３）

・DMで詳しいアドバイスをもらえる。丁寧な指導を受けることができる。（３）

※ 字数制限もなく、大量の情報提供や助言が可能であるが、添削した箇所の色付けや下線の種類、強調のするための飾り文字などが少ないので、分かりづらい。

・対面でないので緊張しないし、手渡しの必要もないので便利。（３）

・紙（プリント）を失くさずに済む。（２）

・PC入力だとスペルミスに自動修正してくれる。文法やスペルをネットで調べやすい。（２）

※ PCの辞書機能やネットの翻訳サイトを使って英文をつくる人もいるらしい。

・質問を積極的に行えた。緊張せずに取り組める。（２）

・主体的に取り組める。

＜短所に関する回答＞

・課題をよくためる。期限が不確定で後回しにする。忘れてしまいがち。（６）

・パソコンに打ち込むことが面倒。時間がかかる。（５）

※ PCやスマホの文字入力を厭わない者と苦手な者がいる。

・生徒も教員も通知に気づかないことがある。添削までに間がある。（４）

・入力ミスが起きやすい。（２）

・手元に残らない。

・紙に書くよりミスが多くなる。見直し回数が少ない。

※ 完成即送信で、見直しせずに提出したと思われる課題が多かった。

長所としては、スマホを使用している生徒にとって時や場所を考慮することなく提出できる利便性がある。その期限内であれば、自分の都合の良い時間に提出可能である。ただし、このことに関しては夜間に課題を送信してくる生徒も多くいるため、返信についてのルールづくりは必須であると感じた。紙（プリント）との違いについては、紙であるならば登校して手渡しが原則であるため提出場所が限られるが、Slackはその必要がないし、紙を失くす不安もない。また、紙だと１度赤ペンで添削された課題が返却されて終わりだが、Slackは何度も書き直しが可能で、何度も指導が受けられる。一方、短所として多く指摘された点が、課題がWeb上にあるために忘れてしまい、放置しがちになるということ。意識してチェックしないと、通知に気づかないことがある。そのため、返信が遅れる。また、提出に関して「紙の方が書きやすい」とか「手書きも大事」といったプリントの価値に触れた意見もあった。

「Slackによるライティング指導」の基本的な課題として、ルールづくりはもちろん、SNS上におけるSocial Media Policyの遵守が挙げられる。また、実践的なものとしては、アンケートの総合的な感想にあった「今後も

英文をたくさん書く機会を得たい」とか「語彙力を増やしたい」という意欲を継続させることが肝要である。さらに、Slackによる指導を通して「英語を書くことに対する苦手意識が消えた」とか「英作文のスキルが上がった」といった感想を今後の指導にどのように活かしていくかについて模索しなければならない。

＜ 参考文献 ＞

・『減点されない英作文-改訂版』 河村一誠　著　学研
・『もっと減点されない英作文　過去問演習編　-改訂版』 河村一誠　著　学研
・『シンプルな英語』 中山裕木子　著　講談社現代新書
・『自由英作文はじめの一歩』 工藤洋路　著　アルク
・「英語教育　高校新課程どこがどう変わる？」1月号．2022　1月号　大修館
・「英語教育　児童生徒の声を引き出すアンケート作成・活用術」3月号．2022　大修館
・「英語教育　英語の論理構造を理解する」8月号．2022　大修館
・「英語教育　第1特集　新課程の小中高の英語教育をふり返る」3月号．2023　大修館
・「2022 研究紀要」 第37号　秀光中学校　仙台育英学園高等学校

＜ 参考資料 ＞

Slackを活用した英作文指導に関するアンケート調査

新教育課程の実施に伴い、今年度初めて Slack による相互作用を活かした英作文の指導を取り入れてみました。題材を教科書で習った内容から取り上げ、それに付随した作文課題を提示することにしました。約１年間のやりとりを通して、10個の英作文課題に皆さんは対応してきた訳です。その結果を受け英語力の改善が見られたと思われる点やこれまでの経過を通して気づいた自分自身の変化について教えて下さい。ご協力宜しくお願いします。

1．　Slack の英作文課題の選択について　[　教科書　・　その他の教材　・　入試問題　]

2．　課題提出までの日程（約２週間程度）はいかがでしたか？　[　十分　・　適切　・　不足　]

3．　Slackの長所（便利）・短所（不便）について（Slackを活用してみての感想）

4．　**紙による指導**と比較して、Slackによる英作文指導をどう思いますか。

5．　指導を受けてみて、自分の成長を感じた点はどんな所ですか？

6．　指導を受けてみて気づいた 自分に足りなかった英語の学習分野はどんな所ですか？

7．　英作文の指導を受けた総合的な感想を教えて下さい。

※ 個人情報を秘匿して回答を活用することに同意しますか。　[　はい　・　いいえ　]

教育 × メタバースの試行から見えた成果と課題

広域通信制課程　ILC青森　教諭　　村上　　淳

本稿では通信制課程におけるメタバース（仮想）空間を用いた課題作成を通して得られた成果と課題について共有する。宮城大学で開催された「Downstreamから学ぶDX」を受講する中で得られた知見も加え仮想空間を学習の為のツールとして使用した結果を教員・生徒それぞれの目線から評価するとともに、改善点や展望など仮想空間を取り入れた学習の展望についても触れたい。

メタバースという用語については米Facebook社が社名をMetaに変更した2021年以降急速に広まった言葉であるが、前提として本稿におけるメタバースの定義は以下のものとする。

- インターネット上に設計された３次元空間であること
- 多人数同時接続が可能でリアルタイム処理がなされること
- 自身の分身（アバター）を投影でき、任意にカスタマイズできること
- 多様なアクセス手段が提供されていること

背景

筆者の担当する科目情報Ⅰは２単位の必履修科目であるが、面接授業時間は半期で２時間、提出課題枚数は２枚の科目である。２時間のスクーリングで教科書の広範な内容をすべて扱うことはできず、レポート課題をベースとした期末試験を実施した際に追試対象となる生徒が多くいることが課題としてあった。レポート課題からの出題量は約８割を占めており、追試対象となった生徒に関してはレポート課題の内容が定着していない可能性を強く示唆する結果となっている。また、レポート課題に自力で取り組めない生徒、身体的・精神的事由により登校することが困難な生徒も一定数在籍しているがそのような生徒に対しては個別にスクーリングを実施、オンライン授業を提供するなど個別の事情に配慮してきた経緯がある。しかしながら在籍生徒数が年々増加するに伴い上記のような事情を抱える生徒も増加しており個別にスクーリングを提供することは困難さを増しており、Ｌネットも新学習指導要領に対応できていない科目があるためレポート課題に取り組むためのフォローアップについて必要性を感じていたところである。そうした折に加藤聖一常務理事より学園としてのメタバースに対する捉え方を伺う機会に恵まれ、また宮城大学で行われたダウンストリームより学ぶDXリスキリングプログラムを受講する中でメタバースと教育の親和性の高さ・体験から得られる教育的な価値を感じ、自習や予習ができる空間としてメタバースを使用することができるのではないかと思い至り、今回の試行に至った。

使用したプラットフォーム

NTT QONOQ,INC.　DOOR　　https://door.ntt/

選定理由

仮想空間へのアクセスにユーザー登録やログインなどの煩雑な認証を必要とせず、ソフトウェアのインストールも必要としない。URLを知っていればワンステップでアクセスできる点・空間作成に要する技術的ハードルの低さ・画像や動画などの多様なメディアを配置できるユーザビリティの高さハードウェアスペック要求水準の普及性等を総合的に勘案し選定した。

検証方法

追試課題としてテストを正しい回答に直すという課題を課し、課題に対応する仮想空間を作成した。
https://s.door.ntt/BCh3NXv
該当生徒に対してはアンケートの回答を以て課題の提出とすることを説明し、QRコードにて仮想空間及びアンケートフォームへのリンクを配布。
実施期間2023年２月11日～2023年２月18日
配布対象生徒数 27名　　回収 21名　　回答率 78％

対象生徒

情報Ⅰの期末試験において追試対象となった生徒27名中回答した21名
追試対象となっていることからも、情報技術に関して特段興味関心を持ち合わせている生徒ではない。
また、デジタルネイティブ世代と言って差し支えないため、スマートフォンの所有率は100％であった。
（課題配布時に口頭で確認）

概要

仮想空間作成の経験はなく、全て手探りの状況からのスタートであったが、DOORがmozilla社のメタバースプラットフォームHubs Cloudベースであるため、ルーム制作のノウハウやアセットなどの先行事例が多数散見されたことで制作を進めることができた。

ルーム作成に関してはプリセットをそのまま使うだけであれば特別な操作などは必要とせず、直感的に利用が行えるように配置されており実際にプリセットのみで表示される空間が図１である。しかしながらこの状態の空間では授業者が動画を投影して授業を行う従来のオンライン授業と差異がない形でしか利用ができないため、授業に合わせて空間づくりをする必要性が生じている。この点に関しては後程詳述することになるが授業の目的に合わせた空間作成が可能であり、アイデアを具現化する手段も多岐にわたる。視線や発話の有無が可視化されることにより、生徒が今どのような活動を行っているのかを把握する視認性については従来のZoomを利用したオンライン授業よりも見通しが良く、対面での授業に近いコミュニケーションが期待できる。新学習指導要領により導入された観点別評価をオンライン授業でも評価観点に合致した空間作成をすることで行えるようになるなど、全日制での学習においても有効なツールになる可能性を秘めている。通信制での活用とは用途が異なるため同一基準で論じることは難しいが、参考となる知見が多く得られたため全日制での活用を検討する一助になれば幸いである。

図１　テンプレートの教室

通信制課程での活用例

検証方法にて記載の通り、追試課題の一環として仮想空間内で学習をしながらテスト直しに取り組むという課題を実施した。作成した空間（図２）ではテスト問題に応じたヒントや解説を画像形式で配置している。画面右側にはアクセス時に視界に入る形で操作方法の説明を置いている。空間へのアクセシビリティとユーザビリティに関しては図３をご覧いただきたい。

図２　課題作成のための空間

仮想空間までのアクセスに関しては回答した全員が紙での案内を見ただけでもアクセスすることができていた。マイクの許可については戸惑った生徒もいたようであるがユーザビリティに関しても過半数の生徒が直感的に理解できており、残りの半数についても仮想空間内での案内を見れば理解できていると回答している。このことからも空間までの経路については障壁がないと考えて差し支えないだろう。また、アクセスに関しては選定理由に挙げた認証を必要としない設計である点も体験価値の向上に寄与していると捉えている。課題として後述するがセキュリティリスクを内包している点については検討の余地があるものの、概ね好意的な反応が得られていることがアンケートからは伺える。

図２の空間作成についてはあらかじめ用意されたプリセットのうちの１つを使用し、掲示しているコンテンツ部分のみを作成した。空間内におけるコンテンツの表示にはURLを取得する必要があり、当初はGoogledriveでリンクを取得することを想定していたが、一定時間経過後にリンクが機能しなくなるという現象が頻発したため、DOORに備え付けられたアップロード機能を用いてURLを取得している。

コンテンツを画像化してアップロードするという冗長なことを行っているがこれはDOORがマルチバイト文字に対応していないため日本語が表示できないことから日本

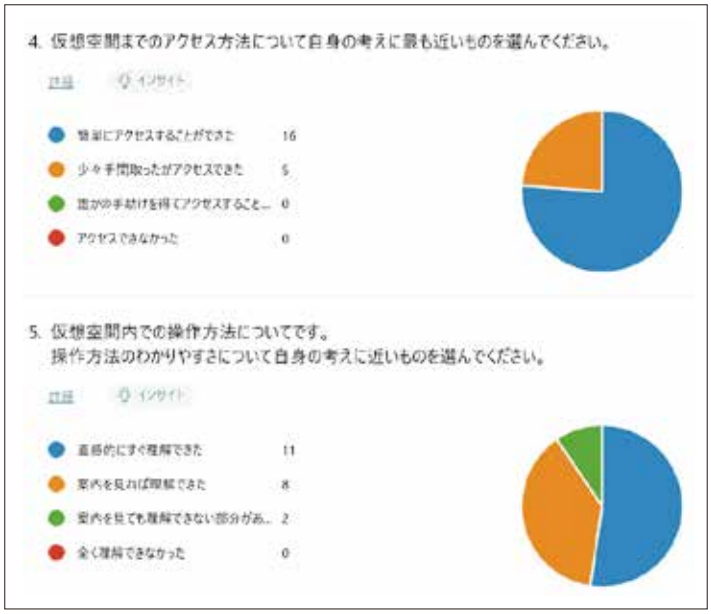


図３　アクセシビリティとユーザビリティ評価

語による説明を画像化する必要があるための措置である。今回の体験を通した限りでは日本語で文字を表示するために画像化しなければならないことはそこまで不便とは感じなかった。空間作成時の様子を図４に示す。

アップロードした画像はアカウントに紐づけられており、空間作成の際には過去のものを含め、自身がアップロードした素材を呼び出して使用できるようになっている。汎用性の高い３Dオブジェクトなどを再利用できる利点はあるがアップロードしたオブジェクトがただ羅列されているだけなので管理することを考えるとファイルネームに規則性を持たせるなどの工夫も必要となってくる。アップロード上限や有効期間について不明瞭な点もあるため、DOORでの機能に依存するのではなくオブジェクト管理を行うためのアップローダやサーバ運用については将来的な必要性があると感じた。

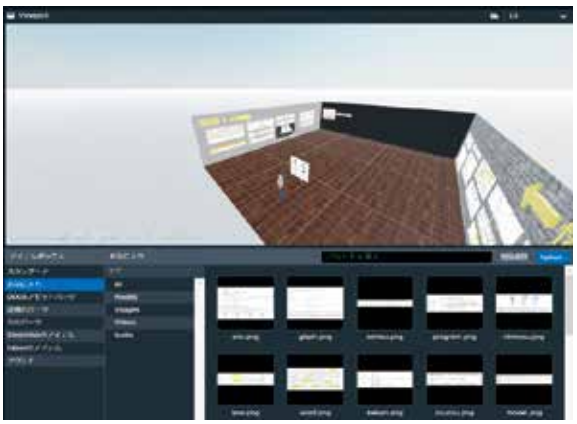


図４　作成時の様子

３Dオブジェクト作成に関してであるが、無料ソフトのblenderを利用することで３Dモデルと出力ファイルを取得することができる。Blenderに関しても初めての作成であるため、出来栄えがいいとは言えないが矢印やアルファベットなどの汎用的な素材については数時間の練習で作成・出力が可能であり、また実用に耐えうるクオリティは担保できているものとなった。Unityやblenderは実際のゲームや映像制作にも用いられるほど汎用的かつ高機能な３Dレンダリングソフトウェアであるため突き詰めるときりがないほどに奥深いものであるが簡素な造形物の作成であれば数時間の練習で習得でき、仮想空間活用の幅は大きく広がるため仮想空間作成に必要なスキルの一つとして学習することを強く推奨したい。

次に体験を通しての反応であるが文字の見え方以外はおおむね好評と言える結果となった。（図５）文字の見え方については課題が明白であり生徒のほとんど全員（21名中20名）がスマートフォンでアクセスをしていた点に集約される。（図６）空間作成はPCで行っていたが、視聴時にスマートフォンに置き換わることをそこまで想定しておらず、PCとスマートフォンとの視差に配慮しきれなかった結果として文字の見やすさが損なわれ、見づらいという評価が多くなってしまった。空間作成時における要点として同じ轍を踏まないようご留意いただければ幸いである。

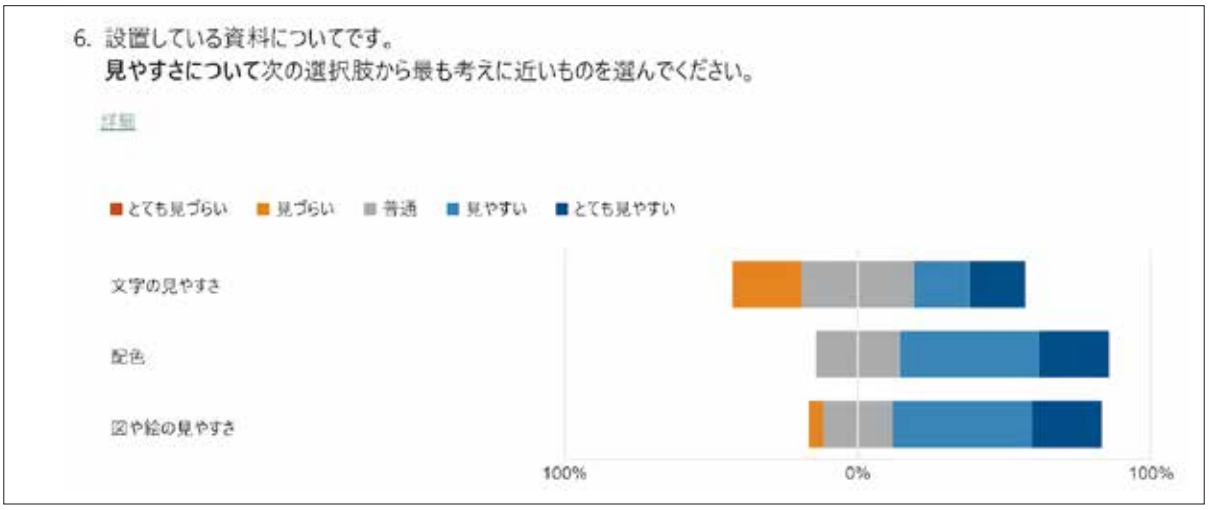


図５　視認性に関する評価

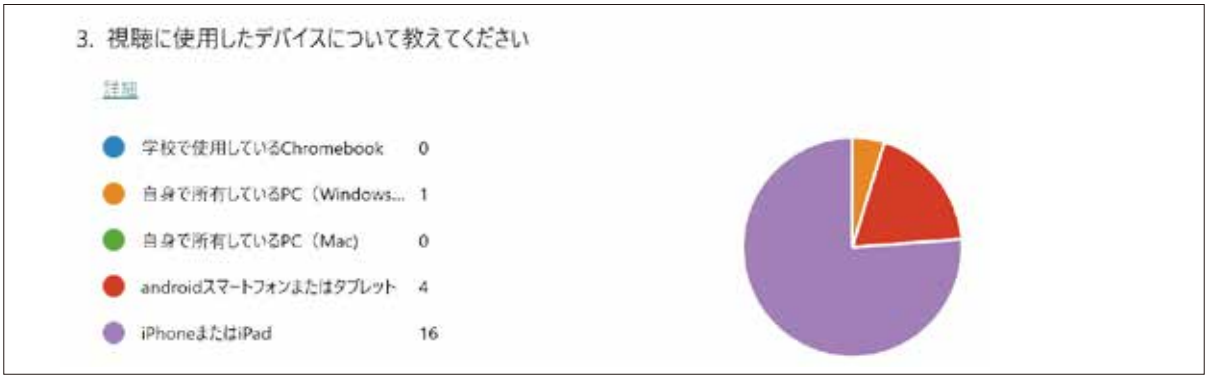


図６　使用デバイスの割合

動画やその他メディアを配置した空間作成の場合も同様であるが、見づらい場合の対応策の一例としてコマンドによるアバターのサイズ変更について付記しておく。「/grow」ではアバターのサイズを大きく、「/shrink」ではアバターのサイズを小さく変更することができる。１段階の変化であっても見え方には大きな影響があるため、Hubsベースの仮想空間共通のテクニックとして覚えておくとよい。

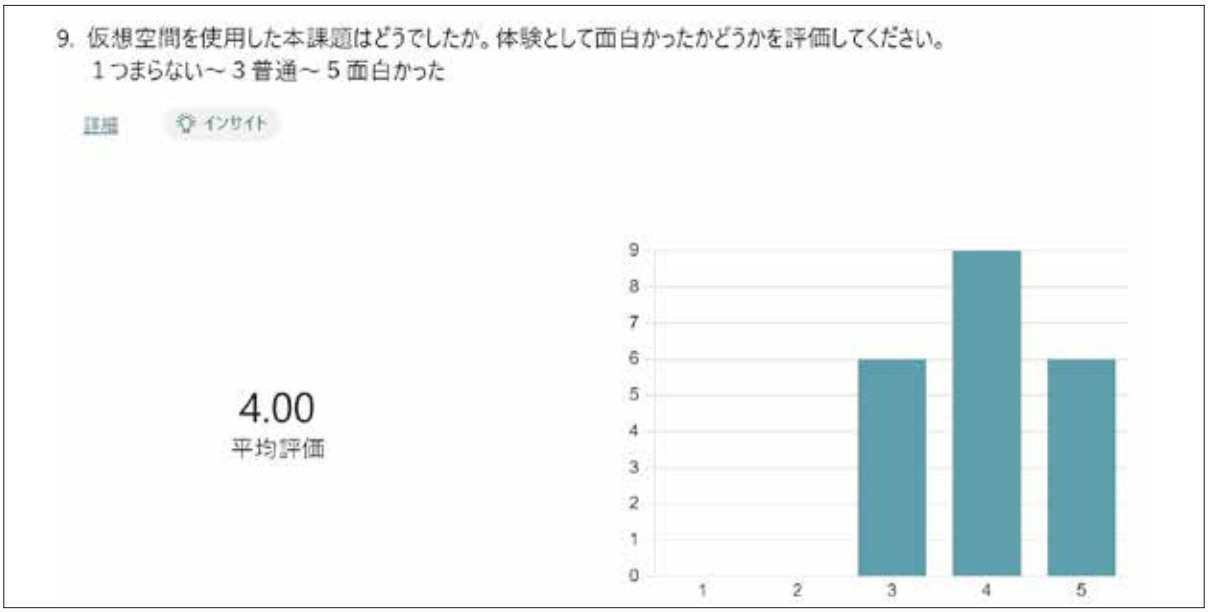


図７　仮想空間体験の生徒評価

仮想空間での学習は体験としてどうでしたか。 上記評価をつけた理由についてより詳細に今回の体験全体を通した感想を書いてください。
_(┐「ε:)_
面白い取り組みだと思った
簡単にアクセスできて360度周りを見れたり移動できたりしてすごいと思った
ゲーム感覚で操作をしながら学習することができたのでこのような評価をつけました。
仮想空間での学習は、楽しみながらできるので良いと思います。
今まで試したことのない方法でしたので面白かったです。
操作が難しかったけど、新しい体験ができて良かったです。
QRコードを読み取って仮想空間に入った時にテンションが上がったから。
普段と違うことをやったから刺激があって良かった。
プリント等を見て直すより、興味もモチベもあったから取り組むのが億劫じゃなかった。
私はバーチャルや仮想空間は凄く好きなので授業などを仮想空間でするのはとても良いと思いました。
少し見づらいところもあったけど要点がまとめられていて良かった
新しい感じで面白かったです。
こーゆう体験ができてとてもいい経験になりました
楽しく課題が出来ました！
初めての体験だったから結構面白かった
少し操作に慣れる必要がありそうですが、仮想空間を使ってヒントを見て追試を進めれる事が新しいなと思いました。
始めてやった事なので楽しかったです。
勉強にはなったが少しログインまで迷った
面白かった
個人的にはこういったもので学習する方が楽しい
スマホやPCで操作するのでいつもの自習と比べるとやりやすさを感じました
テストの答えとヒントが載っていると思わなくてびっくりした。普通に面白かった。
仮想空間を利用する学習は新鮮で面白いと感じましたが、 操作方法の説明が分かりづらかったので慣れるまで時間がかかってしまいました。

図８　仮想空間体験の生徒評価 - 記述式 -

体験を通しての感想としては生徒からは概ね好意的な評価が寄せられた。（図７）「初めての体験だった」「新鮮で面白い」といった回答が寄せられている。（図８）母数が少ないため統計的な評価とは切り離して考える必要があるが、今までに体験したことのない学習方法に対する意欲的な様子が伺える回答を多く得ることができた。これは主体的に学習をする習慣や経験が乏しいため仮想空間内を自分で探索し、課題に取り組むという能動的な活動が学習意欲を喚起したことによる結果と考えられる。Ｌネットと異なり、QRコードを読み取るだけで学習が始められ自分の知りたい内容だけをピンポイントで学習できる手軽さは様々な教科の学びなおしにも応用が利くため、不登校経験の生徒や学習障害をもつ生徒に対しての一つのアプローチとしても期待できる。

テスト問題を正答に直すという根本的な課題についても仮想空間を利用した生徒の提出状況・内容共に昨年８月の前期試験時の課題提出状況と比較して大幅な改善が見られるという結果になっている。レポート課題と変わ

らない内容が大半であり、学習方法を変えただけであるにもかかわらず「楽しい」「面白い」といった意見が出ていることは通信制課程の生徒に合った学び方であるためと考えられるがこのような好意的な評価が他教科でも得られるのか、今後は他教科の先生とも協力しながら仮想空間での学習について研究を深めたい。

仮想空間での学習を行って

今回このようなメタバース空間の利用を通して得られた知見について以下にまとめると、作成する空間によって学びなおしを含む基礎（前提知識となる）部分の予習復習の提供が可能となる点と仮想空間にアクセスしただけでは学習にならず、仮想空間内で主体的な学習を要求する点が最も優れているポイントと考えている。馴染みのある端末（自分のスマートフォン）で遊びの延長として学習に入り込めることも学習に対する敷居を下げる効果が見込めるだろう。

従来の個別指導では１対１かそれに近い形での対応であったが、学びなおしや前提知識の確認のような内容に時間が割かれていたものを仮想空間内での自習を前提とすることができれば個別指導の内容に大幅な深化が図れると期待を寄せている。同様の箇所に悩みや躓きがある生徒全員に将来にわたって学習機会を提供できるため、作成には手間を要するものの長期的な視点に立てば圧倒的な時間削減と効率化を図ることができることはメタバース空間での学習環境整備を進めるインセンティブとして成立しうる魅力があると感じている。メタバース空間と従来のスクーリングの比較について意見を求めたところ図９のような評価となった。

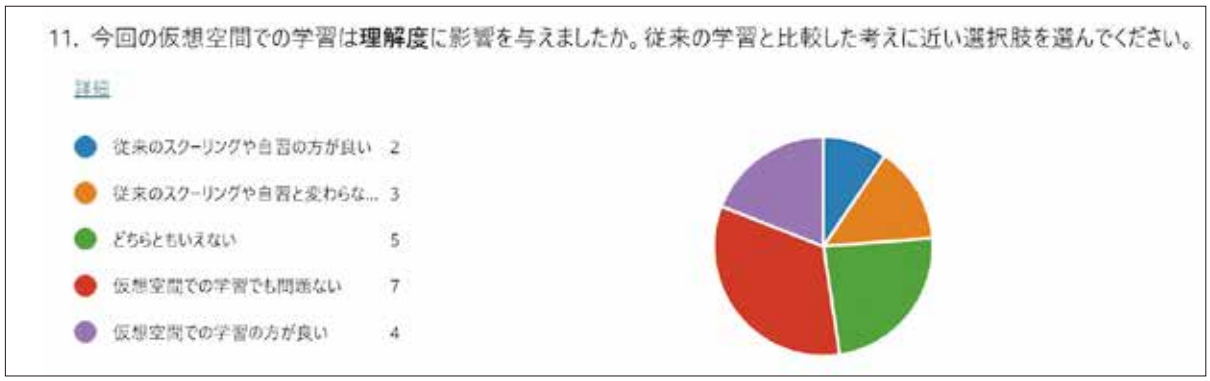


図９　従来型学習との比較評価

従来のスクーリングと変わらない、従来の方が良いとする回答が５名、どちらともいえないが５名、仮想空間でも問題ない、仮想空間の方が良いとする回答が11名であった。過半数は仮想空間での学習に好意的な評価をしているが、どちらともいえないとなっている25％に対してユーザビリティの改善やコンテンツの充実を図ることで好意的な評価への転換を図りたい。

仮想空間を学習に用いた結果については上記の通り想像以上の好感触であったが、課題が全くないわけではない。最後に試行を通して感じた課題や問題点について共有して筆を置く。

まずは３Ｄオブジェクトなどのアップロードコンテンツに関してである。有効期限や転用までを考えるとHubsに依存したままでの運用については再利用のしづらさが気になる点である。他教科含め仮想空間での学習を提供していく中では既存のコンテンツを有効活用することが必要になるが、Hubsに依存したアップロード体制ではそれを妨げる障壁となる懸念があるため設計段階で３Ｄオブジェクトなどのコンテンツ管理について運用体制を確立させる必要があると感じた。

また、今回の試行ではアクセシビリティを優先したためユーザー登録や認証を一切必要としないDOORを用いているが、裏を返せばURLを知っていれば誰でもアクセスが可能な空間でもある。生徒しか知り得ないという性善説を前提とした形であるが、フールプルーフの概念を捨て去ったシステム運用では早晩破綻することは確定的に明らかであるため、プラットフォームの選定を含め安全性が担保された空間をどこに、どのように構築するのかは最初期に定義する必要があるだろう。ただし簡便なアクセス性と堅牢性は基本的にバーターであるため、基本的にはどこで妥協するのかを精査することとなる。仮想空間内での挙動に対する制約についても同様に管理しすぎても管理を怠っても体験を損ねるため注意が必要である。

今回の試行は通信制課程における追試課題という限定的なケースではあるが仮想空間を用いた学習に対して概ね好意的な反応が得られたと評価している。今後はより主体的に学習に取り組めるようにレポート課題とのすり合わせや前提知識の学び直しなど包括的に学べる空間デザインが目標となる。とりわけ数学、英語では体系的な学習が必要であるにも関わらず小中学校段階での知識が身に付いていない生徒が多く在籍している現状においては仮想空間が画期的なアプローチとなる手応えを感じている。将来的にはキャスティング機能も備えているため

仮想空間内でオンライン授業を行うといったことも視野に入れつつ、仮想空間内で取り組める内容の拡充を図りたい。

コロナ禍の中で進展したGIGAスクール構想によって全日制課程におけるデジタル化は進展を見たが通信制課程においてはLネットをはじめとした既存の取り組みがコロナへの対応に合致していたため全日制と比較してデジタル化が意識しづらい状況である。しかしながら拙案以外にも各ILCにおいては様々なICTを活用した取り組みがなされているところであり、今回このような対外的な活動報告の機会を頂けましたこと、感謝申し上げます。本稿が通信制課程のICT事例を知っていただく有意義な情報提供になるとともに、仮想空間の活用を考えている皆様にとっての一助となれば幸いです。

謝辞として、研修・発表の機会を提供くださりました加藤雄彦理事長・校長先生、メタバース・仮想空間の利活用を推進されている加藤聖一先生、ILC青森の諸先生方に格別の御礼を申し上げます。

ご清覧ありがとうございました。

Ⅱ　令和４年度　研修報告

外国語コース 第２学年 ハワイ研修報告

外国語コース　　武田由紀子

１．はじめに

今年度の外国語コース２年生のハワイホームステイ研修は、２班に分かれて実施されました。コロナ禍の中で３年ぶりの実施となりました。本年度の開催も心配されましたが、無事に行われました。

流れとして、① 事前研修（国際センターの先生方によるガイダンス、事前学習としてハワイについてのレポート作成）、② 研修(教室での講義。ハワイについて、心理について。外出先での研修。プレゼンの準備とその発表)③ 帰国後のレポート提出となりました。

生徒たちは真剣に取り組み、充実した研修となりました。

私は第１班の引率を致しました。その研修についてご報告申し上げます。尚、後半では第２班の引率をしたルイ・ウイングラム先生より英語でご報告させていただきます。

２．研修期間と参加人数及び引率教員

① 第 1 班：令和４年10月29日（土）～令和４年11月10日（木）11泊13日

参加人数：13人（特別進学コース３名、外国語コース10名）

引率教員：武田　由紀子

② 第 2 班：令和５年 1 月14日（土）～令和５年 1 月26日（木）11泊13日

参加人数：10人（外国語コース10名）

引率教員：ルイ・ウイングラム

３．事前研修

研修の目的や意義を理解させるために事前に研修を数回行いました。国際センターの小畑先生、ブライアン先生、引率教員により行われました。ホームステイでの注意事項、ハワイでの安全な過ごし方や書類の書き方や持ち物について（小畑先生)、パワーポイントを用いながらクイズ形式も交えてハワイの文化（言葉、食事、観光地、現地での過ごし方）の説明（ブライアン先生）がありました。

事前学習として、ハワイの① 歴史（パールハーバー）②歴史（プランテーション、移民など。各自自由。）③自然（ダイヤモンドヘッドなど）④ 文化…の中で、①を必須として、あと残り１つを②～④から、興味のあるものを選んでパワーポイントのスライド３枚くらいにまとめてもらいました。

４．報告日誌

① 10月29日（土）日本時間

いよいよ出発の日です。13名の生徒と無事に出発することができました。天候も良く、生徒たちも待ちきれない様子でした。グローリーホール前で生徒代表に挨拶をしてもらい、石山教頭先生はじめとした先生方や保護者の方に見送られ、11：00に無事出発致しました。成田着後、19：55発のハワイアン航空で空路ホノルルへと向かいました。

② 10月30日（日）ハワイ時間

無事現地時間８：30にホノルルダニエル・K・イノウエ空港に無事到着致しました。Hawaii Rainbow Academy のEmma先生とTricia先生と合流し、生徒たちは各ホームステイ先に向かいました。２～３人のグループで１家族のホストファミリー宅に滞在します。まず体の疲れをとり、ホームステイ先とのルール等やバスの乗り方をこの週末で確認しました。各々ホストファミリーと交流を深めたようです。

学校にて。出発直前の様子。

③ 10月31日（月）

Hawaii Rainbow Academy での授業がスタートしました。

学校の窓から学校の名前でもある虹が出ているのが見え、幸先いいと感じました。９：00からのホームルームで、最終日のプレゼンについての説明（題材はハワイについて。スライドを数枚作成する。原稿は見てもいいのですが、勿論英語でプレゼンをします）をEmma先生から受けました。

１時間目はTricia先生とIce Breakで、自己紹介をしました。緊張していた生徒達も少しずつ気持ちがほぐれていった様子でした。２時間目はEarl Okawa 先生より、Five Attributes　成功するためにはどのようなことが必要かのレクチャーを賜りました。３時間目はKinohi先生より、Learning Hawaiian ＆ Hawaiian Pidgin ということで、ハワイの言葉や文化、そして午後に行く海水浴の説明をいただきました。

近くのアラモアナショッピングセンターで昼食をとり、13：30から１時間ほどAla Moana Beach で海水浴を楽しみました。ハワイの海は憧れだと思います。そこで波とたわむれる生徒たち。本当に楽しそうで生き生きとしていました。

学校に戻り、SHRのあと、15：20ごろに全員帰宅しました。

Emma 先生に「みんないい子たちですね」とお言葉をいただき嬉しく思います。

この日はハロウィンで、ホストファミリーとパーティーをしたり、近所にお菓子をもらいに行った生徒もいました。

④ 11月１日（火）

午前中は３時間、Kinohi先生より午後のアクティビティの説明やダイヤモンドヘッドの説明、大川先生からは「脳の潜在意識」についてレクチャーを受けました。

午後はバスで10分くらいのところにあるダウンタウンを２グループに分かれてビンゴゲームをしながら散策しました。市場のような商店が並び、日本ではあまり味わえないようなココナツジュースを試してみたり、勧められたお菓子を買って分け合ったり、珍しい展示品を眺めていました。イオラニ宮殿（外観のみ）やカメハメハ大王の像を見学しました。学校に戻ってから明日の遠足や最終日のプレゼンの発表で着用するTシャツを渡されて終了致しました。

⑤ 11月２日（水）

本日は朝よりまずEmma先生とバスで20分かけて、ダイヤモンドヘッドに向かいました。標高232メートルの火山です。バス停から入口まで少し歩き、そこからKinohi先生とゆっくり25分くらいかけて頂上に向かいました。途中にも展望できる場所や真っ暗なトンネルがあり、やっとたどりついた展望台からの海やハワイの町の眺めが素晴らしかったです。ビジターセンターで生徒は各々お土産を購入しました。生徒達がけがもなくハイキングを終えることができまして安心しました。

学校に戻り昼食後、大川先生の授業（日本とアメリカについて）を受けました。帰りのSHRはEmma先生より明日のパールハーバーへの行き方の説明がありました。

Rainbow Academy での教室にて

イオラニ宮殿前にて

ダイヤモンドヘッド入口にて

⑥ 11月３日（木）

本日は終日パールハーバーでの研修となりました。いつもより早い集合のあと、現地で９：30よりツアーを開始しました。パールハーバービジターセンターのミュージアムでガイドさんの解説、ボートに乗りアリゾナ記念館見学、またビジターセンターに戻り、真珠湾攻撃についての映画鑑賞をしました。シャトルバスで戦艦ミズーリ号前へ。昼食後にまた別のガイドさんよりミズーリ号の説明を受けました。調印式の模様。生徒は神妙な様子で真剣に聞き、感嘆の声を上げる場面もありました。戦艦の中も見て回りました。

⑦ 11月４日（金）

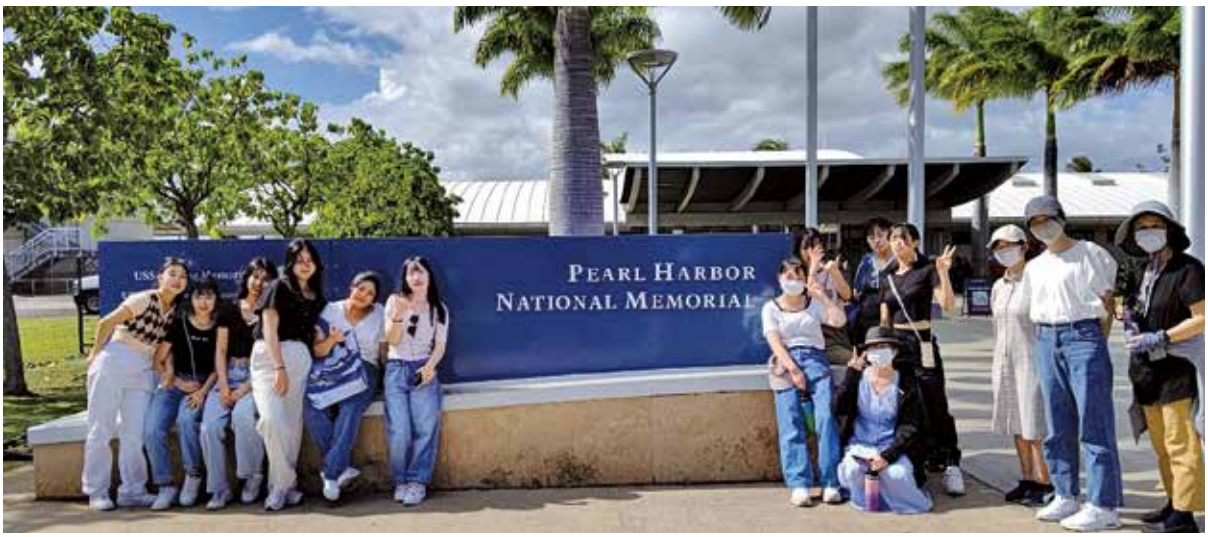
１時間目は大川先生の講義でした。Integrity（高潔）という言葉を用いながら、クリティカル・シンキングの講義です。生徒には難しいかと思いますが、理解しようと努力していると思います。

バスで移動して、10：30より、Japanese Culture Center へ行きました。そこではまず映画鑑賞をしました（戦中戦後の日系人の苦悩などが描かれています。我々が使用する空港に名称が用いられているダニエル・K・イノウエ氏のインタビューもありました）。映画鑑賞後、展示を見学しました。日系移民の昔の暮らしぶりなどが再現されています。

その後レストランで昼食をとり、学校に戻りました。

午後は、13：30過ぎよりKinohi先生の講義を２時間です。Japanese Culture Centerや、パールハーバー、ダイヤモンドヘッド、文化などの振り返りです。

今週の行程が終了いたしました。



パールハーバー入口にて

戦艦ミズーリ号

戦艦ミズリー号にてガイドさんの説明を聞く

Japanese Culure Center 入口にて

⑧ 11月５日（土）

⑨ 11月６日（日）　週末で、各自ホストファミリーと過ごしました。

⑩ 11月７日（月）

朝のSHRのあとに、本校の卒業生熊谷光夏（あきか）さん（2020年度の卒業生）にこちらに来ていただき、生徒たちに向けてお話をしてくださいました。現在カナダにて交換留学している生徒のお姉さんです。こちらに滞在していてホームステイ先が比較的学校より近いそうです。

熊谷さんは Kapiolani Community College で、ハワイアンスタディーズ（ハワイについて）、フラダンス、演劇、英語等の勉強をしています。こちらでの生活やカレッジでの勉強の様子、こちらに来る前に日本の語学学校に１年通っていたそうですがそのことについてお話ししてくださいました。生徒も積極的に、どれくらいの英語力が必要か、入学試験の内容、日本とハワイでの生活の違い、ホームステイをしているのかなどを質問していました。約20分くらいの貴重な時間でした。生徒達も生の先輩の声を聴く機会ができて良かったと思います。

10：10 からは大川先生の講義「成功にむけて」を聴きました。

11：10からはKinohi先生の講義でした。まず週末に何をしたか尋ねられました。そして、先週の思い出を絵に描きさらに英語でつづり、それを皆で発表しあいました。

先生方の講義も今日でおしまいです。大川先生の授業は、抽象的な概念も相まって高校生には難しい内容だったと思いますが、生徒は努力して自身に置き換えて理解しようとしていたと思います。Kinohi先生の授業はゲーム感覚も取り入れ、生徒達にもわかりやすく尚且つ取り組みやすい内容だったのではないかと思います。

午後は、UH Manoa（ハワイ大学マノア校）へ行きました。３グループに分かれ、そこの学生さんのガイドでキャンパス構内をめぐりました。構内のポイント地点に到着したら、簡単なタスク（○○のポーズをとるなど）をしました。私が同行したグループの学生のCortneyさんが生徒にとても積極的に話しかけてくれ、話がはずみました。

学校に戻った後明日のプレゼンの準備をし、15：00頃終了致しました。

いよいよ卒業式を明日に控えました。生徒がこの研修を通して学んだことの発表を行います。生徒たちの成長を感じられるのではないかと楽しみにしておりました。

熊谷さんをお招きして

大川先生の授業

Kinohi 先生の授業

ハワイ大学マノア校

⑪ 11月８日（火）

最終登校日です。最後まで全員元気に登校してくれました。初日と同様、学校の窓から虹が出ているのが見えました。最初から最後まで見守っていてくれたと思いました。

まず学校から15分くらい歩いて、Ko'olani コンドミニアムにあるシアターに入りました。生徒たちは直前まで一生懸命原稿を読む練習やスライドの確認をしていました。ホストファミリーの方、昨日の熊谷さんたちも駆け付けてくださいました。

いよいよ10：45に卒業式開始です。まず、10分ほど先生方が撮ってくださった写真や動画のスライドショーがありました。楽しい思い出のスライドに生徒たちは歓声や笑い声をあげていました。

そしていよいよ発表です。

各自の発表のテーマですが、以下の通りです。

「PEARL　HARBOR」「Hawaii　history」「Hawaiian　birds」
「Difference　between　Hawaii　and　Japan」「FOOD　&　OCEAN」「Hawaii　Ocean」
「Honu（カメのことです）」「Hawaii　ocean　&　Food」
「About　the character of　the　people　of　Hawaii」「Hawaii's　culture」
「Japanese in Hawaii」「OHANA（家族など）」「CORAL　REEFS」 です。

英語での発表で、とても素晴らしいプレゼンでした。

12：00頃から大川先生より卒業証書、Kinohi先生から一人一人レイ（花輪）をいただきました。そして、先生方から素晴らしいプレゼンだったとお褒めの言葉を頂きました。写真撮影や、ピザやカップケーキでのパーティを行いました。

これにてレインボーアカデミーでの日程が無事終了致しました。現地の先生方やホストファミリーの方、たくさんのハワイの方々、そして日本でも理事長先生をはじめとした諸先生方やご家族のお支えや励ましをいただき、感謝の気持ちを新たにしました。

明日はいよいよハワイを出発です。あっという間に過ぎてしまい信じられない思いです。日本、自宅に戻るまで気が抜けませんが、全員で元気に無事に帰国したいと願っておりました。

Rainbow Academy にて

卒業式

⑫ 11月９日（水）（ハワイ時間）

いよいよ帰国の日となりました。たくさんの思い出を胸に空港へ各自ホストファミリー先よりダニエルKイノウエ国際空港へ向かい、11：45発のハワイアン航空で帰国の途につきました。

⑬ 11月10日（木）（日本時間）

無事に全員帰国することができました。成田に到着後手続きをすませて出発し、仙台駅東口に21：40頃到着。その後迎えにきてくださった保護者に引き渡し、22：00過ぎには全員帰宅しました。

理事長先生のご指導のもと、諸先生方や保護者の方、様々な皆様のお力も頂戴し、無事ハワイ研修を終了することができました。生徒達も本当に努力し、実りのある素晴らしい研修になったと思います。感謝の念でいっぱいでした。

14日に全員PCR検査を実施し、陰性の確認がとれました。登校や出勤をお認めいただきました。

５．研修終了後の課題

事前レポート（既に出してもらっていたパワーポイント）と事後レポートをまとめて、研修成果としました。Wordなどで800字くらい、そして写真や画像などを２～３枚添付しハワイ研修の成果や思い出をまとめてもらいました。

６．最後に

はじめでも触れましたが、コロナ禍の中約３年ぶりに海外研修が再開し、おかげさまで無事ハワイ研修を終えることができました。大変貴重な機会をいただきました。ひとえに理事長加藤雄彦校長先生のご配慮に心より厚く御礼申し上げます。

個人的にも海外はおろか国内の旅行や出張もしばらくないという状況で、突然海外に放り込まれる感覚でした。果たして無事生徒を最後まできちんとお預かりして無事帰国ができるのか、引率が決定してから最後の最後まで気が抜けない日々を過ごしました。

しかしそのような引率教員を尻目に、生徒たちは実にのびのびと、時には笑顔を交えてハワイの空気を満喫しつつ、しかし真剣に研修に取り組みました。教室では見られない姿、そして研修を通しての成長を感じられたと思います。

ハワイは観光地のイメージがどうしても強くなりますが、深く勉強していくと複雑なものが見えてきます。今回行きましたパールハーバーや文化センターでは率直に申し上げて心が重くなり、そこから離れたい気持ちがこみ上げてきたのも事実です。しかし、そこを乗り越えて少しでも日米の在り方について理解を深めなければならないのだと痛感致しました。

今でも「本当にハワイに行ってきたのか信じられない。幻みたい。」という気持ちです。楽しい思い出と緊張する場面と様々なものが交錯しています。

諸先生方へもこの場をお借りしまして、厚く御礼を申し上げます。

理事長先生をはじめといたしまして、今後ともよろしくご指導お願い申し上げます。

まことにありがとうございました。（了）

After-report: FLC Hawaii English Camp, Group 2 (January 14th ~ 26th)
Participated students: 10 year-2 students from Foreign Language Course
Leading teacher/guardian: Wing Lam (Terri) Lui (FLC teacher)

This year, the Foreign Language Course brought back the Hawaii English Camp for students to have an opportunity to experience living with a local host family in a foreign country while learning and using English. Participated students were enrolled in a 7-day English camp that is offered by the school's partner school, Hawaii Rainbow Academy, an I-Lion Hawaii School, and stayed in their assigned host families in groups of 2 to 3 students.

During the 7-day English camp, we were welcomed by the local teachers with an introduction to Hawaiian cultures and safeties when going to beaches, as it is a part of their lifestyles to do so regularly. We also visited a local private girl's high school (Sacred Hearts Academy) (figure 1) for students to get to experience as a local student, and having cultural exchange with local students in Hawaii. Some students were surprised on facilities such as the dance studio for learning ballet and hula dance, band room for learning marching, pottery room for visual art classes, and a hundred-year-old chapel within the school property for daily praying and weddings for graduates in the future, as these are all rarely found in most Japanese high schools.

The English camp had also given opportunities for students to explore Waikiki in various ways. One of the excursions that was planned by the school was the visit to the Pearl Harbor Memorial. (figure 2) During the tour with an on-site Japanese guide, the students were able to board on the USS Battleship Missouri to learn about how the World War II ended and to see how life was a marine on the ship, and prayed at the USS Arizona Memorial. Another way to explore the country was the student-centered, self-planned excursions. (figure 3) Before they leave for the camp, they had a chance to research about Hawaii and looked for places to visit during their free time as pairs or in their groups of 3. Some students went to the Saturday morning market near the Diamond Head, and some were interested in the local history and fine arts and went to the Honolulu Museum of Art (HoMA) and Iolani Palace.

All the activities and explorations that students had done during the stay in Hawaii was wrapped up as individual presentations, showing their knowledges gained with the I-Lion Hawaii School and also as a member of their host families. These were all unique on its way as they could only be done by students themselves, as they are mostly based on their own experiences. Although this English camp was a short one, this is one great opportunity for students to be able to experience living as a local student in a foreign country in a controlled and safe environment. (figure 4)

(figure 1 : Sacred Hearts Academy)

(figure 2 : USS Battleship Missori)

(figure 3 : Diamond Head)

(figure 4 : Graduation day)

情報科学コース　沖縄研修旅行報告

情報科学コース第３学年　　武田　若葉

期　　間　：　令和４年４月18日（月）～21日（木）　３泊４日

場　　所　：　沖縄県（那覇市～名護市）

参加生徒　：　90名（男子70名／女子20名）

引 率 者　：　千葉　陽子　　白岩　幸浩　　佐々木りせ　　布施　晃伸　　渡邊　正敏　　武田　若葉

１．はじめに

令和４年度情報科学コース沖縄研修旅行は、３年ぶりに実施された。本研修旅行に参加した第３学年は、新型コロナウイルスの影響を多大に受けてきた学年である。入学直後からオンラインで授業が進められ、学年行事もほとんど中止かオンライン実施となっていた。この沖縄研修旅行も一時期実施が危ぶまれたが、結果として予定通り全行程を行うことができた。

以下に本年度の沖縄研修旅行について報告する。

２．研修目的

・沖縄の風土と歴史に親しみ、文化・自然・産業に理解を深める。

・研修を通じて豊かな感性と情操を養い、見識を広げる。

・集団行動や様々な交流を通じて、協調性を養う。

・体調はもとより、貴重品の管理や時間配分等、自己管理の能力を養う。

・公衆道徳を守り、社会性を身につける。

３．事前指導

LHRや総合的な探求の時間を利用して以下の事前指導を行った。

１）　健康調査（アレルギー調査を含む）

２）　自主研修の班編成

３）　自主研修の計画

４）　研修の目的・心得・諸注意等の指導

５）　沖縄研修旅行結団式

4．行程

令和４年度沖縄研修旅行行程表

月日	行　　程
１日目 ４月 18 日 （月）	12:20-14:10　17:25-18:00　18:30 仙台空港　＝　那覇空港　＝　ホテルオーシャン那覇国際通り
２日目 ４月 19 日 （火）	8:30　9:20-11:20　11:30-12:30 那覇市　＝　平和祈念公園　＝　優美堂　＝ 13:15-19:00　19:00 ＝　那覇市内：班別自主研修(首里城/国際通り等)　＝　ホテルオーシャン那覇
３日目 ４月 20 日 （水）	8:30　9:20-11:00　11:45-13:00 那覇市　＝　仙台育英学園沖縄高等学校　＝　御菓子御殿恩納店　＝ 14:00-16:30　17:20 ＝　沖縄海洋博記念公園(美ら海水族館等)　＝　ホテルリゾネックス名護
４日目 ４月 21 日 （木）	8:15　9:30-11:00　12:00-14:05　16:00-17:00　18:15 名護市　＝　琉球村　＝　那覇空港　＝　伊丹空港　＝　仙台空港

１日目

研修旅行初日、仙台空港にて出発式を行った。空港へ直接の集合だったが、参加予定生徒が誰も欠けることなく定刻で集合できた。３時間超のフライトを経て那覇市に降り立った生徒たちは、仙台との気候の違いを肌で感じ取り、驚いているようだった。

２日目

平和祈念資料館では、沖縄戦についての講話を聴き、館内見学を行った。生徒らは真剣な表情で話に聴き入っていた。「自分たちの平和が尊いものであることを深く感じた」と話す声が聞かれた。午後は那覇市内で班別自主研修を行った。不慣れなモノレールに緊張したり、想定よりも見学時間が長くなったりする生徒もいたが、総合的に生徒たちは楽しんだようだ。

３日目

３日目は、仙台育英学園沖縄高等学校の新校舎見学から始まった。白壁に赤瓦の屋根という沖縄らしい校舎の風貌は、生徒の印象に強く残ったようだ。また、宮城野校舎のコンピューター室と同等の設備のICT室を見た生徒たちは驚きと感動の声を漏らしていた。「宮城野のｅスポーツ部と沖縄高等学校とで交流をしてみたい」「沖縄にも仙台育英の仲間が増えることが嬉しい」などと興奮気味に話す姿が見られた。その後は、沖縄海洋博記念公園にて美ら海水族館を見て回ったり、ホテルの砂浜でバーベキューを楽しんだり、沖縄の自然に触れる一日となった。

図１　沖縄高等学校にて

図２　美ら海水族館にて

４日目

琉球村での体験は、沖縄の伝統文化に多く触れる機会となった。生徒たちは沖縄の独特な方言や文化に驚きながらも、自分たちが普段話している言葉との共通点や法則を知り、親しみが沸いたようだ。仙台に移動する道中も、教わったばかりの沖縄の方言を取り入れながら研修旅行の思い出話に花を咲かせる様子が見られた。

５．おわりに

沖縄の歴史・文化・風土に触れた今回の研修旅行は、生徒らの見識を広げ考え方を豊かにするために有効であったといえる。特に仙台育英学園沖縄高等学校への来訪は、遠く離れた沖縄の地を自分たちの身近な存在として捉える大きなきっかけとなった。これにより、研修旅行での体験がより地に足のついた出来事として昇華されたようだ。また、時間や公衆道徳を遵守することで、集団としても成長したと考える。本研修旅行の経験は、生徒にとって忘れられない思い出と今後への糧となることだろう。

６．謝辞

本研修旅行を実施するにあたり、加藤雄彦理事長校長先生の多大なるご配慮、ご指導を賜り、心より感謝申し上げます。また、東部トップツアーズの皆様、現地のスタッフの方々、お世話になった諸先生方にも深く御礼申し上げます。

英進進学コース　沖縄研修旅行報告

松井　有生

１．はじめに

新型コロナウイルスが流行してから約３年が経ち、感染拡大が落ち着いてきたこともあり、英進進学コース３学年は沖縄研修旅行を実施致しました。

２．研修日及び参加人数

研修日：男子　令和４年４月２２日（金）～２５日（月）
　　女子　令和４年４月２３日（土）～２６日（火）
旅行先：沖縄（本島）
参加者：Ａ１、Ａ２、Ａ３、Ａ４、Ａ５、Ａ６、Ａ７　計７クラス
　　男子７０名　女子８６名
引率者：男子：藤倉　善将、 阿部　浩二、 五十嵐　春祐、 米林　敬一
　　女子：阿部　広美、 松井　有生、 北村　悦子、 井上　晶子、 村松　昌子

３．研修目的

（１）我が国最南端の県沖縄の歴史と自然に触れ、独特の文化や産業についての理解を深める。

（２）平和講話や平和祈念資料館での研修を通して太平洋戦争（第二次世界大戦）中の悲惨な状況や戦後の本土とは異なる歴史を理解し、平和であることの尊さを感じ、平和を希求することの重要さに思いをはせる。

（３）集団行動を通じて、きまりを守り、生徒同士、または生徒と教師の人間的な交流を深め、協調性を養う。

（４）グループ活動を通じて、互いに助け合い、連帯感を培い、また自分の体調を自分で管理自制できる。

（５）公衆道徳を守り、一人の社会人としての社会性を身につける。

４．旅行行程表

第１日目　（男子：４月２２日（金）・女子：４月２３日（土））
　仙台空港集合　12：30（１回中央噴水広場）
　仙台空港　14：10 ---- ANA1497便 ---- 17：25那覇空港 == 貸し切りバス == 18：20ホテル
　夕食　19：00より
　　男子：「14階　宴会場＜歓会・広福・瑞泉＞」
　　女子：「３階　ジェード」
　宿泊　男子：ホテルサン沖縄　　電話098－866－1111
　　女子：ホテルオーシャン　電話098－863－2288

第２日目　（男子：４月２３日（土）　女子：４月２４日（日））
　朝食　７：00より
　　男子：「14階　宴会場＜歓会・広福・瑞泉＞」
　　女子：「３階　ジェード」
　那覇市内８：30 == 貸し切りバス == ９：20平和祈念資料館・平和の礎《平和講和》
　11：20 == 11：30優美堂（ショッピング・昼食）〈沖縄そばセット〉12：30 === 13：10
　13：10ホテル【出発】那覇市内：班別自主研修〈各自夕食〉18：00～19：00ホテル【集合】
　宿泊　男子：ホテルサン沖縄　　電話098－866－1111
　　女子：ホテルオーシャン　電話098－863－2288

第３日目　（男子：４月２４日（日）　女子：４月２５日（月））

朝食　７：00より

那覇市内８：30 == 🚌 貸し切りバス == ９：30嘉手納漁港（シーカヤック体験・自然学習）

11：30 === 12：00イオンモール沖縄ライカム〈各自昼食〉13：10

13：20仙台育英学園高等学校ILC沖縄14：00==15：20　沖縄海洋博記念公園（美ら海水族館・熱帯ドリームセンター・オキちゃん劇場・熱帯植物園）17：00 === 18：00　ホテル

夕食　18：30より

男子：「ホテルビーチにてBBQ」

女子：「地下１Ｆよりテラスにて BBQ」

宿泊　男子：名護市　ホテルリゾネックス名護　電話0980－53－8021

女子：恩納村　みゆきハマバルリゾート　電話098－967－7722

第４日目　（男子：４月２５日（月）　女子：４月２６日（火））

朝食　７：00より

男子：「別階１階　宴会場」

女子：「１階宴会場　＜わかむん＞」

恩納村８：30 == 🚌 貸し切りバス == ９：30おきなわワールド［玉泉洞・王国村］11：00 ===

12：00那覇空港＜昼食は空港で各自＞14：05 --- ✈ ANA766便 --- 16：00伊丹空港17：00---

ANA737便 --- 18：15仙台空港

５．旅行記録

◎ 第１日目

昼食を各自で済ませ、予定通り12時30分に仙台空港１階中央噴水広場に集合し、14時10分に仙台空港を出発しました。高校生活で初めての大きな行事だったため、生徒たちは大変喜んだ様子でした。離陸した際には歓声が上がり、着陸の際の大きな揺れに驚いていた様子の生徒もいましたが、飛行機から見える景色に感動していました。

沖縄に到着すると、４月にもかかわらず蒸し暑く、宮城県とは全く異なる気候に戸惑っている様子の生徒もいました。その後、貸し切りバスで国際通りに近いホテルに到着しました。夕食では、ホテルの方がディナーショーとして三味線を披露してくださり、大いに盛り上がりしました。長いフライトの疲れもあり、22時に消灯しました。

写真１　仙台空港にて

写真２　夕食の様子①

写真３　夕食の様子②

写真４　夕食の様子③

写真５　夕食の様子④

写真６　夕食の様子⑤

◎ 第２日目

８時30分に貸し切りバスでホテルを出発し、本日最初の見学地である平和祈念資料館に９時20分に到着しました。まず、「平和講和」を聞きました。講和では、実体験や実際の写真を紹介していただきながら、戦争の悲惨さと平和の尊さについてお話しいただきました。教科書では学習していることでも、実体験を聞くことで胸が痛みましたが、改めて平和について考えるきっかけになりました。講和後は、資料館を見学し、平和記念公園を探索しました。海を一望できる公園の中心には「平和の火」があり、さらに「平和の礎」がありました。現在の綺麗な海がある沖縄からは想像もできない沖縄戦について考え直すことができました。

写真７　平和記念公園

写真８　資料館からの景色

写真９　集合写真

11時30分：優美堂へ移動し、お昼は「沖縄そばとジューシーのセット」をいただきました。その後は、各自ショッピングを楽しんでいました。

13時10分：ホテルに戻り、その後自主研修に出かけました。出発してまもなく天気が崩れ、大雨に見舞われましたが、１時間ほどであっという間に晴天にかわり、天気の洗礼も受けた自主研修となりました。自主研修では、国際通りをはじめとして、沖縄の観光地を訪れ、海ぶどうやブルーシールアイスなどを食べ、ちんすこうや紅芋タルトなどお土産を購入する等、自主研修を楽しんでいました。夕食は、沖縄のステーキやハンバーガーを食べ、19時に自主研修を終え、22時に就寝しました。

写真 10　優美堂での昼食

写真 11　優美堂でブルーシールアイス

写真 12　自主研修の様子①

写真 13　自主研修の様子②

写真 14　ステーキ 88

写真 15　国際通り

◎ 施設紹介 ① ◎

《 平和祈念資料館 》

― 設立理念 ―

1945年３月末、史上まれにみる激烈な戦火がこの島々に襲ってきました。90日におよぶ鉄の暴風は、島々の山容を変え、文化遺産のほとんどを破壊し、20数万の尊い人命を奪い去りました。沖縄戦は日本に於ける唯一の県民を総動員した地上戦であり、アジア・太平洋戦争で最大規模の戦闘でありました。

沖縄戦の何よりの特徴は、軍人よりも一般住民の戦死者がはるかに上まわっていることにあり、その数は10数万におよびました。ある者は砲弾で吹き飛ばされ、ある者は追い詰められて自ら命を絶たされ、ある者は飢えとマラリアで倒れ、また、敗走する自国軍隊の犠牲にされる者もありました。私たち沖縄県民は、想像を絶する極限状態の中で戦争の不条理と残酷さを身をもって体験しました。

この戦争の体験こそ、とりもなおさず戦後沖縄の人々が、米国の軍事支配の重圧に抗しつつ、つちかってきた沖縄のこころの原点であります。

“沖縄のこころ”とは、人間の尊厳を何よりも重く見て、戦争につながる一切の行為を否定し、平和を求め、人間性の発露である文化をこよなく愛する心であります。

私たちは、戦争の犠牲になった多くの霊を弔い、沖縄戦の歴史的教訓を正しく次代に伝え、全世界の人びとに私たちのこころを訴え、もって恒久平和の樹立に寄与するため、ここに県民個々の戦争体験を結集して、沖縄県平和祈念資料館を設立いたします。

《 平和の礎とは 》

「平和の礎」は、太平洋戦争・沖縄戦終結50周年記念事業の一環として、平成７（1995）年に建設されました。「平和の礎」と書いて「へいわのいしじ」と読みます。この名前は、建物の基礎の「礎（いしずえ）」を、沖縄の方言で「礎（いしじ）」ということに由来しており、ゆるぎない平和への想いを込めて名付けられました。

《 平和の火 》

平和の広場は、断崖絶壁から海岸線、波打ち際を眺望できる位置に設置されています。広場の中央には「平和の火」が灯されています。この「平和の火」は、沖縄戦最初の上陸地である座間味村阿嘉島において採取した火と被爆地広島市の「平和の灯」及び長崎市の「誓いの火」から分けていただいた火を合火し、1991年から灯し続けた火を、1995年６月23日の「慰霊の日」にここに移し、灯したものです。

◎ 第３日目

８時３０分：貸し切りバスで、嘉手納漁港に向かい、シーカヤック体験とマングローブの自然学習を行いました。シーカヤックでは２人で１つのカヤックに乗り込み、沖縄比謝川を探索しました。２人でタイミングを合わせてパドルを操作しないと、カヤックのバランスを取ることが難しく、最初は苦戦している生徒が多くいました。しかし、徐々に慣れてくるとスピードも速くなり、晴天のなかでのカヤック体験を楽しんでいました。また、沖縄の気候ならではの「マングローブ」も見ることができ、充実した自然学習となりました。

１２時００分：イオンモールライカムに到着しました。イオンモールの入り口にはシーサーがおり、中に入ると大きな水槽がありました。昼食は「タコライス」が大人気でした。

１３時２０分：仙台育英学園高等学校ILC沖縄の見学を行いました。真新しい校舎に感動していましたが、とくに１階のICT教室の充実した設備に生徒たちは驚いていました。沖縄校舎を見学できる機会はなかなかないため、生徒たちにとっても有意義な時間となりました。

写真 16　カヤック①

写真 17　カヤック②

写真 18　カヤック③

写真 19　カヤック④

写真 20　カヤック⑤

写真 21　カヤック⑥

１５時２０分：沖縄海洋記念公園を見学しました。その中でも生徒たちは「沖縄美ら海水族館」の見学を楽しみにしており、大水槽の「ジンベエザメ」を見て感動していました。「オキちゃん劇場」は、改修工事のため通常の施設ではありませんでしたが、ミナミバンドウイルカ、オキゴンドウたちのダイナミックなハイジャンプ、ユーモラスなダンスやコーラスなどを存分に楽しみました。また、「エメラルドビーチ」では、絶景をバックに写真を撮影して楽しんでいました。

１８時００分：ホテルに到着し、夕食はBBQを堪能しました。男子生徒は、自分たちでアレンジ料理を作り、腕前を披露していました。友人と一緒のBBQは、いつもの夕食よりもおいしく楽しい時間となりました。

写真 22　沖縄海洋記念公園

写真 23　美ら海水族館

写真 24　ジンベエザメ

写真 25　オキちゃんショー

写真 26　イルカの餌やり

写真 27　エメラルドビーチ

◎ 施設紹介 ② ◎

《 マングローブ 》

「マングローブ」という名前がついた植物があるわけではありません。熱帯や亜熱帯地域の河口に、満潮になると海水が満ちてきます。その海水が満ちた場所に生えている植物をまとめてマングローブと呼びます。マングローブには様々な生物が生息しています。マングローブ林は、水が引くとカニやハゼの仲間など多くの生物が出現します。また色とりどりの植物が群生し、水鳥たちの憩いの場ともなっています。季節にもよりますが夜には、ホタルが出現することもあります。

《 美ら海水族館 》

沖縄美ら海水族館は、自然豊かな沖縄の海をそのまま展示するコンセプトのもと、「沖縄の海との出会い」をテーマに南西諸島・黒潮の海に生きる多種多様な水圏の生き物達との出会いの場を創出します。また、時代のニーズを的確に捕らえ対応しながら、国民的及び国際的観光・リゾート地形成の重要な拠点として、沖縄の魅力的な自然を象徴する「海」をテーマとした集客性のある施設、特色を生かした質の高い水族館を目指します。

《エメラルドビーチ》

エメラルドビーチは沖縄でもめずらしい礁湖（ラグーン）内にあるビーチで、水質は“AA（もっとも良い）”と認められ、平成13年に「水浴場八十八選」、平成18年には「快水浴場百選」に認定されています。エメラルドビーチの砂浜は安全性や快適性、自然保護に配慮して維持管理に努めています。

◎ 第４日目

８時３０分：ホテルを出発し、９時30分におきなわワールドに到着しました。おきなわワールドでは、まず玉泉洞を探検しました。地底探検を終え、地上に出ると熱帯フルーツ園が広がっていました。そこでは、熱帯フルーツの見学だけではなく、冷やしパインやココナッツジュースなどを堪能しました。その後、琉球王国城下町の見学やエイサーショー、ショッピングを楽しみ、研修旅行最後の見学を終えました。

１２時００分：那覇空港到着に到着し、空港で昼食をとり、お土産を購入しました。14時５分に沖縄を経ち、伊丹空港で乗り換え、18時15分に仙台空港到着し、解散しまた。

写真 28　集合写真①

写真 29　集合写真②

写真 30　集合写真③

６．研修成果発表

まとめとして、グループごとに沖縄研修旅行の新聞をつくり、育英祭で展示しました。

７．最後に

今回の「英進進学コース第３学年沖縄研修旅行」において、実施のご許可をくださり生徒たちに貴重な研修の機会を与えてくださった加藤雄彦理事長校長先生に心より感謝申し上げます。また、東武トップツアーズの鷹島さんをはじめ、東武トップツアーズの皆さま、沖縄のホテル・バス会社・各施設の方々、沖縄研修旅行に際してお世話になった皆様に深く感謝申し上げます。

高校入学時より新型コロナウイルスの感染が拡大し、学校行事がなかなか実施できない中、沖縄研修旅行が実施できたことで、生徒たちにとってかけがえのない時間を過ごすことができました。研修旅行では、沖縄の歴史や文化を学ぶことはもちろん、研修旅行でしか味わえない級友との時間を過ごすことができ、生徒たちは大変喜んでおりました。この経験は、生徒たちのこれからの人生にも有意義な時間となったと思います。このような素晴らしい機会をいただきありがとうございました。

沖縄研修報告

フレックスコース　　河原　愛利沙

期　　間　令和４年４月17日（日）～４月20日（水）
研修場所　沖縄県
参加生徒　フレックス・技能開発コース　３年生女子　65名（Ｆ：27名、Ｋ：38名）
引 率 者　宮浦　靖次、 杉田　愛、 河原 愛利沙、 佐藤　佳蓮

１．行程

4月17日（日）〈１日目〉	
12：45	仙台空港　集合
14：10	仙台空港　出発
	↓　（ANA1863便）
17：25	那覇空港　到着
17：50	那覇空港　出発
	↓　（バス移動）
18：20	ホテルサン沖縄　到着
19：30	《夕食はホテルにて》

4月18日（月）〈２日目〉	
7：10	朝食
8：20	ホテルサン沖縄　出発
	↓　（バス移動）
9：20	平和記念公園　到着 【資料館・平和の礎】
	↓　（徒歩）
11：30	ひめゆりの塔 《昼食：タコライス》
12：30	↓　（バス移動）
13：15	ホテルサン沖縄　到着
	［自主研修：夕食は各自］
19：00	ホテルサン沖縄　集合

4月19日（火）〈３日目〉	
7：10	朝食
8：20	ホテルサン沖縄　出発
	↓　（バス移動）
9：20	おきなわ琉球村
11：40	↓　（バス移動）
12：00	御菓子御殿恩納店 《昼食：ソーキそば》
13：00	↓　（バス移動）
14：00	沖縄海洋博記念公園
16：30	↓　（バス移動）
17：00	ホテルリゾネックス名護　到着
18：30	《夕食：バーベキュー》

4月20日（水）〈４日目〉	
6：30	朝食
8：00	ホテルリゾネックス名護　出発
	↓　（バス移動）
9：30	おきなわワールド
11：30	↓　（バス移動）
12：10	那覇空港　到着 《昼食：空港内でお弁当》
14：05	那覇空港　出発
	↓　（ANA766便）
16：00	大阪空港経由
	↓　（ANA737便）
18：15	仙台空港　到着・解散

２．研修の目的

・本県にない自然や他府県の人々の生活や歴史・文化にふれ宮城への認識を一層深める。

・日本で唯一地上戦（戦争）が行われた場所として、平和記念公園やひめゆりの塔を見学し、知識や情報だけでは理解できない平和学習を行い、命の大切さを再認識する。

・公共の場において、団体行動の経験を積むことにより、社会のきまりや公衆道徳・時間のけじめの大切さを再確認する。

・生涯の心に残る良き思い出を作り、同じ時に同じ学び舎で過ごした仲間の絆を深める。

３．事前指導

LHRや総合的な探求の時間を利用し、以下の事前指導を行った。

１）　健康調査（アレルギー調査を含む）
２）　自主研修の班編成
３）　自主研修の計画
４）　事後レポートの作成について
５）　研修の目的・心得・諸注意などの指導
６）　沖縄研修旅行結団式

４．研修内容

《出発前の集合》

《夜の班長会の様子》

第１日目　令和４年４月17日（日）　　天気：晴れ

研修旅行初日、仙台空港にて集合時間になると、出発式が始まった。生徒達の中には、飛行機に乗るのが初めての生徒もいたため、手荷物検査で何人か手間取る生徒もいたが、昼過ぎの出発であったため、遅刻する生徒もおらず、時間通りに搭乗手続きを終えることができた。飛行機離陸時に大きな悲鳴を上げていた生徒もおり、他者への配慮が足りていないと感じた部分もあった。１名の生徒がひどい乗り物酔いのため、体調を崩してしまったが、歩いて移動できる状態ではあったため、ゆっくり移動し、バスに乗車した。バス乗車時には、気分もよくなり、友達とも会話できていた。

バスで移動中も、宮城県とは違う町の風景や歩き行く人たちを見て、かりゆしウェアを着用している人々を見たり、シーサーの置物などを見て、沖縄県に来たことを実感している生徒がたくさんいた。

夕食はホテルで食べた。夕食時にも沖縄名物がいくつかあったが、特にむらさきいも味のアイスに飛びつき食べていた生徒が多く、印象に残っている。夕食後は、班長が集まり、ホテルでの過ごし方や明日の予定の確認や諸注意を行い、部屋に戻した。22時30分に点呼を行い、１日目を終えた。

第２日目　令和４年４月18日（月）　　天気：晴れ

昨日の移動の疲れもあったのか、何人か朝食に遅れてくる生徒がいた。今日から平和学習が始まるため、服装や態度について改めて朝食時に全体に伝えた。また、朝食の時間に遅れてくる生徒もいたため、集団行動の意義を伝えオシャレをする場所ではないため、身なりを整えるように指導した。

平和学習では、平和記念公園、ひめゆりの塔に行き、自分たちと同じ年くらいだった人たちが戦争に巻き込まれ、当時の写真や実物をみることができ、貴重な経験をしたと生徒も感じており、研修旅行に行く前に観た「さとうきび畑の唄」という映画に登場した場所らしきところを展望塔から探すことができたと話す生徒がいたり、もう少し戦争経験者の方のお話を聞きたかったと話す生徒もおり、意欲的に平和学習に取り組む姿が見られた。

この日は午後から自主研修となり、天気も崩れることなく楽しんでいる様子だった。以前より計画を立ててきたこともあり、それぞれの目的を時間内に達成することができ、満足した様子であった。
集合時間である19時までには全員無事にホテルに到着し、大量のお土産を両手に掲げ、疲労感は感じたものの、夕飯に食べたものや買ったお土産の話をたくさん聞き、充実感が伝わってきた。

第３日目　令和４年４月19日（火）　　天気：晴れ

３日目は、それぞれが選んだ体験を行った。脱出ゲームやシーサーの色付け、フォトフレーム作り、宝探しなどを楽しんだ。特に、脱出ゲームや宝探しでは、自分たちの班以外の人とも協力し合いながらクリアをしていく姿が見られた。沖縄の特徴的な家や歴史にも触れることができ、生徒は楽しんでいる様子であった。午後には、沖縄の伝統料理であるソーキそばを食べたり、沖縄海洋博記念公園に行き、イルカショーを見たりして、３日目とは思えないほどの元気さで、充実した一日となったと生徒も話していた。

夜はみんなでバーベキューを行い、協力して食事の準備をする姿が印象的であった。普段はコース間を超えての交流はあまりなかったので、この機会に話すことができて印象が変わったなど、新たな発見ができている生徒がおり、一緒に写真を撮る姿も見られた。

第４日目　令和４年４月20日（水）　　天気：晴れ

沖縄最終日となった今日は、おきなわワールドへ行き、動物やエイサーショーを鑑賞した。力強いエイサーショーを目の前にして、ショーが終わったあとも、印象に残った部分を真似したりして、充分に楽しんでいることが伝わった。空港へ向かうバスの中でも、帰りたくないという声が多くあり、今までコロナウイルス感染症拡大の影響で何も行事がなかった分、このような機会がとても嬉しかったのだと感じた。空港に向かう道中に、バスガイドさんから、手作りの沖縄らしい三味線や折り紙などをもらい、生徒はとても喜んでいた。帰路は、那覇空港出発後、大阪空港を経由し、仙台空港へと向かったが、生徒一人がチケットを紛失するアクシデントはあったものの、全員無事に仙台空港に到着することができ、多くの保護者の方に迎えられ、それぞれ帰路についた。

５．おわりに

３泊４日のフレックス・技能開発コース沖縄研修では、普段の学校生活では味わうことのできない集団行動の大切さ、協調性を養うことができ、日頃では見えない生徒の自主性や行動力を目にすることができ、成長しているのだと感じた。また、沖縄の自然・文化・生活・歴史などに触れることで、自分自身の視野を広げることはもちろん、今ある生活や環境はどれほど恵まれているのかということを実感できたのではないかと考えます。

沖縄研修旅行を実施するにあたり、コロナウイルス感染症拡大の影響もある中、加藤雄彦理事長・校長先生の多大なるご配慮をいただき、心より御礼申し上げます。また、東部トップツアーズの依田さんはじめ、現地バス・ホテル・各施設のスタッフの方々、お世話になった皆様方にも厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

総目録（第1号～37号）

１９８６年3月　第1号

巻　頭　言……加藤　昭

Ⅰ．各種研修会・研修講座に参加して
・全国私立中高全国私学教育研究集会……2
第33回　全国私立中学高等学校
全国私学教育研究集会山口大会参加報告（1）
柏倉　拓
全国私学教育研究集会山口大会参加報告（2）国語部会
－新学習指導要領における文学教育－　青野　宏一

・全国私立中高国際教育研修会……7
第7回全国私立中学高等学校
国際教育研修会に参加して　教諭　宝槻　隆史

・第12回「米国における社会研修講座」……10
第12回アメリカ社会研修講座に参加して
副題日米社会の相違と文化摩擦　佐々木　豊

・第7回「私学の新任若手教員の研修講座」……12
第7回私学の新任・若手教員研修講座に参加して
渡部　進

・「名取平野の文化財」史跡見学会の記録より ……14
渡邊　泰伸

Ⅱ．昭和60年度職員研修会
・授業研究・各科研究会……27
国語科（現代文）学習指導案　遣水　満雄
社会科（日本史）学習指導案　駒板　泰吉
数学科（数学Ⅰ）学習指導案　乾　敬
数学科学習指導案　鈴木　襲治
理科学習指導案　丸山　実信
TEACHING PLAN　By Akiyoshi Ohmi
情報処理科　研修のまとめ
公開授業　教科：ベーシック
担当者：野村コンピューターシステム㈱西村　昌郎
保健体育科柔道学習指導案　佐々木　豊
芸術科研修のまとめ

編　集　後　記

１９８７年3月　第2号

巻　頭　言……加藤　昭

Ⅰ．研究
・宮城県加美郡中新田町熊野堂遺跡調査略報……2
渡邊　泰伸
・コンピュータによる学業成績処理 ……28
瀬戸　信男
佐々木一郎

Ⅱ．各種研修会・研修講座に参加して
・第13回米国における社会研修講座に参加して ……39
沢田　敏明
・英語教師のための夏期セミナー講演会報告 ……42
山田　昇
・第24回全国私立中学高等学校
保健体育科研修会に参加して ……50
阿部　俊英
・第28回全国私立中学高等学校
理科（生物）研修会に参加して……52
今野　良裕
・第1回全国私立中学高等学校
ニューメディア教育研修会に参加して……54
瀬戸　信男

Ⅲ．昭和61年度職員研修会
・授業研究・各科研究会 ……59
国語科研究会報告　遣水　満雄
社会科研究会報告　渡邊　泰伸
数学ＩＣ不等式の表す領域　中川　良雄
代数幾何学習指導案　渡部　進
数学科研究会報告　中川　良雄
理科Ⅰ学習指導案　砂沢　準助
英語科研究会報告　宝槻　隆史
芸術科研究会報告　安倍　一男
情報処理Ⅰ（BASIC）　小林　慶三
佐々木一郎
保健学習指導案　佐々木松治

編　集　後　記

１９８８年3月　第3号

巻　頭　言……加藤　昭

Ⅰ．研究
・仙台市安養寺下窯跡……2
渡邊　泰伸
研究発表
・大学入試に取り扱われたカテナリー・サイクロイド・インボリュート曲線について ……22
鈴木　弘

Ⅱ．各種研修会・研修講座に参加して
・第十四回　米国における社会研修講座（CIAA主催）に参加して ……29
今野　良裕
・アメリカテキサス大学語学研修報告 ……60
柏倉　拓
・第二十五回全国私立中学高等学校
保健・体育科研修会報告 ……71
沢田　敏明

・第二十一回全国私立中学高等学校
生徒指導研修会報告 ……76
佐々木　豊
・第二十三回全国私立中学高等学校
道徳宗教教育研修会報告 ……78
及川千一郎
・第二回全国私立中学高等学校
ニューメディア教育研修会報告 ……81
大場　幸
・第九回国際教育研修会報告 ……86
出井まち子
・ジェラルド・ロビンス　ピアノリサイタル報告
……89
荒井　恵子

Ⅲ．昭和62年度職員研修会
・授業研究・各科研究会 ……91
・短歌教材指導について……高橋　正幸
・社会科研究会報告……柏倉　拓
・数学科（基礎解析）学習指導案……乾　敬
・校内公開授業……中川　良雄
・数学科研究会報告……佐藤　亘
松尾　勝郎
・理科（化学）学習指導案……櫻井　忠良
・理科研究会報告……砂沢　準助
・英語科研究会報告……小野　明夫
・書道Ⅱの学習指導について……安倍　一男
・ワープロ学習指導案……遠藤　卓
大場　幸
・保健体育指導……阿部　由晴

編　集　後　記

１９８９年３月　第４号

巻　頭　言

Ⅰ．研究発表……1
加藤　昭
1．安養寺下窯跡第３次調査 ……2
渡邊　泰伸
2．同一素材の外国語翻訳を試みて……28
波里　光彦

Ⅱ．海外研修 ……45
1．アメリカ夏期語学研修についての報告と所感‥46
坂爪　英夫
2．地球の裏から「オブリガード」……51
宮本　昇

Ⅲ．全国私学研修報告 ……63
1．ニューメディア教育研修会報告 ……64
大場　幸
2．現代社会とこれからの体育……96
丹野　博太

Ⅳ．第36回全国私学教育研究集会新潟大会 ……99
1．特色教育部会報告……100
高山　直光
2．福祉活動を中心として……110
小林　慶三
3．教育課程部会報告……114
庄司　均
4．国語分科会……121
笠岡　庸志
5．英語分科会……134
宝槻　隆史
6．商業部会報告……138
遠藤　卓

Ⅴ．校内公開授業各科研究会……141
・国語科研究会報告
北欧の国語教育と日本……遣水　満雄
・国語研究会報告
ソビエト連邦の教育事情と日本……中津川清風
・社会科研究会報告……小野寺文雄
・数学科研究会報告
校内研究授業［数学Ⅰ］学習指導案‥‥岩渕　定義
校内研究授業［確率・統計］学習指導案
……鈴木　弘
・理科研究会報告……砂沢　準助
・理科授業研究…〝ヒトの生殖と発生〟を行うにあたって
……横澤　秀夫
・英語科研究会報告……宝槻　隆史
谷津　繁勝
小野　明夫
大沼　洋二
・芸術科研究会報告
時代に即した音楽教育……武藤　信子
・保健体育科研究会報告
保健体育「柔道」指導案……沢田　敏明
・情報処理科研究会報告
「進化する紙」……佐々木一郎

Ⅵ．編集後記・奥付……176

１９９０年３月　第５号

巻　頭　言……加藤　昭

Ⅰ．研究
・仙台市安養寺下窯跡　第４次調査概報……1
渡邊　泰伸

Ⅱ．各種研修会・研修講座に参加して
・全国私学教育研究集会講演（教育課程部会）より
……25
小林　慶三
・平成元年度　高等学校学習指導研修会……27
渡部　進
・私学経営研究会教員研修セミナー

第11回私学の新任・若手教員研修講座報告 ····35
若澤　幸弘・及川　隆夫
・第37回全国私学教育研究集会大阪大会
岩渕　定義
〔1〕数学分科会報告 ·····49
〔2〕進路指導部会報 ·····63
・全国私立中学高等学校
第4回ニューメディア研修会に参加して·····74
渡部　　進
・第30回東北地区私学教育研究会に参加して ····86
山田　　昇
・第25回全国私立中学高等学校家庭科研修会 ····90
庄司　　均
・カナダ語学研修について ·····93
佐々木清彦
・英国語学研修報告 ·····102
阿部　　徹・出井まち子
・カー先生の日本体験記 ·····117
波里　光彦

Ⅲ．授業研究・各科研究会
・国語科学習指導案 ·····143
千田　亥彦
・数学科学習指導案 ·····146
渡部　　進
・数学科学習指導案 ·····152
菅井　　了
・数学科研究会報告 ·····157
・理科（化学）学習指導案 ·····161
半澤　　健
・化学実験の一考察 ·····167
半澤　　健
・情報処理科（薄記会計）学習指導案 ·····173
佐々木英明
・保健体育科学習指導案 ·····177
丹野　博太

編　集　後　記

１９９１年3月　第6号

巻　頭　言 ·····加藤　　昭

Ⅰ．国際化教育への模索
・日本の「国際化」に思う ·····1
波里　光彦
・創立85周年記念事業 国際理解のための講演会··17
研　修　課
・全国私立中学高等学校
第12回国際教育研修会に参加して ·····34
佐々木清彦
・夏期イギリス語学研修（女子）·····60
関谷　照夫
・夏期イギリス語学研修（男子）·····73
桜井　忠良
・女子卓球部中国遠征報告 ·····85
若澤　幸弘
・仙台育英学園高等学校創立85周年記念
日本，カナダ国際親善ラグビー遠征記 ·····89
伊藤挺一朗
・第31回東北地区私学教育研修会　英語分科会
「How to give the motivation to the students」
·····104
キャム・カー

Ⅱ．多賀城フォーラム
・「多賀城フォーラム21」行わる ·····121
加藤　雄彦

Ⅲ．研究・研修
・第25回全国高等学校体育学科連絡協議会に参加して
·····137
丹野　博太
・平成2年度　研修課年間計画
情報処理研修報告 ·····144
佐藤　正行
・平成2年度全国私立中学高等学校
第5回ニューメディア教育研修会報告 ·····167
佐藤　正行
・私学経営研修会教員研修セミナー
第12回私学の新任・若手教員研修講座報告····222
佐藤　正行
・第12回私学の新任・若手教員研修講座 ·····227
佐々木英明
・西多賀養護学校を訪問して ·····228
若澤　幸弘
・宮城県生徒指導研修会に参加して ·····230
佐々木英明
・国語科（漢文）公開授業並びに教育研究会····241
寺尾　幸吉
・数学科公開授業並びに教科研究会 ·····248
近藤　精宏
・英語科公開授業並びに英語科教科研究会 ·····255
立谷　　翆
・理科科公開授業並びに教科研究会 ·····260
男澤　文義
・社会科教科研究会 ·····263
阿部　　徹
・保健体育科（保健）公開授業並びに教科研究会··266
沢田　敏明

編　集　後　記 ·····269

１９９２年3月　第7号

巻　頭　言 ·····加藤　　昭

Ⅰ　研究
・仙台市安養寺下窯跡 ·····1
渡邊　泰伸

Ⅱ　多賀城フォーラム
・第２回多賀城フォーラム　……37
加藤　雄彦

Ⅲ　講演「山形の一教師の実践論」……55
山形県生涯学習人材育成機構専務理事　打田　早苗

Ⅳ　研修報告
・平成３年度高等学校教育課程講習会　……75
凌　　時哉
・東北国語教育研究会　……83
佐々木隆男・板橋　敏男
・平成３年度宮城県高等学校教育課程講習会外国語部会
……94
関谷　照夫
・第13回私学の新任・若手教員研修会　……120
佐藤　　弘

Ⅴ　海外遠征報告（平成３年度）
・夏期カナダ語学研修……125
関谷　照夫
・夏期イギリス語学研修（男子）……135
山田　紀英
・夏期イギリス語学研修（女子）……150
砂金　　紀
・オックスフォード紀行……162
高平たつみ
・軟式庭球部台湾遠征……172
佐藤　正行
・女子卓球部スウェーデン遠征……176
大岡多津子
・イタリア知識旅行事前調査……180
小林　慶三・渡部　　進・佐々木順子
武田　美法・加藤　晃孝
・女子卓球部中国（上海市）遠征……191
若澤　幸弘

Ⅵ　研究・研修
・校内研修会実施要……193
・国語科公開授業並びに教科研究会……194
及川千一郎
・数学科公開授業並びに教科研究会……224
佐藤　　孝
・英語科公開授業並びに教科研究会……230
秋山なみ江・出井まち子
・理科科公開授業並びに教科研究会……232
渡辺　重隆
・社会科教育研究会……238
加藤　晃孝

Ⅶ　論文
・国語科短歌鑑賞会
－高校生の読み物として－名歌少考……245
高橋　正幸
・「うたごころ」……256
加藤　武夫

編　集　後　記……259

１９９３年３月　第８号

巻　頭　言……加藤　　昭

Ⅰ　研究
・仙台市安養寺下窯跡（第７次調査概報）……１
渡邊　泰伸

Ⅱ　研修・遠征報告
・第14回私学の新任・若手教員研修講座……47
槙　　統
・全国高等学校選抜卓球大会二連覇を達成して……50
大岡　　厳
・オーストラリア英語に接して　……52
庄子春一郎
・平成４年度夏期イギリス語学研修　……54
渡邊　泰伸
・男子陸上チームのカナダ・バンクーバー遠征……106
二階堂　進

Ⅲ　校内研修会
・平成４年度校内研修会実施要項……109
・国語科教科研究会……110
佐藤　秀一
・数学科公開授業並びに教科研究会……154
加藤　晃孝
・理科科教科研究会……163
八木　　浩
・社会科教科研究会……203
佐藤　林平
・保健体育科公開授業並びに教科研究会……212
槙　　統
・情報処理科公開授業並びに教科研究会……217
佐々木英明

編　集　後　記……223

１９９４年３月　第９号

巻　頭　言……加藤　　昭

Ⅰ．加藤利吉先生生誕111年　学園創立88周年記念事業
・多賀城校舎グロリーホール落成を記念して……１
半沢　　健
・記念講演－大きく変わりつつある世界そして学校のゆくえは……７
ロバート・カークナー
・平成５年度父母教師会総会講演　……26
トミー植松

Ⅱ　研究
・仙台市安養寺下窯跡（第８次調査概報）……37
渡邊　泰伸
・宮城県志田郡松山町下伊場野窯跡調査略報　……58
渡邊　泰伸

Ⅲ　海外研修・遠征報告
・女子バレー部韓国研修旅行……105
佐藤　幸雄
・サッカー部ドイツ遠征……107
佐藤　脩
・中国グランプリ国際大会報告書……123
大岡　巌
・ボーンマス再訪……124
渡邊　泰伸
・平成５年度イギリス語学研修に参加して……180
高谷　功
・平成５年度カナダ研修旅行……195
今野　仁
・クリスマスをアメリカの一家庭で過ごして……206
庄子春一郎

Ⅳ　研修報告
・平成５年度私立学校初任者研修全国研修会（第２回）……209
庄司　和良
・平成５年度私立学校初任者研修全国研修会（第２回）……214
寺内るみ子
・第15回私学の新任・若手教員研修講座　……219
寺内るみ子
・第15回私学の新任・若手教員研修講座を受講しての報告……223
松原潤一郎
・全国私立中学高等学校性教育研修会参加報告……226
柏倉　拓
・平成５年度全国私立中学高等学校生徒指導研修会……230
宝槻　隆史
・私学の特色ある教育課程の実践に向けてⅡ……233
佐々木　豊
・平成５年度全国私立中学高等学校数学科研修会報告……248
加藤　晃孝・鈴木　孝司
・全国私立中学高等学校英語科研修会……252
武田　美法

Ⅴ　校内研修会
・平成５年度校内研修会実施要項……255
・効果的国語指導の在り方……256
及川千一郎・清水　初治
・社会科教育研究会……266
高谷　功・渡邊　泰伸
・数学科研究会記録……271
佐々木順子
・地学学習指導案……276
武田　要吉
・英語科研究会……285
武田　美法
・総合実践業務処理システム実習概要……293
瀬戸　信男
・保健体育科学習指導案……325
庄司　和良
・保健体育科柔道学習指導案……327
松原潤一郎

編　集　後　記……330

１９９５年３月　第１０号

巻　頭　言……加藤　昭

Ⅰ　研究
・仙台市安養寺下窯跡（第９次調査概報）……1
渡邊　泰伸

Ⅱ　海外研修・語学研修
・英国語学研修［ボーンマス］の記録　……31
渡邊　泰伸
・カナダ語学研修旅行を共にして　……93
日下　英夫
・カナダ語学研修報告……105
柏倉　拓
・CBS杯招待遠征報告（韓国(ソウル)雑感）……115
丸山　博史
・韓国CBS杯全国高等学校バレーボール大会に参加して……121
藤屋　秀人
・ニュージーランド語学研修／姉妹校訪問……124
二階堂　勉
・ニュージーランド語学研修……129
小野　裕子
・ハワイ修学旅行下見についての報告と雑感……131
坂爪　英夫
・ラグビー部ニュージーランド遠征についての報告……136
丹野　博太
・ヨーロッパ・橋紀行……145
関根　一郎
・オーストラリアの高校生活－公立キルコイ高校の場合……154
庄子春一郎

Ⅲ　研修報告
・平成６年度私立学校初任者研修北海道東北地区研修会報告……163
引地　由佳
・平成６年度私立学校初任者研修北海道東北地区研修報告……167
中村　千恵

・第35回東北地区私学教育研修会 ……171
今野　仁
・第35回東北地区私学教育研修会参加の報告‥‥180
佐藤　林平
・第35回東北地区私学教育研修会進路指導部会‥199
大場　幸
・第35回東北地区私学教育研修会学習指導部会理科分科会……205
大沼　正行

Ⅳ　校内研修会
・平成6年度校内研修会実施要項 ……209
・「国語科」研究会 ……210
鎌田　敬
・数学科研究会記録……215
佐藤　孝
・英語科研究会……220
砂金　紀
・理科研究会……226
横澤　秀夫
・社会科研究会……235
阿部　徹
・情報処理科研究会……242
佐藤　正行・内海　利男
・保健体育科指導計画……256
中村　光男

1996年3月　第11号

創立90周年特別号
巻　頭　言……加藤　昭

Ⅰ　研究
・「世界史」探訪の旅 ……1
武田　義之
・不登校児への対応を探る……8
半澤　健
・宗教と人生 ……20
小柳　俊夫
・文学教材指導法雑感 ……34
伊藤源太郎
・補助教材として授業中に使用した参考作品集‥‥48
丹野　将範
・生活史に反映する伝承音楽の役割 ……94
鎌田　敬

Ⅱ　海外研修
・カナダ研修旅行……111
太宰　芳郎
・イートン校サマースクールを終えて……121
加藤　晃孝
・ オーストラリアの中学生活
公立モーソン中学の場合 ……125
庄子春一郎

Ⅲ　研修報告
・平成7年度『財政経済セミナー』に参加して
我が国財政の現状と課題……129
小嶋　聡悦
・全国私立中学高等学校国語科研修会研修報告書
……170
引地　由佳
・「性教育研修会」に参加しての報告 ……174
出井まち子

編　集　後　記……177

1997年3月　第12号

巻　頭　言……加藤　雄彦

・授業の活性剤……1
半澤　健
・世界史探訪の旅Ⅱ……6
武田　義之
・修学旅行事前調査報告 ……21
沼田嘉一郎
・韓国スポーツ交流団へ参加して ……26
坂爪　英夫
・韓国修学旅行事前調査に参加して ……53
宝槻　隆史
・Memories of Canada ……59
清水　初次
・学校茶道の果たす役割 ……63
佐藤　宗秀
・茶事の研修 ……69
岡崎　宗豊
・裏千家今日庵を訪ねて ……71
馬淵　宗友
・21世紀にお茶の心をつなごう ……74
木村　宗智
・カナダ研修旅行報告 ……78
山田　昇
・イギリスアップランズカレッジ語学研修事前調査にいって ……82
小嶋　哲朗
・「私学教員のめざすもの」についての一考察‥‥85
下平　孝富
・北海道・東北地区研修会 ……88
富澤　良江
・当世イングランド南西地区環境状況 ……91
内海　利男
・宮城野校舎での「LD学習」の利用の現状について‥94
工藤　敏夫
・『第1回実用英語技能検定』の結果を振り返って‥100
尾形　照子
・異文化体験……102
庄子春一郎
・『ライオンの晴』発行について ……108
山本吉之助

・CS向上めざして教養コースからの提案 ……113
坂爪　英夫
・多賀城セクション生徒寮保護者懇談会概要報告‥126
守　喜美夫・加藤　晃孝
・教育実習（養護教諭）期間中に行った研究について
……137
指導　木村　保子・佐藤　雅美
・KOREA旅行雑感・1996年 ……145
阿部　俊徳
・長春外国語学校との姉妹校締結記念
中国訪問親善交流・研修の記録……152
曾我　道雄
・那須研修の現状について ……166
藤岡　昌之

編　集　後　記……186

１９９８年3月　第１３号

巻　頭　言……加藤　雄彦

・演題「180°変わる進学英語」……1
佐藤　良明
・世界史探訪の旅Ⅲ－チュニジア共和国とカルタゴの
遺跡－ ……10
武田　義之
・雄と雌の話 ……25
半沢　　健
・高校生の喫煙についての一考察 ……52
富澤　良江
・平成８年度教養コースにおける生徒指導の一つの試み
……59
沼田嘉一郎
・平成８年度修学旅行 ……75
瀬戸　信男・小川　久松・渡邊　泰伸
・カナダ日記　1997年夏……84
阿部　俊徳
・アンコール・ワットへの旅 ……94
佐藤　雄三
・CS向上をめざす物理教育の一試案 ……102
高橋　　明
・英国語学研修実施報告……121
千代窪敏光
・平成９年イギリス夏期語学研修（ボーンマス団）
……125
遊佐　隆司
・松島研修センターの概要……133
榊井　庸彦・渡辺　章紀・佐々木英明
千葉　　浩・青木　康博
・オーストラリアのハイスクール……149
庄子春一郎
・ペルシアの風－イラン旅情……158
伊藤源太郎
・授業における吹奏楽の試み……212
牛渡　　純
・はじめてのクロアチア国際交流……218
澤口　　衛・藤屋　秀人
郷古　　武・木村　美知
・国際ゆめ交流博覧会の報告……230
ジェシンタ　ワンジロ　ムタヒ

編　集　後　記

１９９９年3月　第１４号

巻　頭　言……加藤　雄彦

・初任者研修……1
PART Ⅰ　宮城野中学校での中高連携授業研究会に
参加して
日比野曜子　　鈴木　暁子　　佐々木順子
引地　由佳　　下平　孝富　　佐々木順一朗
富澤　良江　　箱島　道泰　　槙　　統
藤屋　秀人　　千葉　　浩　　岡崎　由起
古宮　紀子　　池口真理子　　鈴木　保恵
松原潤一郎　　吉田　　淳　　郷古　　武
望月久美子
PART Ⅱ　三色最中を訪ねて
望月久美子　　下平　孝富　　古宮　紀子
池口真理子　　槙　　統　　鈴木　暁子
松原潤一郎　　佐々木順子　　鈴木　孝司
鈴木　保恵　　岡崎　由起　　引地　由佳
・数学嫌いをつくり出す原因を本校生徒よりさぐる
……33
渡部　　進
・ Message from Mahurangi College, NZ ……45
ジョン・スコベル
・ニュージーランド修学旅行 ……48
庄子春一郎
・ドイツ滞在３年あれこれ ……54
佐々木芳輝
・高等学校におけるコンピュータ事情 ……63
高階　　公・若松　武徳
・我が国の人名習俗－複名習俗としての－ ……74
新関　昌利
・ヨーロッパ知識旅行 ……84
藤岡　昌之
・薄記会計１級合格を目指して ……91
坂爪　英夫
・シリーズPART Ⅳ「中国」……93
北京・長春の見聞
中国の近代史をみる
坂爪　英夫

編　集　後　記

２０００年３月　第１５号

巻　頭　言……加藤　雄彦

Ⅰ　研究報告
⑴平成７，８年度帰国子女教育研究 ……１
千葉　　浩
⑵高校生時代の「日の丸」掲揚、「君が代」斉唱と、その人格形成への影響について－「日の丸」「君が代」に関する一考察－ ……30
若松　武徳
⑶わが育英における語学教育－中国語教育について－ ……44
張　　言行

Ⅱ　平成11年度新任者研修の記録
⑴「講演会」……49
大学から見た、これからの青少年への期待
期　日　H.11年３月８日（月）16時より
講　師　東北大学総長・工学博士　阿部　博之先生
会　場　宮城野校舎　大会議堂
⑵「講演会」
コーチング科学について
期　日　H.11年６月18日（月）
16：30～17：50
講　師　順天堂大学スポーツ健康科学部、
コーチ学バレーボール研究室　河合　武司　先生
⑶平成11年度体育会運動部校内研修会
－コーチング科学講演会をきいて－ ……71
杉本　　真・進藤由里子
⑷北海道・東北地区私学学校初任者研修会に参加して－職業人である私学教員として「私学」というものをきちんと理解し、認識する－ ……74
鎌田千佳子
⑸北海道・東北地区私立学校初任者研修に参加して－21世紀が求める学力を育む学習とその指導－ ……80
佐藤　恵美

Ⅲ　研修旅行
⑴イギリス・アップランズカレッジ語学研修 ……85
千葉　　浩
⑵カナダ研修旅行記 ……96
秋山なみ江
⑶イギリス語学研修……104
武田由紀子
⑷1998年教養コース修学旅行下見報告（瀬戸内班） ……113
渡邊　泰伸

Ⅳ　歳時記
⑴NewYork Symphonic Ensemble
－Japan Concert Program 1998－
1.「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルと仙台育英高等学校混声合唱団・仙台育英学園秀光コース・秀光中学校オーケストラ・ジョイントコンサートを終えて」……122
牛渡　　純
2.「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルジョイントコンサートに参加して」……126
中村　桂子
3.「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルジョイントコンサートの合唱指導」……129
横山　　功
⑵ケニヤからのメッセージ……135
エライジャ・J・ギタオ
⑶オランダからきた柔道人－オランダからやって来た柔道家たちとの交流記－……139
箱島　道泰

Ⅴ　英文中文目次要旨……142

編　集　後　記

２００１年３月　第１６号

巻　頭　言……加藤　雄彦

「トピックス」
「一瞬に賭けたエアピストル」
－シドニーオリンピック・エアピストル競技出場稲田容子先生応援記－……１
沼田嘉一郎

Ⅰ　研究報告
⑴「開かれた学校経営」
～集めるPTAから、集まるPTAをめざして～ ……６
沼田嘉一郎

Ⅱ　平成12年度研修の記録 ……13
⑴「第１回教職員研修会」
「社会に背を向ける青少年の心の問題」
講　師　宮城県中央児童相談所次長　本間　博彰氏
⑵「進学CLUB講演会」……27
「生きる喜び」－ガンとの戦いにうち勝って－
講　師　千葉　勇作　氏
⑶「第２回教職員研修会」……44
「オリンピックの活躍とキューバスポーツ」
講　師　キューバスポーツ省
ロベルト・ゴンザレス　氏
⑷「指導者講習会」
「中国のスポーツ事情」　講　師　　孫　国華　氏

Ⅲ　研修旅行
⑴教養コース　中華人民共和国　中国研修旅行の記
「大きな一歩－中国５日間の旅」 ……57
佐藤　　學
⑵教養コース　英語語学研修
「英語での初めての生活はスケッチブックと」‥70
佐々木仁志

⑶英進コース　カナダ語学研修
「語学研修　犬ですら英語でしか反応しない」‥82
芳賀　良光
⑷韓国研修「韓国の古都慶州を駆けぬける」
第16回コーロン杯高校区間マラソン大会招待参加記録 ……………………………………90
遊佐　隆司
⑸外国語コース　ヨーロッパ語学研修
「すばらしき体験」
「What a LOVELY experience ！」
－イギリス（チャタム）語学研修を終えて－‥‥97
渡辺有紀子
⑹特別進学コース　英語語学研修
「心豊かな日々」－イギリス・アップランズ・コミュニティ・カレッジ語学研修－ …………111
佐伯　達二

Ⅳ　英文・中文目次要旨 ……………………129

編　集　後　記

２００２年３月　第１７号

巻　頭　言 …………………………加藤　雄彦

「トピック」
「キューバ訪問」
訪問の記録 …………………………………1

Ⅰ　研究報告
イギリスの教育改革 ………………………14
若松　武徳

Ⅱ　平成13年度研修の記録
⑴講演
こころの担任 ………………………………22
仙台市教育長　阿部　芳吉
指導者のあるべき姿勢と今日の日本スポーツ現状 ……………………………32
帖佐　寛章
⑵研修記録
「本校における国際交流」
－平成13年度第41回東北地区私学教育研修会国際教育部会－ …………………………………49
大場　　幸
⑶開放講座「生き生き学級」の実践 …………63
船島　敏之

Ⅲ　研修旅行
⑴教養コース　ニュージーランド研修旅行
「育英学園の教師であればこそ」 …………67
佐々木　功
⑵英進コース　英国語学研修 ………………76
「貴重な経験」　山川眞理子

Ⅳ　歳時記
「少林寺拳法国際大会2001」出場実施報告書‥‥88
佐々木英明

Ⅴ　英文中文目次・要旨 ……………………92

編　集　後　記

２００３年３月　第１８号

巻　頭　言 …………………………加藤　雄彦

「トピック」
「全国制覇」夢達成に胸を張り。………………1
佐藤　達雄
「～千人の思いよ届け！～バンブーオーケストラ」‥3
相良　信恵

Ⅰ　平成14年度　研修の記録
⑴「21世紀の情報教育」－図形と画像処理－ ……10
小林　祐喜
⑵仙台育英学園高等学校における公文式英語学習の導入について～ The report on the introduction of Kumon English Method at SENDAI IKUEI GAKUEN HIGH SCHOOL ～ ………………26
日野　　彰
⑶平成14年度私立学校初任者研修
北海道・東北地区研修会参加報告 …………32
石山かおり

Ⅱ　研究報告
⑴文章指導についての一考察
－小論文入門編として－ ……………………41
齋藤　典子

Ⅲ　研修報告
⑴教養コース
中国研修旅行　研修旅行で学んだもの ………66
佐竹　伸彦
⑵英進コース
イギリス語学研修 Letters From Cambridge
（ケンブリッジからの便り） ………………82
進藤　　満

Ⅳ　英文目次・要旨

編　集　後　記

２００４年３月　第１９号

巻　頭　言…………………………加藤　雄彦

トピック
クロアチアからの手紙 ……………………1
ドリカ・グロシニッチ

Ⅰ　研究報告
⑴通信制課程における教科指導－ビデオを利用した地球環境と生物界の変化について－……3
金田　敏宏
⑵投球速度の異なる投手の投動作の比較研究
－高校野球選手を対象として－……7
佐々木順一朗
平成15年度
順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究所
スポーツ科学領域コーチング科学専門分野修士論文
指導教官　川合　武司　教授
⑶第３期㈳日本経済団体連合会
キャリア・アドバイザー養成講座受講報告書……37
佐々木　豊

Ⅱ　研修旅行
⑴外国語コース　ニュージーランド語学研修旅行
ENCOUNTERING A DIFFERENT CULTURE
「異文化との出会い」……47
永井　　惇
⑵英進進学コース　ニュージーランド語学研修旅行
「はじめてのニュージーランド語学研修」……54
石田　昌彦

編　集　後　記

２００５年３月　第２０号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
ケニアからの留学生　サムエル・ワンジル（Samuel Kamau Wanjyu）君と書道の出会い－心の修行に－
……1
渡邊　章紀

Ⅰ　研究報告
⑴心豊かな生徒の育成をめざして
－合同LHRをとおして－　……5
秀光中等教育学校　ホームルーム委員会　代表
高橋　守雄
⑵宮城県高等学校商業教育研究会平成16年実務演習講習会受講報告　……15
佐々木英明・日野　　彰
⑶フォローアップ講座についての考察　……24
小野　仁也・櫻井　　順
⑷スピン軸は公転軸を目指す　……51
原　憲之介
⑸１年生の試行錯誤　……62
本木　真人
⑹宮城県加美郡色麻町　土器坂瓦窯跡の調査
－雷文縁４葉複弁蓮華文軒丸瓦を出土する色麻柵付属瓦窯跡の調査－　……78
仙台育英学園高等学校考古学研究部　古窯跡研究会

Ⅱ　平成16年度　研修旅行報告
⑴教養コース　北海道研修旅行
－有意義で事故の無い研修旅行の実践－……182
船島　敏之
⑵教養コース　中国研修旅行報告……187
瀬戸　信男
⑶秀光中等教育学校　スイスの自然環境保護への取り組み－ユーロスクールを通して感じたこと－‥193
小林　祐喜
⑷英進進学コース　ニュージーランド留学研修
－新たな発見を求めて in New Zealand－　‥‥199
高橋　美保
⑸英進進学コース　カナダ語学研修旅行……207
木村　啓子
⑹特別進学コース　カナダ語学研修
－自然を愛する国－……212
高根　　司

編　集　後　記

２００６年３月　第２１号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
青い目の剣士たち－スウェーデン研修から－……1
田中　裕子

Ⅰ　研究報告
⑴スペイン語の指導法の研究　……11
コレテス・レオン
⑵憲政初期の選挙運動の一形態　……23
井上　　祥
⑶トリプルＡ委員会の計画と取り組みについて‥‥31
トリプルＡ委員会委員長　佐々木英明
⑷MBPとKBPの比較
－国際収支理論を中心に－　……35
雫石　誠孝
⑸平成17年度
公文英語・英語Ⅰの関連性における考察　……46
高橋　美保
⑹部活動指導における一考察
－サッカー部三年間の歩み－　……70
吉井　秀邦
⑺創作脚本講習テキスト
－宮城県高等学校演劇総合研修会－　……76
渡部　　進
⑻古代東北における古瓦の研究　……83
渡邊　泰伸

Ⅱ　平成17年度　研修旅行報告
⑴特進コース
アイルランド・オーストラリア語学研修……122
日比野曜子
⑵英進コース　北海道研修旅行……134
伊藤　寿展・桜井　　順

⑶英進コース　イタリア研修旅行……148
池口真利子
⑷英進進学コース　カナダ語学研修旅行……159
石田　昌彦
⑸外国語コース　アイルランド語学研修……173
岡崎　由起
⑹フレックスコース　北海道研修旅行……180
大友　健一

編　集　後　記

２００７年３月　第２２号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
毎日書道宮城県高校生選抜書展団体賞
－第12回展～第16回展（2002～2006）
５連覇を叶えた仲間たち－……1
渡邊　章紀

Ⅰ　研究報告
⑴フォローアップ講座についての一考察　……13
加藤　美穂
⑵TOEIC/TOEIC Bridge教員向けセミナー
－「高校における活用事例」－2006－仙台に参加して－　……34
小野寺朋子・日比野真奈
⑶法律学の学問的特殊性
－その概念形成の仕方に注目しつつ－　……37
伊藤　剛
⑷特別進学コース　プラン2000実施報告
－平成16年～18年度の取組について－　……44
倉橋　真司

Ⅱ　平成18年度　研修報告
⑴英進進学コース　カナダ語学研修　……61
相良　信恵
⑵英進進学コース　北海道研修報告　……69
渡邊　章紀・文屋　祐介
⑶英進進学コース　英進コース研修
－膨大な歴史・文化の都イタリアを訪ねて－……94
佐竹　伸彦
⑷外国語コース
アイルランド・ドイツ　語学研修……109
岡崎　由起
⑸フレックスコース　北海道学研修……117
１班（男子）……冨栄　博行
２班（女子）……島倉　尚子
⑹秀光中等教育学校
「2006ユーロスクール」実施報告……127
前半……船越　總眞
後半　ダブリン班……千葉　浩
レンヌ班……石田真理子
エジンバラ班……脇　淳
⑺通信制課程　異文化体験ハワイ研修……156
大竹　聡美

編　集　後　記

２００８年３月　第２３号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
「仙台育英中学校創立記念誌」の発見とその内容について
―戦火を超えて残った大正12年２月発行の記念誌―
……1
渡邊理律子

Ⅰ　研究報告
⑴高等学校における日本思想を扱った学習指導について
―保科正之の思想と会津を事例として―　……7
倉橋　真司
⑵外国語コース１年生におけるPLPへの意識調査と家庭学習について　……18
北村　悦子

Ⅱ　平成19年度　研修報告
⑴英進コース　北海道研修旅行報告　……44
小野　仁也・及川　尚彰
⑵特進・外国語コース
2007年アイルランド・ドイツ語学研修……48
浅利　正雄
⑶フレックスコース　北海道学研修報告　……55
大岩　和良
⑷秀光中等教育学校
①グリーンスクール研修報告　……60
千葉　広高
②－１　2007ユーロスクール実施報告（前半）……66
千葉　浩
－２　アイルランド・ダブリン班（後半）松田　万理
－３　フランス・レンヌ班……小林　祐喜
－４　参加生徒レポート
⑴初めてのヨーロッパ……岩本　怜央
⑵私が感じたヨーロッパ……川岸　瑞歩
③第４学年自由研究論文　京都実地研修報告……103
芦立　俊雄・他
⑸通信制課程　異文化体験ハワイ研修……131
新田　玲子

編　集　後　記

２００９年３月　第２４号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
「グリーンフィールド」……1
吉井　秀邦

Ⅰ　研究報告
⑴平成20年度　第47回東北地区私学教育研修会報告 ……4
石田　昌彦
⑵第47回東北地区私学教育研修会報告 ……7
小林　祐喜
⑶小論文指導の着地点はどこに設定すべきか ……12
三浦　宗隆
⑷全国音楽教育研究会高等学校部会全国大会宮城大会報告 ……19
熊原　裕美
⑸国語教育における課題
－国語教育研修会に参加して－ ……22
島倉　尚子
⑹日本史の教材研究の試み
－「城下町」の場合を例として－ ……37
作間　克彦
⑺高校生における携帯電話の利用について
－フレックスコース１年生の調査から－ ……43
後藤　有希
⑻仙台市安養寺下瓦窯跡調査報告
－陸奥国分寺・同尼寺創建期の瓦窯跡－ ……47
渡邊　泰伸

Ⅱ　平成20年度　研修報告
⑴英進コース　北海道研修旅行報告 ……245
（前班）赤間由樹子
（後班）秋葉寿太郎
⑵特進・外国語コース
2008年アイルランド・ドイツ語学研修 ……263
小岩久美子
⑶フレックスコース
①北海道学研修報告 ……280
（男子）……高階　公
（女子）……高橋　葉子
⑷秀光中等教育学校
①グリーンスクール研修報告 ……296
田添万智子
②ユーロスクール実施報告 ……301
前半（スイス・ジュネーブ）……庄司　昌弘
後半（アイルランド・ダブリン）……木田智恵美
前半（イタリア・ローマ）……本木　真人
後半（フランス・レンヌ）……牛渡　純
⑸通信制課程　異文化体験ハワイ研修 ……333
新田　玲子

編　集　後　記

２０１０年３月　第２５号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
2009年「長春第十一高校」姉妹校締結訪問 ……1
赤間由樹子

Ⅰ　研究報告
⑴伝統芸能の継承に見られる教育のあり方
―ハワイ・フラにおける一考察― ……5
安住　陽子
⑵日中交流の架け橋に…　中国人就学生への取り組み ……27
岩渕　奈央
⑶理科教育の現状と今後の課題
― BU（理科）を通して ― ……35
寒河江華菜
⑷ニュース時事能力検定の授業への導入について ……38
秋葉寿太郎
⑸仙台育英学園陸上競技部（短距離ブロック）の活動報告と今後の展望 ……43
菅原　新
⑹アブソープション・アプローチについて ……47
雫石　誠孝
⑺書の楽しみ方　～いろいろな書の在り方の一考察～ ……50
渡邊　章紀

Ⅱ　平成21年度　研修報告
⑴英進コース　北海道研修旅行報告 ……71
早坂　憲人・高根　司
⑵外国語コース　韓国ソウル研修報告 ……79
青木　康博
⑶特別進学コース・外国語コース
ハワイ語学研修旅行報告 ……84
庄司　昌弘
⑷フレックスコース（多賀城校舎）
韓国ソウル研修旅行報告 ……95
阿部　綾子
⑸フレックスコース（宮城野校舎）
①北海道学研修旅行報告（女子）……104
池口真利子
②北海道学研修旅行報告（男子）……110
寺澤　信枝
⑹秀光中等教育学校
①第３学年ユーロスクール実施報告（前半）……118
倉橋　真司
②第３学年ユーロスクール実施報告（後半）……128
小岩久美子
⑺通信制課程　異文化体験ハワイ研修 ……131
新田　玲子

編　集　後　記

２０１１年３月　第２６号

巻　頭　言 ……加藤　雄彦

トピック
I-LION HAWAII SCHOOLにおける
ソーシャルスタディーズがめざすもの ……1
安住　陽子

Ⅰ　研究報告
⑴西洋倫理思想史におけるプラトニック・ラブ（エロス論）の系譜　―アンリ・ベルクソンの説を中心に―
……10
土屋　靖明
⑵高校野球の犠牲バントに関する一考察　……15
横山　　将
⑶育英祭での第２学年演劇上演報告　……22
河内　実華
⑷私の考える理想的な授業
～Brush Upを通じて感じたこと～　……32
髙橋こずえ
⑸気化熱を利用した燃焼実験と冷却実験　……36
相原ゆり子

Ⅱ　平成22年度　研修報告
⑴英進進学コース　第２学年北海道研修旅行報告
……39
山本　尚武
⑵外国語コース　2010年度TOEICエッセイコンテスト３位入賞について　―報告―　……49
鹿野　　洋・高橋　智子
⑶特別進学コース　ハワイILHA語学研修……51
石山かおり
⑷フレックスコース（多賀城校舎）
北海道学研修旅行報告　……62
千葉　陽子
⑸フレックスコース（宮城野校舎）
①北海道学研修旅行報告　……96
千葉絵美子・庄子　由美
②沖縄学研修旅行報告……101
小石純之介・佐藤　飛鳥
⑹秀光中等教育学校
第３学年ユーロスクール2010報告
①前半（９月６日～10日）スイス～イギリス‥105
石田真理子
②後半（９月11日～17日）フランス　……117
脇　　淳
⑺通信制課程　異文化体験ハワイ校研修報告‥‥134
新田　玲子

編　集　後　記

２０１２年３月　第２７号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
仙台育英獅子太鼓部 ― ダボス会議に参加して ― ‥1
高橋　葉子

Ⅰ　研究報告
⑴教育リーダーシップ理論における「同僚性」の理論とその実践的意義 ……7
石田真理子
⑵国語教育における文学的文章の読解
― 短歌を題材として ― ……17
鈴木　正明
⑶外国語コースにおける外国語指導についての考察
……20
小野　真弓
⑷本校における理科の指導について
― Brush Upを通しての一考察 ―　……26
井上　晶子

Ⅱ　平成23年度　研修報告
⑴英進進学コース
①第２学年北海道研修旅行報告　……29
髙橋　麻憂
②2011年度TOEICエッセイコンテスト特別賞受賞について（報告）……39
鹿野　　洋・岩渕　奈央
⑵外国語コース　ILHA研修に向けての準備と研修報告
……41
髙橋　美保・安住　陽子
⑶特別進学コース
①PLAN2000　山形疎開学習報告……65
髙橋　真理
②第２学年校外研修旅行報告　……73
鈴木　和弘・伊藤　信男
山下　秀範・小山　　格
⑷Tフレックスコース（多賀城）北海道学研修旅行報告
……82
後藤　有希
⑸Mフレックスコース（宮城野）沖縄学研修旅行報告
……89
佐藤　　絢
⑹秀光中等教育学校　第２学年ILHA研修報告 ‥‥96
安住　陽子・須江　　航・前澤　絵菜
⑺通信制課程　異文化体験ハワイ研修報告……106
安藤　清一

編　集　後　記

２０１３年３月　第２８号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
秀光・特進共同理科実験講座「サイエンス・コ・ラボ」
……1
千田　芳文
第１回New York Shukoh Academy（NYSA）実施報告
……12
小林　祐喜

Ⅰ　研究報告
⑴地理の授業での工夫　……21
鈴木　和雄

⑵英進進学コースⅡ類における高度IT教育について
……29
日野　彰
⑶外国語コースの特色を生かした授業
～日本伝統文化の発表活動を通して～　……34
松田　万里

Ⅱ　平成24年度　研修報告
⑴英進進学コース　第2学年北海道研修旅行報告‥45
三浦　宏明
⑵特別進学コース
①ILHA研修 ……58
河内　実華
②京都研修旅行　……69
神谷　章嗣・三浦　仁志
⑶Tフレックスコース（多賀城）沖縄研修旅行 ‥‥75
伊藤　寛・千葉　陽子
⑷Mフレックスコース（宮城野）沖縄学研修旅行‥80
安部　恒俊
⑸秀光中等教育学校　第2学年　ILHA研修 ……94
遠藤　祐太
⑹日中国交正常化40周年記念事業　仙台育英学園
高等学校通信制課程　北京研修報告　……99
安藤　清一

編　集　後　記

２０１４年3月　第２９号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
インドネシア研修生の本校での短期研修について ‥1
新井　真未
第4学年　NYSA2013実施報告　……12
小岩久美子

Ⅰ　研究報告
⑴化学部の活動　……23
讃岐　果林
⑵情報科学コースに向けての取り組みについて‥‥33
島倉　尚子・庄司　邦彰
遠藤　誠・日野　彰

Ⅱ　平成25年度　研修報告
⑴英進進学コース
ILHA研修報告　……41
佐々木真野
第2学年北海道研修旅行報告　……54
及川　まり・本多　華菜
⑵特別進学コース　関西校外研修報告　……66
神谷　章嗣
⑶Tフレックスコース　沖縄研修旅行報告　……72
赤間由樹子・林田　茂・芳賀　賢祐
古田　夕子・二瓶　巧
⑷Mフレックスコース　沖縄研修旅行報告　……76
佐藤　優人
⑸秀光中等教育学校　ILHA研修 ……85
下浅　雄大
⑹通信制課程　広域通信制課程沖縄研修報告　‥‥95
戸崎　亮司

編　集　後　記

２０１５年3月　第３０号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
広域通信制課程　ILC沖縄東北研修旅行報告　……1
ICL沖縄　與那城慧太
国際バカロレア・デュアルプログラム（IBDP）導入について ……7
外国語コース　高橋　郁夫

Ⅰ　研究報告
⑴イマージョン授業（国際バカロレア準備）……10
外国語コース　ジェームズ・ドクターマン
⑵戦時期における「仙塩地方開発総合計画」（いわゆる金森構想）の登場と展開　……23
特進コース　雲然　祥子
⑶河川流域における遺跡動態の研究　……30
英進コース　佐々木　悟

Ⅱ　平成26年度　研修報告
⑴特別進学コース
関西校外研修旅行　……46
髙橋　真理
⑵情報科学コース
第1学年　会津研修報告書　……52
正木　智也
第2学年　校外研修報告　……57
千葉　陽子
⑶外国語コース
第2学年　ILHA研修報告 ……63
小野　真弓
⑷英進進学コース
ILHA研修報告 ……72
熊坂　治平
⑸秀光中等教育学校
秀光16期生　第4学年NYSA2014実施報告‥‥84
石田真理子
第2学年（18期生）ILHA研修報告……93
阿部　広大
⑹通信制課程
広域通信制課程沖縄研修旅行……105
ILC青森　竹ノ子千春

Ⅲ　その他
⑴日本・キューバ友好400周年交流事業　……114
外国語コース　岩渕　奈央
Tフレックス　白岩　幸浩

編　集　後　記

２０１６年3月　第３１号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
創立110周年記念講演
国際人育成のための提言～ILHAの実践を通して　‥1
ILHA（校長）　アール・大川

Ⅰ　研究報告
⑴数学同好会の活動 ……9
特別進学コース　佐藤　璽
⑵IB DP（国際バカロレア・ディプロマプログラム）に関する生徒の振り返り　……14
外国語コース　ジェームズ・ドクターマン
ケリー・ウィンター
高橋　郁夫
⑶3DCGゲームソフト作成　……27
情報科学コース　遠藤　誠
日野　彰

Ⅱ　平成27年度　研修報告
⑴特別進学コース　関西校外研修旅行 ……32
菅野　直幸
⑵情報科学コース　沖縄研修旅行報告　……37
山田　大
⑶外国語コース　ハワイ研修報告　……42
石田真理子
⑷英進進学コース　沖縄研修報告　……52
北村　悦子
⑸フレックス・技能開発コース
サッカー部女子沖縄遠征・交流会　……66
林田　茂
⑹秀光中等教育学校
NY研修報告 ……70
本田　朋
ハワイ研修報告　……77
阿部　広大
⑺広域通信制課程
沖縄研修旅行　……89
ILC青森　加藤　宏明
職場体験実習報告　……98
ILC沖縄　照屋　恵美

Ⅲ　東北地区私学教育研修・ブロック別指導者研修報告
⑴教育課程（私学教育）……111
秀光中等教育学校　坂内　玲子
⑵生徒指導（私学教育）……114
フレックスコース　白岩　幸浩
⑶進路指導（私学教育）……116
秀光中等教育学校　倉橋　真司
⑷道徳教育（ブロック別）……119
フレックスコース　渡邊　章紀
秀光中等教育学校　小林　祐喜

編　集　後　記

２０１７年3月　第３２号

巻　頭　言……加藤　雄彦

トピック
探究講座TTTチャレンジの成果……1
特別進学コース　神谷　章嗣
孔子課堂の可能性……7
外国語コース　鈴木　茂幸
国際バカロレア受講生徒の学術的論文　……13
外国語コース　石田真理子

Ⅰ　研究報告
⑴文芸部の活動について　……23
特別進学コース　下田真奈美
⑵英進進学コース英語科研究報告　……27
英進進学コース　熊坂　治平
⑶国際バカロレアと日本のカリキュラム：２つは両立できるのか　……31
秀光中等教育学校　ケリー・ウィンター
笠原　千尋
⑷IB生物におけるアクティブ・ラーニングの事例研究
……36
外国語コース　ジェームス・ドクターマン
笠原　千尋

Ⅱ　平成28年度　研修報告
⑴特別進学コース　関西校外研修旅行　……43
齋藤　美咲
⑵外国語コース　ハワイ研修報告　……48
赤間　ゆき
⑶英進進学コース　沖縄研修報告　……57
佐々木正人
⑷フレックス・技能開発コース
沖縄研修旅行（フレックスコース女子）……66
杉田　愛
沖縄研修旅行（技能開発コース）……71
小野　仁也
⑸秀光中等教育学校
NYSA 2016 実施報告 ……75
伊藤　沙絵
ハワイ研修報告　……81
倉橋　真司
⑹職員研修報告　……90
多賀　努

Ⅲ　その他
⑴広域通信制課程ILC青森校の状況報告 ……104
ILC青森所長　三笠　勝彦
⑵職業調査とジョブミーティング―12職種の職業に関する調査とその発表活動を通して― ……115
情報科学コース　志賀　貞昭
⑶公文式学習（国語）実践の成果 ……119
フレックスコース　島倉　尚子

編　集　後　記

２０１８年３月　第３３号

巻　頭　言 ……加藤　雄彦

トピック
高等学校通信制教育の質の向上について …… 1
村上　　淳
剣道部サイパン遠征・文化交流活動報告 …… 5
加藤　裕之
IBにおける教科指導実践について ……12
Enabling and Disabling Factors in Implementing International Baccalaureate Programmes in Japanese Secondary Schools: Curriculum, Pedagogy and Assessment
Kerry Winter

Ⅰ　研究報告
⑴Surface活用に向けた授業における取組について ……20
情報科学コース　坂入　崇紀
日野　　彰
⑵IB DP（国際バカロレア・ディプロマプログラム）デュアルランゲージで行うTOK授業 ……24
外国語コース　石田真理子
⑶教科BU研修会について ……27
教科教育センター　板垣　徳昭

Ⅱ　平成29年度　研修報告
⑴秀光中等教育学校　カナダ研修報告 ……36
小保内陽大
⑵情報科学コース　沖縄研修旅行報告 ……51
加藤　芳己
⑶フレックス・技能開発コース　沖縄研修報告 ……56
多賀　　努
⑷英進進学コース
沖縄研修報告 ……63
渡邉　光稀
韓国研修報告 ……71
狩野　常俊
⑸外国語コース　ハワイ研修報告 ……78
岩渕　奈央
丹野まさよ
⑹職員研修報告 ……89
雫石　利光

Ⅲ　その他
⑴ILC沖縄校の状況報告 ……97
ILC沖縄所長　山内　一秀
⑵演劇部の活動について ……111
特別進学コース　赤間　ゆき

編　集　後　記

２０１９年３月　第３４号

巻　頭　言 ……加藤　雄彦

トピック
授業改革：協働学習の可能性 …… 1
Transforming the Culture of Teaching and Learning: An emerging collaborative learning community
Kerry Winter
仙台育英孔子課堂活動報告 …… 12
孔子課堂長　　板垣　徳昭

Ⅰ　研究報告
⑴デュアルランゲージで行うTOK授業のケーススタディ―PCK（授業を想定した教科内容知識）を意識したバイリンガル授業― …… 23
外国語コース　　石田真理子
⑵特進コースの英語4技能向上対策：「オンラインWeblio英会話」を活用したe-learning学習について …… 29
特別進学コース　　伊藤　　需
⑶仙台育英学園生き生き教室「√２ってなに」 …… 34
フレックスコース　　雫石　利光
⑷教科BU研修会について …… 43
教科教育センター長　　板垣　徳昭

Ⅱ　平成30年度　研修報告
⑴秀光中等教育学校　カナダ研修報告 …… 65
笠原　千尋
⑵特別進学コース　関西校外研修報告 …… 78
髙橋　真理
佐々木正人
⑶情報科学コース　沖縄研修報告 …… 84
船越　正志
野坂　有生
⑷フレックス・技能開発コース
沖縄研修報告（男子） …… 90
西山　大樹
沖縄研修報告（女子） …… 93
石川美紀子
⑸英進進学コース
沖縄研修報告 …… 96
藤倉　善将
台湾研修報告 ……108
熊坂　治平
⑹外国語コース　ハワイ研修報告 ……113
松崎　希莉

下浅　雄大
⑺仙台育英孔子課堂　第２回北京語学研修報告‥ 120
平成29年度孔子課堂長　鈴木　茂幸
⑻職員会津研修報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 123
フレックスコース　雫石　利光

Ⅲ　その他
ILC青森校の状況と社会人養成講座について ‥‥ 128
ILC青森所長　三笠　勝彦

編　集　後　記

２０２０年３月　第３５号

巻　頭　言‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥加藤　雄彦

トピック
eスポーツ部の設立及びeスポーツ講座と今後の展望について‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 1
情報科学コース　村上　淳
日野　彰

Ⅰ　研究報告
⑴SDGsを意識した授業づくり ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 6
秀光コース　菊地恵美子
⑵新学習指導要領に向けた英語４技能の指導について ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 14
特別進学コース　新谷　仁
伊藤　需
安部　宏紀
⑶英進進学コースにおける英語課外学習‥‥‥‥ 21
英進進学コース　木村　汐里
⑷IB授業実践例 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 23
外国語コース　小湊　陽
⑸「せんだいまなびや」の導入‥‥‥‥‥‥‥‥ 33
技能開発コース　宮浦　靖次
⑹教科BU研修会について ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 52
教科教育センター長　板垣　徳昭

Ⅱ　令和元年度　研修報告
⑴秀光中等教育学校・秀光コース（高校）
カナダ研修報告　“Canada Study Abroad Trip”
‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 83
Kerry Winter
京都研修報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 92
加藤　隆寛
横山　佳絵
⑵特別進学コース　関西校外研修報告‥‥‥‥‥ 97
庵原　直樹
⑶情報科学コース　沖縄研修報告‥‥‥‥‥‥‥ 102
村　貴之
（4）フレックス・技能開発コース
九州研修報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 107
西山　大樹
九州（長崎）研修報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 110
寺澤　信枝
⑸英進進学コース　台湾研修報告‥‥‥‥‥‥‥ 116
五十嵐春祐
⑹外国語コース　ハワイ研修報告‥‥‥‥‥‥‥ 120
川村くるみ
⑺教職員研修会報告（講演会）
（「学習障害・発達障害について」）
フレックスコース‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 126
村岡　信章

Ⅲ　その他
ILC青森における本年度の活動状況報告 ‥‥ 132
ILC青森教頭　丸山　裕治

編　集　後　記

２０２１年３月　第３６号

巻　頭　言‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥加藤　雄彦

トピック
秀光コース20期生　TOK実践報告と振り返り ‥‥ 1
TOK担当　加藤　隆寛
「国際バカロレアMYPとDPを活用した中高一貫教育の取組」‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 5
仙台育英学園IBチーフコーディネーター
高橋　郁夫

Ⅰ　研究報告
⑴秀光中学校・秀光コース　オンライン授業実績報告
‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 10
秀光中学校ICT推進委員　小保内陽大
⑵『先輩、教えて下さい！』～ICT活用からOn-Line授業へ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 18
特別進学コース　御代　力夫
⑶情報科学コース　デジタル教科書における取り組みについて‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 25
情報科学コース　金福　瞭
加藤　芳己
⑷公私間教員交流研修報告
外国語コース　小林　祐喜　28
仙台二華高等学校　上島　佐輔　35
⑸ICT推進の取り組みについて ‥‥‥‥‥‥‥‥ 37
英進進学コース　五十嵐春祐
⑹ICT推進の取り組みについて ‥‥‥‥‥‥‥‥ 41
フレックス　技能開発コース　山田　大
フレックス・技能開発コースにおける広域通信制併修の取組‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 43
フレックスコース　小原沙希子
学級だよりの有効性～学級だよりを核にした学級経営の研究～ ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 50
技能開発コース　舘和　廣

Ⅱ　令和２年度　研修報告
⑴英進進学コース
　地域探求研修報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
尾林さつき

Ⅲ　その他
⑴Office365・Zoomオンライン授業研修報告　・・ 79
秀光コース　小保内陽大
情報科学コース　日野　彰
⑵数学問題間の類似性認識に関する考察～数学における問題づくりを通して～・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
広域通信制課程ILC沖縄　新里　孝雄
スクーリングにおける理科実験の意義－ILC沖縄の理科実験教室－・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
広域通信制課程ILC沖縄　渡邉　正俊

編　集　後　記

２０２２年3月　第３７号

巻　頭　言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・加藤　雄彦

トピック
国内初BTECセンター開設プログラムを英進コースに導入・・ 1
BTECセンター長　千葉　慎

Ⅰ　研究報告
⑴令和３年度３・４学期　秀光コース１学年
総合的な探究の時間実践報告　－遠田郡美里町の総合的研究－　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
秀光コース　倉橋　真司
⑵令和４年度実施の「新学習指導要領」に向けての取り組み
＝「観点別評価」のための「評価規程」改訂と「評価システム」作りについて＝・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
カリキュラム・マネージャー　小松　敦
⑶情報科学コースにおけるslackの活用について
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
情報科学コース　吉野　裕貴
能動的学修におけるICT活用・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
情報科学コース　佐々木りせ
⑷外国語コースにおける韓国語課外活動報告・・・・ 33
外国語コース　尹　惠靖
⑸英進進学コース　ICT推進の取り組みについて
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
英進進学コース　五十嵐春祐
⑹「総合的な探究の時間」におけるデジタル教材の活用について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
フレックス　技能開発コース　佐藤　佳蓮
⑺保健体育科の観点別評価についての研究報告・・ 46
技能開発コース　地﨑　大知
⑻数学の授業における教材への取り組み・・・
数学検定講座について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
フレックスコース　雫石　利光

Ⅱ　令和３年度　研修報告
外国語コース
　第２年次　松島SDGs探究研修報告 ・・・・・・・・ 54
岩渕　奈央

Ⅲ　その他
英進進学コース
　各教科教育センターのブラッシュアップについて
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
英進進学コース　金澤　瞭

編　集　後　記

編　集　後　記

新型コロナウイルスについては、感染拡大から４年目に入り、長期的な対応が求められる段階に入ってきました。今年度も、加藤雄彦理事長・校長先生の先を見通した英断が、学園内における感染及びその拡大のリスクを可能な限り低減し、多くの生徒や保護者が抱えている学習や勉強の遅れなどの多くの不安を和らげ、学園生徒が安心して学校生活を送ることができました。

先生方の研究においても対外の研究会での発表をはじめ、各教科におけるBrush Up研修会も、外部からの講師を招いての充実した研修となりました。一方で、ICTなど新しい教育教材を活用した授業実践報告などが、各コースから寄稿されました。紀要の紙面を借りて、皆様に紹介できることを嬉しく思います。また、新しい学校施設として今年度開校した東和蛍雪校舎での実践報告も寄せられ、仙台育英学園の「歴史」と「建学の精神」を学べる研修施設として、また、先人が作り上げてきた学園生としての誇りと愛を醸成できる場として、大切な施設であることがわかる報告となっています。是非ご覧いただき、多くのご意見をいただきたいと思います。

今年度も、研究紀要の内容はClassiにアップします。全ての教職員の方々に、ご一読いただきたいと考えたからです。

今後も先生方の研究や研修の内容が生徒達に還元でき、本学園の生徒の学びがより一層深まっていくことを祈念します。

研究紀要38号編集担当　　岡﨑　徹郎

発　行：秀光中学校・仙台育英学園高等学校
所在地：〒983－0045　宮城県仙台市宮城野区宮城野二丁目４－１
電　話：022－256－4141

研究紀要38号

巻　頭　言 …… 加藤　雄彦

トピック

（1）令和４年度「東和蛍雪校舎研修」のまとめ
…… 東和蛍雪校舎担当　佐々木邦治

（2）高等学校「地理総合」におけるドローンを活用した授業実践
…… 特別進学コース　伊藤　恵

Ⅰ　研究報告

（1）秀光中学校・秀光コース
国際バカロレア ディプロマプログラム「言語A：文学」授業実践報告
…… 秀光コース　横山　佳絵

（2）情報科学コース
対面授業でのClass活用の可能性 …… 情報科学コース　佐々木りせ

（3）令和４年度 外国語コース Stanford e-Sendai Ikuei 報告
…… 外国語コース　今川　里菜

（4）観点別評価の実践 …… 英進進学コース　竹ヶ原孝則

（5）エナジードの導入 …… フレックス・技能開発コース　針生　清人

（6）情報BUについて …… 教科センター情報担当　日野　彰

（7）ICTを積極的に活用し双方向性を重視した授業
…… 社会科コンダクター　小松　敦

（8）スラックで英作文を指導してみた！ …… 英語科コンダクター　御代　力夫

（9）教育×メタバースの試行から見えた成果と課題
…… 広域通信課程　ILC青森　村上　淳

Ⅱ　令和4年度　研修報告

外国語コース
第２年次　ハワイ研修 …… 武田由紀子、テリー

情報科学コース
第３年次　沖縄研修旅行 …… 武田　若葉

英進進学コース
第３年次　沖縄研修旅行 …… 松井　有生

フレックス・技能開発コース
第２年次　沖縄研修旅行 …… 河原愛利沙

Ⅲ　その他

総目録（第１～37号）

編　集　後　記